

季刊

唯物論研究協会編集

思想と現代

1992

28号

特集 ● 岐路に立つ哲学

スコラ
アカデミア
学院と広場の狭間で

〈対談〉

哲学における「方言」と「共通語」

…… 沢田允茂／島崎 隆
学校哲学からの脱出
哲学への要求

…… 中村行秀
長き不在
今、マルクス主義哲学の課題を考へる

…… 伊藤セツ
へぶつく・えんどん
生活に根ざした哲学へのいざない

…… 向井俊彦
…… 島崎 隆

発売元

白石書店

東京都千代田区神田神保町1-28

白石書店

☎03(3291)7601

現代思想論

ブレモダン
モダン
ポストモダン批判

吉田傑俊著

ブレモダン、モダン、ポストモダン思想と政治・社会との対応関係を批判的に分析。2472円

現代思想の潮流

鯨坂 真著

広松渉、竹内芳郎、浅田彰、K・ボパーなど現代の「流行」思想を分析、批判する。2575円

「新しい思考」と

岩崎允胤著

史的唯物論

ゴルバチョフの「新しい政治思考」を哲学的に分析。2369円

日本科学的

守屋典郎著

社会主義序説

日本におけるマルクス主義理論の形成と発展の過程。9270円

協同組合資本論

服部知治著

豊富な史実と新しい資本概念を駆使し協同組合資本の新たな方向性を提言する。8240円

知識社会学の諸相

河村 望著

日本を特別視する政府要人発言の背景には、「万世一系の天皇」復活を企てる保守的政治家、思想家の動きがある。こうした日本社会がはらむ問題を思想的・文化的・社会的背景から探る。2369円

ソビエト研究

年2回刊

ソビエト研究所編 定価各1009円

第1号特集 ペレストロイカを追う

大江泰一郎／杉浦一孝／上島武／岡田尚三 他

第2号特集 経済改革の動向

田中雄三／望月喜市／エリ・アバルキン／桜井郁子 他

第3号特集 ソ連農業とペレストロイカ

栗原小巻／大崎平八郎異色対談／岡田進／小原剛 他

第4号特集 ソ連における民族問題

早川弘道／高野雅之／山内昌之／松永裕二 他

第5号特集 ソビエト文学の近況

山田和夫・清水俊男（座談会）／草鹿外吉／川崎浹 他

東京都千代田区神田神保町1-28

白石書店

☎03(3291)7601

季刊

思想と現代

1992年 2 月

第28号

唯物論研究協会編集

発売元 白石書店

●季刊 思想と現代 28号●

特集 岐路に立つ哲学——スコラ アコラ学院と広場の狭間で

■対

談

哲学における〈方言〉と〈共通語〉

哲学とその原風景
様々な「哲学」とただ一つの哲学
哲学における方言と共通語
形而上学の没落と哲学の方途
現代における哲学者と科学者
科学的な知と価値的な選択
マルクス主義、あるいは共産主義について
哲学教育について

沢田 允茂
島崎 隆

7

■特集 論文

学校哲学からの脱出

哲学への要求

長き不在

今、マルクス主義哲学の課題を考える

中村 行秀 31

伊藤 セツ 41

小原 秀雄 53

向井 俊彦 65

■ぶっく・えんど

生活に根ざした哲学へのいざない

島崎 隆 75

■現代科学からの

人間像

宇宙の構造と人間

池内 了 78

■トポス

「開戦50年を考える市民の集い」について

吉田 裕 90

他者の発見Ⅱ 征服と「文明」の野蛮

——コロンブス、アメリカ到達500年——

伊藤 宏一 93

■古典探訪

人間認識起源論序論

エチエンヌ・ボノ・ド・コンディヤック

訳／解題

古茂田 宏 98

■文化時評

一九九一年一〇月三日、そして四日

中河 豊 111

■一般研究論文

ジル・ドゥルーズの唯物論——彼のスピノザ論を中心に——

河津 邦喜 119

書 評

ベラー・他著『心の習慣』

仲島 陽一 131

ヘーゲル論理学研究會編

バダンテール著『母性という神話』

山口 京子 133

『ヘーゲル大論理学 概念論の研究』

岩佐 茂 134

■前号批評

社会主義の危機からの再生を求めて

奥谷 浩一 141

特集●岐路に立つ哲学——学院と広場の狭間で

スコーラ

アゴラ

特集にあたって

若きヘーゲルが「分裂こそ哲学の要求である」と述べ、分裂し混乱した現実が〈哲学〉を要請するとともに、〈哲学〉成立のために分裂と混乱が必要条件であると大胆不敵にも宣言したとすれば、二十世紀末にあたり「人類生存の危機」ともいわれる状況を展望する哲学・思想革命がいまこそ要求されるべきでしょう。たしかに、一般大衆も非哲学畑の人々も、「いまこそ新しい哲学が必要だ」と口をそろえています。そのことに哲学研究者はけっして気をよくすることはできません。現代はまた、根強い哲学不信の時代でもあって、既成の、安易な哲学はすでに拒否されています。こうして、誤解を恐れずにいえば、〈哲学の生存権〉がいまや問題にされているといえるのではないのでしょうか。

現代が哲学に要求する新しい問題とは、たとえば、眼前に進行する社会主義の崩壊、うち続く戦争と内乱、地球規模での環境と生態系の破壊、貧富の世界的規模での格差、次々

と獲得される自然界の秘密、予想を越える科学・技術の進歩などであり、つまるところ世界のあり方と人間における生きる意味の解明なのです。

本誌では、「哲学とはなにか」というような問題を正面切つて掲げたことはあまりありませんでしたが、つねに哲学・思想と現実との接点を求め続けてきました。本誌は、「なぜ哲学をやるのか」——「哲学（研究）がそこにあるからだ」式の自閉症気味の〈哲学〉を退け、私たちを取り巻く生々しい現実的問題の解決に有効な、開かれた〈哲学〉を模索してきました。

しかし現代において、真面目にじつくりと考えるという意味での〈哲学〉に不利な状況証拠を列挙すれば限りがありません。知のファッション化やジャーナリズムの商業主義化の傾向、真面目がヘネクラと蔑視される傾向、若者の〈保守化〉現象と思想離れ、哲学的知のスタイルを圧倒する、スピーディーな技術的・情報的な知のスタイルの発展、などなど。問題と真正面から向き合う、正統派の〈哲学〉にとっては、やりづらい時代ともいえましようが、〈哲学の生存権〉は現実が要求する諸問題に真摯に取り組むことによってのみ確保できると確信しています。

今回は改めて、現代にあつて〈哲学〉とはなにか、〈哲学〉にいまなにができるのかという問題を取り上げ、哲学研究者には〈哲学〉そのものに直接向き合っていたいただき、非哲学畑の方には「哲学への要求」や「私と哲学との関わり」を展開していただきました。この特集が、人々の心の深部にまで響き、そこに新たな理性の光を投げかけるきっかけになればと希求するものです。

島崎 本日はお忙しいところ、またお暑いところをお越し

いただきまして、ありがとうございます。今日は、哲学の研究者として戦後の歴史とともに歩まれたキャリアをおもちの沢田允茂先生にお話をおうかがいしたいと思っています。

『理想』（一九九〇年、六四六号）に「現代日本の哲学者」という特集がありますが、そこでは先生の学問的キャリアが〈論理、風景、生命〉という三段階にわたる展開として説明されていきました。今日は、沢田先生に、現代の哲学・思想はどのような状況におかれているのか、また哲学というのは、いま何をなすべきなのか、そういったことを中心にして、その他、文化、環境、教育などの問題を含めてお聞きたいと思っています。

● 哲学とその原風景 ●

先生のお書きになった『認識の風景』（岩波書店）の「序」のなかに、先生の経歴が書かれているわけですが、きわめて興味深く拝読しました。北支、ニューギニアでの六年間の軍隊生活というのは、先生の原体験とも言えるものではないかと思います。そこで先生は、あらゆる職業とか階層の人々と

対等な生活をし、そういった人たちのむきだしの欲望とか感情、恐怖心、思いやりの心、狡猾さ、そういったものを体験され、「人生劇場」のなかで自分の役割を演じたとおっしゃっていますが、そうしたご経験がその後の先生の哲学の方向を決めることになったのでしょうか。

沢田 戦争の体験をしたということは、私の哲学の学問の内容には全然関係がないと思います。もしあるとすれば、哲学をする、あるいは学ぶ、そしてまた人に教える、——つまり一言で言えば哲学を追求していくときの態度、哲学の内容ではなく、哲学者としての人生に対する私自身の態度のなかに、非常に大きな影響があったと思います。

僕たちの時代の人たちは、戦争に巻き込まれる前にそのことを予感していた。というのは、戦争を拒否しても、監獄へ送られ、それから戦場に送られるわけですから、戦争反対という気持ちは、僕にしても中学時代からずっとあったのですが、しかしそれをそういう形で表現できない。大学を卒業すれば、否応なしに戦争に巻き込まれるということで、僕だけでなく同じように悩んだ人は多かったと思います。それで二、三人の仲間とよく語り合ったことは、戦争なんてまったくだらない、否定すべきものだけれども、そして反対すべきも

対 談

哲学における〈方言〉と〈共通語〉



島 崎 隆

沢 田 允 茂



のだけれども、現に我々がそれからどうしても逃れられないような状況にあるのだとしたら、むしろその中に飛びこんで、その渦中であって、嵐の中に揉まれながら、できるだけ戦争の被害をどうやって少なくするかという事で闘う以外にはないだろうということでした。自分のもっている思想、哲学というものを試すいい機会だという形でそれを利用すべきだろう、そういう気持ちで非常に強かった。ですから結局、後で考えてみますと、哲学の学問はその間何もできなかったけれども、いろいろな人にぶつかり、とくに僕はニューギニアのようなところで、お金も何も通用しないところで原始生活をしたということが大きな体験になったのだと思います。それは、哲学というよりも、人間のあり方にかかわることですね。——これが僕は、哲学の本当の原点、出発点なのではないかと思っています。ソクラテスにしてもみな、そういうところから出発しているわけですから。

ところがだんだんと哲学の伝統が作られ、大学というところで学生として本ばかり読んで、試験でいい成績をとって、大学に残って、また本ばかり読んで、今度は一八〇度黒板に背を向けて、大学時代に貯めこんだものを吐きだすというようになった。しかし、そういうのが本当の哲学のあり方だろ

うか、そうではないはずだという思いがずっとありました。

戦争が終わって日本に帰ってから、僕は慶応の助手に残り、一年くらいして講義をもたされ、助教授になり教授になるという、ごく普通に哲学を教える人たちがとつたのと同じ道をたどったわけですけれど、もしも最初からそうであつたなら、僕の哲学は、哲学の学説はあつても根はないような、自分の生活に結びついていないものになつてしまつたと思います。その意味では、戦争の体験をしたということは、少なくとも僕の哲学にとって、そしてあえて言えば、哲学者にとって本当に必要な、そしてひいては哲学にとつても必要な哲学の根を体験したと思っています。

島崎 戦争というのは悲惨な体験ですが、そこでへ哲学の原点^①といえますか、たんなる知識ではないものを獲得されたということになるのでしょうか。

沢田 獲得したというとおかしいですが、実は人類がはじまつて以来、人間はみんなそういうことにまみれてきたわけですね。しかしある時期から哲学者というと、そういうことはやらないで本ばかり読んで大学で教えているようになった。しかし哲学というのは、たとえば医学や物理学というような専門科学とはちがうわけで、こういうことは哲学には必要な

んだと思います。

編集部 それはしかし、戦争だけではないですね。平和の場合でも同じことが言えるのではないですか。

沢田 いまの日本では、戦争というと戦争をしかけるというイメージで受けとられています。たとえば僕の知っているギリシャ人などは、自分たちは戦争をつうじて自由や平和を獲得したんだ、戦争をしかけられたから戦つて自由と平和を勝ちえたのだと言います。日本のいまの若い人たちは、戦争なしに自由があると思つていられるけれど、そうではない。歴史のなかでそういうことはあり得なかつたわけです。たとえば、おそらくロシア革命以前の知識人たちだつて別の形でそういう運動にとりくんたわけで、ですから、なにも戦争体験だけではないと思います。

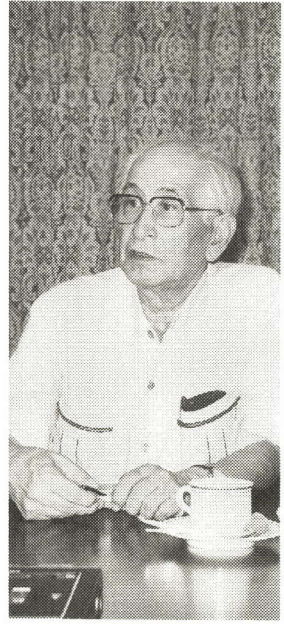
島崎 先生は、帰国されて、また哲学の勉強をなさつたということですが、そのときの戦後の思想状況というものは、実存主義とマルクス主義のあいだにはさまれて、どうも両方になかなかついていく気がしない、そこでたまたま言語分析とか数学的論理学に接して、それに魅力を感じられたということなのですが、そのあたりが先生の哲学の内容の、大まかな基本方向になるのでしょうか。

●様々な「哲学」とただ一つの哲学●

沢田 僕の大学での卒業論文は、実存哲学についてのものでした。それで戦争が終わって帰ってきたときに、六年間もブランクがあったわけですが、一応実存哲学に関心をもっていましたので、また、前のを続けるところから出発したわけです。最初の頃はしばらくのあいだ、外国の本はほとんど入ってきませんでした。その頃僕は、慶応の通信教育テキストとして『現代フランス哲学』というのを書いたのですが、それを書いているときにはサルトルの著作は入ってきていなかった。ですから、今はもちろん絶版にしていますが、その本はベルグソンどまりでサルトルの哲学は入っていないんです。実存哲学というと、かつてはハイデガーとかヤスパース流のものでしたが、ドイツが戦争に負けたということもあって、ドイツからは新しい実存哲学は入ってこなくなった。フランスからサルトルが入ってきてはじめて、戦後に新しい形で実存哲学がさかんになったわけです。しかし、それをやりながらも、たとえば渋谷で仲間とお酒を飲みながら、酔っぱらって、俺は実存的になった（笑い）などと言いあって、しかし

翌朝になって酔いがさめると夕べ思ったことは何も残っていなかったなどということがありますが、実存にめざめるなどというのは、結局それと同じことではないだろうかなどと思ってきました。ちょうどその頃、ブリス・バランの「言語の本性と機能」という本を偶然読みまして、そこではじめて言語というものがいかに人間を魔術にかけてしまう、あるいは意味がはつきりしていないのに、わかったような気にさせてしまうものであるか、ということを知りまして、非常にショックを受けたんです。そこではじめて、言語というものにもう少し気をつけなければいけないと思いはじめたわけです。言葉のあやで実存主義に夢中になることに懐疑を覚えていたこの頃、昭和二六、七年でしたか、東京大学とスタンフォード大学とのあいだのアメリカン・セミナーがあつて、そこではじめて論理実証主義というものを教わりました。論理実証主義は、正式にはその時はじめて入ってきたのだと思います。そういうことで、僕としてはしかたなく学生時代に実存哲学に入っていたわけですが、戦後、言語のむなしさを覚え、それが論理実証主義と結びついたということになります。

島崎 先ほど、渋谷のバーの話がでしたが、先生はそこで大森莊蔵さんと知り合ったとお聞きしたのですが、大森さ



沢田允茂氏

んの影響なども強かったのでしょうか。

沢田 そこには大森君だけではなく、フランス文学やフランス哲学の人がたくさん集まっていました。当時は、学校がすむとすぐに家に帰らずに、そこへ行く。そうするとみんな集まってくるわけで、酒を飲みながら徹底的に議論をし、最終電車で帰るという生活でした。その議論のなかで、いままで疑問に思っていたことがだんだん形をとってわかってくる。なかでも、大森君などと議論をしたことは大きな利益でした。

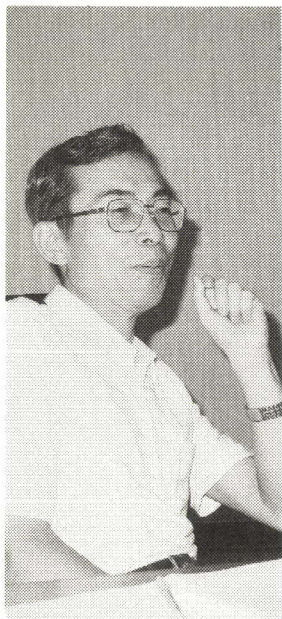
島崎 先生にとってそういう学問的な議論をするということとは、ごくあたりまえのことという感じを受けました。それから帰国後、マルクス主義とか実存主義とか、イデオロギーとか主義主張を超えて、思想のサークルを作られたと聞いているのです。

沢田 僕自身、東京が出生地なのですが、元籍は高知県で、

育ったのは愛媛県の松山で、中学校の半分は九州の久留米で、中学を出て、それからまた東京へと、要するに僕にはもともとの土地がないんです。ということは、僕には生まれながらのイエというものがない。居たところがイエである。思想についても、何か一つの、ドメスティックな思想のなかにいるのではなくて、あっちへ行きこっちへ行きしていますから、あちこち行ってみるとその土地その土地の偏見というものがある。しかしやっているとこのなかには共通のものもある。そういうことを無意識のうちに考えたわけです。だからいろいろな学派のものでも、読んでみるとおもしろい。そうかといって全部の学派になるわけにもいかないから、そのなかの共通なものに関心をもつという形になったのではないかと思います。

島崎 先生の哲学上の立場というのは「分析哲学」といってよろしいのでしょうか。

沢田 いや、僕は周りからは論理実証主義者とか分析哲学者だとか科学哲学者だとかいろいろ言われていますが、僕自身は、哲学または哲学者という一つの言葉しかないと思っています。昔からそう言っているんです。僕は哲学のなかのある



島崎 隆氏

側面に興味をもっているが、それで申し訳ないとは思っていない。それは出発点だということです。昔から哲学というのは全部、そういうものだったのではないですか。日本では哲学専攻のほかに倫理学専攻がありますが、こんなのは日本だけです。哲学のなかで、倫理に関心をもつか、認識に関心をもつか、あるいは論理に関心をもつかということで、それはまったく自由なんです。それに名前をつけて固定することによって僕は反対なんです。だから僕はいまでも、自分が分析哲学者だとは思っていません。哲学者でしかないと思っています。

島崎 先生はハーバード大学に留学されていらっしゃいますが、そのことも合わせて先生のお話をうかがっておりますが、先生が非常に民主主義的な方だという気がします。哲学

は一つだとおっしゃいましたが、しかし哲学には強固なイデオロギーの壁がありまして、それを超えて実りのある議論とかコミュニケーションをするのはなかなかむずかしいと思うのですが、そういうことはなかったでしょうか。

沢田 確かに戦後には、マルキシズム、実存哲学、それ以後からは論理実証主義も導入されました。僕が哲学を大学で始めた頃は、哲学をやっているというと、知らない人から、ドイツ哲学をやっているのですか、アメリカ哲学ですかというように言われまして、国の名前で哲学を分けるわけですから、そうすると僕は困っちゃうんです。例えばドイツのカントばかりやっている人なら困りはしないでしょうが、僕はそうではない。しかし考えてみると、マルキシズムはロシア哲学でもないしドイツ哲学でもない、世界中にあるわけですね。実存哲学や論理実証主義、現象学だって同じです。ということでは国で分けるということは意味がなくなってきたということです。それと同様に、学派で分けることも、将来、意味がなくなってくるだろうと僕は思っています。学派で分けなくてはならないというのは国家主義と同じで、思想上の国家主義といった状況があるからではないだろうか。

● 哲学における方言と共通語 ●

編集部

フランス哲学やドイツ哲学というのはナンセンスであり、実存哲学をやっているというのも変な話だという先生のお話はよくわかるのですが、にもかかわらず、実際にはそういう壁はけっこうあったと思います。マルクス主義というのもかなり強固な方言をもっているわけで、何を言ってもその方言ではこう聞こえてしまうというようなことはなかったのでしょうか。

沢田 僕が学校に残って助手になったとき、僕より六年上の助手で、松本正夫というカトリックのスコラ哲学をやっている人がいました。学生時代から僕は、しょっちゅう彼の家へ行って議論ばかりしていたんですが、考えてみるとカトリックのスコラ哲学の用語というのは、マルクス主義と同じように独特の用語をもっているんです。ところが非常によかったことは、松本正夫という人は、自分の信仰としてはカトリックで、これは絶対に曲げないのだけれど、哲学を語るときには必ずしもカトリックの宗教をださなくて議論のできる人だった。そういうことでいろいろ議論をしていくと、方言で

語っていても、必ず共通の問題がある。僕はその共通の問題を、僕自身の方言で、だけれどできるだけ特別の方言ではないようにしながら話したわけです。

島崎

先生はそういう共通の問題を探っていくことが大事だとおっしゃいますが、たとえば哲学で、真理とは何かという問題がありますが、真理というのは、議論をしていけば一致して探りあえることができるのだとお考えなのでしょうか、それともそういうことは別に、議論することが大事だとお考えなのでしょうか。

沢田

僕はハーバード大学から帰ってきました、半年ばかり授業をもたないですんだので、そういう学派に無関係な共通の議題を議論する場所をもたなければならぬとつくづく感じましたので、みんなに呼びかけて、寺沢（恒信）君もいました、実存哲学やカトリックの人などいろいろ集めて、哲学とは何か、存在とは何か、などという主題について議論をする会をつくりました。そのなかに確か、真理とは何か、というのも入っていたと思います。これを議論していくと、たった一つの答えになるということはありえないかもしれないが、答えがどのような形に絞られてくるかという絞られ方はだいたい決まってくる。そういう形で、たった一つの答え

を探すというのではなく、解決していく共通のいくつかの道が見えてくるということなんです。しかし、あまりにも自分のイデオロギーや方言の単語（概念）に夢中になっていると、その道すら見えなくなってくる場合がしばしばある。

編集部 その研究会をもたれたのはいつ頃のことでしょうか。

沢田 一九五六年の秋から翌年の春にかけて、五、六回やりました。場所は務台理作先生のお宅、松本正夫氏のお宅、岩崎武雄氏のお宅、そんなところをグルグル回りながらやっただけです。

編集部 哲学の共通語をもつことが一つの進歩だとすれば、先生からみて、その頃から今日まで哲学は、そういう方向で進歩しているとお思いでしょうか。

沢田 速度が遅いか速いかはありますが、やはり進歩していると思います。たとえばスコラ哲学は崩壊しましたが、これは、カトリックがスコラ哲学を神学の基礎とするというところでずっと続けてきたのが、一九六二年の教会の改革路線で、必ずしもスコラ哲学を基礎とはしないということになった。そんなことで現代ではカトリックでは独特の方言はなくなってきた。だから逆に、神学もできなくなったのかもしれない

が、それをきっかけにして新しいものができるかもしれない。しかしこれは、宗教がどうなるかという問題にかかわってきますから、簡単には言えない。

そして、もう一つは実存哲学とマルキシズムですね。マルキシズムにも最初は独特の方言がありました。しかし、寺沢君などと一緒に共通の議論をしていた頃、それまでは日本のマルキシストの哲学者は自然科学や数学に関心をもっている人は少なかったのだが、当時ソビエトではそうでない傾向が出てきたこともあったのでしようか、彼なども科学に関心をもっていて、それからマルキシズムのなかでも自然科学のいろいろな問題が取上げられるようになった。そうしますと、このあたりから共通の問題を考えるようになる。最後にちよつと特殊な言葉が出ますが、そこをがまんしておけば（笑）、だいたい共通な言葉で語れるんです。そのうちソビエトのなかでも、唯物弁証法というものはどういふものかという議論のなかで、一時、サイバネティックスがその科学的表現だと言われたりしましたが、そうなってくるとだんだん共通の言葉がでてくる。その一番いい例がK・ポパーに対する評価です。彼のフォールシフイクーション〔反証〕の理論（後に予測と反駁と言ひ換えるのですが）について、彼が日本にきた

ときに私が、あなたの言っていることはネガティブ・フィードバックと同じではないかと質問したら、彼は、サイバネティックスなどという新しい学問は大嫌いだと言って、このような言葉を使うことを拒絶したんです。しかし、二、三年たつて彼が発表した論文のなかではこのフィードバックという言葉を使っている。同じ頃ソビエトでも、弁証法をサイバネティックスの言葉で表現しはじめた。かつてはポバーとマルキシズムは対立していたのに、同じ用語を使うようになってきた。そういうところを見ても、進歩はしていると思います。

島崎 六〇年代までは、哲学の世界では、マルクス主義と実存主義と分析哲学とが三つともえになっていたが、安保があり、大学紛争があつて、八〇年代、九〇年代になると、そういう枠ではとらえられない哲学の状況が出てきています。そういう哲学の現状については、いかがお考えでしょうか。

沢田 哲学の大きなスクールが孤立して、相互に分離しているということは、かつて小さい国家が分離していたと同じことで、それがコミュニケーションがだんだん密になつてくると、否応なしにその壁がとれてくる。それは思想の社会でも同じだと思います。もちろんそのためには、現実の世界のいろいろな形のコミュニケーションが、哲学・思想に先だつ

て、例えば外交とか経済とかのコミュニケーションが盛んになり、一つになるということと結びついていると思います。

たとえば現象学というものも、フッサールのいろいろな遺稿がベルギーに残つたけれど、同時にアメリカのシカゴを中心に現象学の根拠地ができ、そのことによりアメリカでも現象学に関心をもつ人がたくさん出てきた。そのうち、いまのコンピュータ・サイエンスと現象学が関連したものの見方をするようになる。これはアメリカで、コンピュータが盛んになったところで、コンピュータにどういふものが知覚されるのか、コンピュータがみる世界はどういふものかを分析していくときに、現象学のいろいろな考え方が非常に役に立つということ、そういう面からも現象学がアメリカで急速に発達した。同じようにして、現象学のいろいろな問題と言語分析との交流が盛んになって言語をどう解釈するかということが問題になると、解釈学と結びついてくる。

●形而上学の没落と哲学の方途●

島崎 そういえば確かに、弁証法、構造主義、解釈学、分析哲学など、わりと癒着してしまっているような状況が生ま

れていると思います。コミュニケーションが密になって、哲学がますます盛んになっていくのだったら、われわれもハッピーだと思うのですが、しかし実際にはマルクス主義なども、今回の東欧・ソ連の崩壊、危機という状況のなかで力を失っていき、実存主義も影響力が少なくなってきた、また、いわゆる分析哲学もかなり変貌してきたと思います。そのなかで何か、哲学全体の地盤が沈下してきているというイメージもあるのですが、哲学の不幸な状況といえますか、そのあたりのことはどうお考えでしょうか。

沢田 形而上学は、アリストテレス、スコラの伝統のなかで問題になったものですが、現代そのような基盤がなくなると、形而上学という形での哲学は影をひそめた。後に残るのは、認識論、倫理学、これは社会哲学と結びつくかもしれませんが、こういったものです。認識論のなかには言語もはいりし論理もはいるわけですが、かつての哲学の認識論は、いまでは一人立ちしようがない。というのは、コグニティヴ・サイエンス（認知科学）というのが出てきて、かつてのように主観・客観という、それだけの概念で認識を考えることがもはやできない。言語と思考との関係、コンピュータが出てくると——機械が生きているかどうかは別にして——思考と

言葉のメカニズムがわかってくる。こういうものを無視して認識論を進めるわけにはいかない。この点、倫理学はその性質上、科学の成果とはそれほど結びつきがなかったのですが、最近の生命倫理ということになると、やはり結びついてくる。この問題を押し進めていくと、生態学的な、エコロジカルな倫理というものが今度は当然問題になってくる。そうするとこれは昔ながらの自然と人間という哲学だけの問題ではなくて、エコロジーの科学的な具体的な知識を背景にしなければならぬ。その意味ではやはり、かつてはそれぞれのスクールで孤立していた哲学というものが、やっと科学的成果を通じて一つになりかけてきた。哲学が孤立して、他の科学と分離して何かをやるうとしたのではうまくいかない。そこで他の科学との結びつきがどうしても必要になる。いままでの哲学者は科学をあまりに無視してきたために、科学をもっと勉強しなければならぬ。そのことのために、まだ新しいものが次に出てこないという状況なのではないかという気がしています。

世間一般の人も、科学の成果が目に見える形でどんどん出てきているので、そういうものに興味を持つ。コンピュータや人工頭脳、宇宙論などのなかには、つきつめていくと哲学

的な問題があるわけですが、一般の人はわかりやすい面から夢中になって追いかけるから、その奥にある哲学の問題には気がついていない。哲学者自身もそれにはつきりした解答を与えていないということもあるので、哲学がジャーナリズムで取り上げられる機会も少なくなってきたのではないでしょう。

島崎 いま哲学について言うと、古い、オーソドックスな哲学が減んでいて、新しい事実や科学的な認識と結びついた哲学がまだできていないという状況で、過渡期にあるということでしょうか。

沢田 これは「哲学の終焉」に関する問題で、哲学の運命そのものの問題だと思うのですが、日本哲学会でもそういうシンポジウムをやれといっているのですが、みんな逃げてやろうとしない。僕は、いまは過渡期で、そのうち哲学が新しい体勢で問題を提起するのか、あるいは消えていくのか、ということとは、そう簡単には言えないと思っています。ひょっとしたら、消えていくかもしれない。僕がまず考えるのは、フィロソフィという言葉がギリシャで最初にうまれたのは、それまでの宗教、あるいは神話を否定して、科学的なものの見方に置き換えようとしたことがきっかけだったわけです。

タレスも理論物理学の最初です。しかし、一度に科学的なものの見方に置き換えることはできないから、古い神話的な語り方への批判から始まり、そこから哲学というものがうまれた。ソクラテス、プラトン、アリストテレスになると、初期とは変わってきますが、それでも当時の幾何学や物理科学を基礎にしている。だから哲学というのは、古い形の思考形式、すなわち宗教、神話と科学とのあいだをとりもつ問題から起こったような気がしています。しかし、科学ですべてがわかるということは永久にないでしょうから、哲学は永久に残るだろうとは思っています。

ただし、科学がだんだん進歩していけば、ひょっとしたら、哲学はやるのがだんだん少なくなってくるかもしれない。オーギュスト・コントは非常におおまかにですが、そのようなことを言っています。現実をみると、いまのところはそういう方向に進んでいる。

編集部 科学の発達につれて、哲学が発言できる領域はだんだん小さくなっていき、最後には消滅するだろうというシナリオも書けないことはないでしょうね。しかし、それはやっぱり違うのではないかと思います。

個別科学者は、自分のフィールドを決めて、そのなかでは

絶対の自信のある発言をするわけですが、そういう個別科学が総体としてわれわれにどういう意味があるのか、あるいはお金をこれだけ出して研究しなければならないのはなぜなのかということは、そういう科学者の発言からは出てこない。大学などでは、そういう専門家集団の力がありますから、専門家の独走といえますが、そういうものに疑問を投げかけたり、ここまではお前にできるがここから先はできないというような限定をする活動が必要で、哲学というのはそういう意味ではやるのがたくさん出てくるのではないかという印象をもっているのですが。

●現代における哲学者と科学者●

沢田 僕も、結論は同じことを考えています。ただそのときに、それでは哲学科というところで哲学者を養成するときは何をしたらよいのか。科学のなかだけで解けない問題に対しても、科学を知らないでいたのでは何もできない。かつてのアリストテレスやライブニッツのように、一人でいろいろな科学をやるということは、いまはもうできないけれど、少なくとも何か一つ、専門に関心をもちながら、そのなかで哲

学をやるほかはない。あるいは哲学は、ナマコの骨のようにばらばらになって、それぞれの科学のなかに散らばって、個々の科学のなかで哲学の問題を提起するようになるかもしれない。そうした場合、そうした人を養成するための哲学教育はどうしたらいいのかという問題は、まだ解決できていない。医学や物理学のなかで哲学者を養成するのかというと、やはり困ってしまう。そうかといって、いまのような哲学教育でいいかというところも問題である。

島崎 哲学が新しい科学・技術の成果を学んでいかなければならないということは、確かにそのとおりだと思いますけれど、やはり哲学にはものごとを普遍的に扱うという側面があると思います。ですから、個別の自然科学に精通しても、そこからその成果を学んで哲学というものを作ると、どうしても一面的になるのではないか。社会の現象がわからなければ、哲学的な普遍的な問題というのは扱えないですし、逆に社会科学ばかりやると、今度は自然科学的な問題のアプローチの仕方が消えてしまう。しかも、一つの全体的世界観をつくっていくことを含め、科学者が前提としている問題というのがいくつもある。例えば、そもそも世界とは何か、認識や実践とは何か、人間が生きる意味といったものは、哲学の仕

事として残ると思うのです。

沢田 まったくおっしゃるとおりです。ただ、そういったものがどういった形で残るのかということが問題だと思えます。ギリシャの時代やデカルトの時代だったら、一人のなかに全部をとりこんで、彼が何冊も本を書いて、いまおっしゃったようなことができた。しかしいまはもう、そういうことはできない。だからこれから先は、それぞれの科学に詳しい哲学者が集まって、ダイアローグ（対話）をして、そのなかから共通のものをつくっていかなければならない。これはまさにある意味でプラトンやソクラテスの世界に帰ることではないかと思っています。ダイアローグをしないで、自分だけが勉強してモノローグで、哲学的・普遍的な問題をまとめていたのが中・近世までの哲学でしたが、プラトンやソクラテスの時代の精神に帰ってみると、哲学にはやはりプラトンが言ったようにディアレクティケー〔問答法〕が必要で、一人の人間の頭のなかで勝手に上上げるものではない。場合によっては、現場の科学者と哲学者が集まって、議論をすることも必要なのではないだろうか。

島崎 本当におっしゃるとおりですね。ところで、先ほど「科学」ということで言いましたのは、科学・技術の発展の

仕方が異常で、地球環境を破壊しているような側面をもっているということですね。このことに対して、科学・技術の問題が国民に不安を与えているということがアンケートにも出ているということなんです。

沢田 科学・技術が環境を破壊しているということがわかったのは、科学・技術のおかげではなかったかと、僕は思うんです。その証拠に、環境問題を最初に提起したのは、哲学者ではなく、科学・技術をやっている人で、彼らが自分で気がついた。科学・技術にはマイナスの面もあるが、それを直していくのも科学・技術なんです。もちろん科学・技術だけではダメですが。

島崎 それは、先生がおっしゃっている「実践理性」の方が先だというお話につながっていくと思います。先生は『認識の風景』のなかで、環境破壊なども念頭におかれながら、エコロジ的な発想も導入して、「環境の風景」、「知覚の風景」ということを提起されていらっしゃる。私は非常に共感しました。で、そういう場合ですと、必ずしもものごとを数学化してとらえたり、論理計算でとらえるのは絶対化されえない。むしろ生活世界のなかで生きている人間の全体がもっている生物としての感覚・知覚とか、そこに映る風景とい

うものを大事にすると環境破壊の異常さなどもわかってくるのではないかということをおっしゃって、さらに「風景の科学」ということも提唱されています。先ほど先生は、自分とはくに分析哲学者ではないとおっしゃいましたが、分析哲学などでの感覚・知覚論といいますと、いわゆるセンス・データ〔感覚与件〕といいますか、非常に細かいところから厳密に構築しているという態度だったと思うのですが、そういったことに対する批判、あるいは過去の哲学に対する反省のようなものがあるのでしょうか。私には、分析哲学や従来の哲学が「感覚の風景」を見落とすような認識論をもっていたように思えるのです。

沢田 まさにそのとおりだと思います。ただそれは、科学抜きで哲学者のスペキュレーション〔思索〕だけでできるかというと、やはりそれはむりで、科学と哲学が一緒になってやらなければならない。いま宇宙論のなかで、「人間原理」(Anthropic Principle) ということが問題になっていますが、これも考えてみますと、コスモロジーと生物と人間の文化、認識といったものはつながっているものなんだという目からもう一度見直そうということですね。極端にいうと、物理学と生物学と人文科学、哲学を何とかつないでいこうとい

うことだ、とも言えます。

島崎 先生の『論理と思想構造』(講談社学術文庫)は、『認識の風景』の続編というか、それをさらに展開したものだという印象をもちましたが、そのなかで近代自然科学の理論というのは、純粹に客観的にテストされて数量化されていくものだから、それ自身が特に環境破壊の原因になるわけではない。それは自然一元論の立場に立っているものであって、そういう「理論理性」に問題があるのではなく、「実践理性」といいますか、それを応用してやっていくことのなかに問題があるのだというようにおっしゃっていました。しかし、自然を科学の目で見ても、量化し分析していくという見方そのものが、一つの限定された見方なのではないでしょうか。たとえば、ニュートン力学のような法則が自然に働いているというのは客観的事実だと思うのですが、そういう方向で自然を眺め、そういう自然が価値があるのだということで展開していくと、やはりそれは一つの価値にもとづいた自然観ということになるような気がしますね。

沢田 これは、一言で答えにくい、難しい問題だと思いますが、たとえばニュートンの運動法則は、彼が観察や数学的な推理によって発見したものであって、彼の世界観ではない。



しかしそれとは別に、彼はやはり宇宙観をもっています。それは、中世的なキリスト教的な宇宙観に対する反対です。彼は『プリンキピア』の最後のところで、神がこれをつくったのだと言っていますが、その神とはもはや、キリスト教的な神ではない。科学史で有名なA・コイレが『閉じた世界から無限宇宙へ』のなかで言っていますが、宇宙の構造が神によってつくられたということが原因になって、宇宙のいろいろなことが起こっているというのが中世的な考え方です。これに対しニュートンは、まず自然法則が先にあって、その結果として宇宙というものが考えられる。つまり、宇宙をつくったのは神だが、神は一度つくったら、もうその後は登場し

ない。ここが中世的な考えとはまったく違うところです。

島崎 どういう自然観を作っていくかというところで人間の方に価値の選択があったと思います。たとえば、有機体的自然観で科学を進めるのか、それとも機械論的な自然観でいくのか、それは時代で違う。アリストテレスなどですと有機体的なもので、近代では機械論的なものが基調になっている。

現在の近代科学を推進してきた自然観は、やはり機械論的な自然観だったと思います。その方が人間にとって操作しやすいですから。しかし、たとえばエコロジーなどを唱える人は、いろいろな立場があると思いますが、彼らの自然観は機械論的なものというよりは、最初から人間が自然のなかに組み入れられていて、人間と自然が交流していくような、そういう自然観です。いずれにせよ、どういう自然観を選択するかというところが問題で、近代の科学技術、とくに環境破壊などに結びつく自然観というのは、特定の価値を前提にしているという気がします。

沢田 それは言えますね。しかし、それではいまの環境破壊に反対する運動を進めていく場合の自然観とはどのようなものかということですが、これについてはまだはつきりとしたイメージが定着しておらず、何となくドイツ・ロマンティ

ークの自然のようなものが出てきている。どこまでが自然で、どこからが人工的なのかということの区別は非常にむずかしい。

島崎 先生は「環境の風景」「風景の科学」ということを言われて、結局最終的には、近代科学の理論的基礎の狭さを正さなければいけないということを言い、新しい科学が必要だと提唱されていますね。そうでなければ、人類は滅亡するかもしれないとも言われました。そこで二つのことをおっしゃっていたような気がしました。一つは、そういう新しい科学というのは、具体的にはサイバネティクスとかシステム論の立場であるということ、もう一点は、単に事実の問題だけではなくて、その価値の選択も可能にするような科学が必要なんだということだとうけたのですが。

沢田 サイバネティクスというのは、いまではそういう



言葉を使わなくてもいろいろなところに考え方が応用されて現実に使われているわけですから、一つの学問というよりも技術や常識みたいなものです。弁証法的な考え方も、言葉はちがいますがそういうものを求めているところがある。システム理論というものも、もう少し展開していくものだと思っていたのですが、どうもやたらにシステムの絵ばかり描いていて、具体的な中身、一つ一つの問題を経験を通じて分析して、そのうえでどういうシステムを作るのかというところがあまり進んでいない。

島崎 システム論に対する批判としては、たとえば、いろいろな諸現象の横の連関はとらえられるけれど、本質的なものをどう把握するのかという縦の連関はとらえられないということがあります。

沢田 おっしゃるとおりだと思います。人間のいろいろな現象は、異なった階層、ヒエラルキーからなっていて、一つの階層の中でシステムを作るのは楽だけれど、別々の階層の関係をシステム化することはむずかしい。このところが、いまおっしゃったような問題となっている。

ポジティブ、ネガティブなフィードバックというものは、階層がちがっていても成立すると思っています。ただ、それ

が具体的にどうなっているのかというところまではわかっていない。それは脳と意識、脳と心の問題がはつきりしていないことに問題があるのではないかと思っています。

●科学的な知と価値的な選択●

島崎 もう一つの価値の選択の問題はどうでしょうか。これは事実と価値、存在と当為という問題にかかわると思うのです。

沢田 科学と価値の問題は、説明すると長い話になってしまいますが、この二つのものはぜんぜん無関係なものだとは言えない。非常に簡単な話が、いまでもしも自殺したいという人がいたとして、自殺をするためにはどういう毒を飲んだら苦しまずに死ねるかということは科学的にわかるわけだから、それがわかれば目的が達成される。そうすると、科学的認識が自分の目的のために役立つわけだから、その二つのものはぜんぜん無関係だというわけではない。ただ、どのように関係しているのかということは、具体的なシチュエーションを考えてみると、一般論では何も説明していないと思います。こういう言い方は、逃げてるように聞こえるかも

しれないけれど、ほんとうは逃げていないと思っています。そういう意味では、僕は倫理学としては、状況倫理の立場をとっています。ただ「人を殺すなかれ」といっても、状況によつて人を殺さなければ他の人を殺すことになる場合だつてあるわけだから、どういう状況で、というコンテキストなしには答えられない。科学と価値との関係もコンテキストなしには一般には答えられないという気がしています。法律の文章ではこうきまっているが、裁判では、具体的な状況をよく調べて罪をきめるわけですね。それと同じだと思います。

島崎 ところで、事実と当為の問題でもそうですが、昔の論理実証主義や分析哲学や言語分析から、最近では「新科学哲学」など、かなり立場が様変わりをしてきています。たとえば分析哲学ですと、言語分析によって言葉というものを明瞭に使っていくとか、あるいはセンス・データみたいなものに還元していく立場とかあったと思うのですが、いまの新科学哲学だとむしろセンス・データに還元できない立場をとる。フッサールやハーバース・ヴァイトゲンシュタインなどもそうでして、むしろ解釈学的・社会学的に科学にアプローチするということに変わってきています。このようなことについてはどのようにお考えでしょうか。

沢田 僕は最初から、科学というのは一種の社会現象で、社会的要求というものを抜きにして生じたわけではないので、そういう面から取り扱わないとだめだと言っています。一人の科学者としてどういう新しい理論を展開させるかということにかぎれば、それは社会とは関係なしにそればかり考えていればいいことだけれど、それは一人の科学技術者の個人的発見の心理を取り扱うときの態度である。

島崎 その点でいいますと、トマス・クーンの理論でユニークだったのは、自然科学においても社会科学と同じように、科学革命でガラッと変わるのであって、後の人がみると整然と真理が雪だるま式に累積された結果のように見えるけれど、現場に立つとぜんぜん違うということでしたね。

沢田 クーンの場合、ホッペはそれだけではないと思いますね。というのは、急にガラッと変わるといっても、突然みんなが一度に賛成をするということではなくて、やはりみんなを納得させるための証拠がなければならず、その証拠はきちんとしたものがあるわけです。

島崎 クーンのパラダイム論のようなものをどう評価したらよいかということは、唯物論者のなかにも賛否両論がありまして、たとえば事実の理論負荷性というのがクーンやハン

ソンにありますね。最初に理論が枠組としてあって、それではじめて事実を読みとるのであって、裸の事実というものはないというようなことですが、これが極端な形で主張されると本当の真理などないのだということになってしまうのではないか、それでいいのだろうかと思うのです。こういう主張に対して反対すると、おまえは遅れていると言われる状況が哲学界にある。これはどうも、文化論的相対主義といいますか、それぞれの文化は対等で、一つの正しいもの、優越な真理などないのだという、混沌とした不透明な世界のイデオロギー的な反映ではないかというような気がします。

沢田 クーンの理論負荷性の場合には、コンテキストがちゃんとあってそのなかで言われているわけですから、それをすべてに広げてしまうのはあまりにも単純すぎると思います。たとえば視覚で言いますと、ここに赤いバラがあるということとは、正常な視覚をもっていれば一致する。これは理論負荷ではなくて、感覚負荷とも言えるもので、他の動物にはそうは見えないかもしれないが人間同士は同一の感覚器官をもっているから、共通な判断が成立するわけです。これが言葉や理論での表現ということになると、その国語の背後にある文化の全体が入ってくることであり、これは感覚負荷の上に成

立する文化負荷ということになり、さらにその上に理論負荷というものが考えられる。しかしものごとのすべてに同じように理論負荷があるわけではない。どのレベルの負荷をどう受けているかによって、見解の限界というものがわかる。このように考えていけば、先ほどおっしゃったような危惧は起こらないのではないかと思います。

島崎 私が考えているのは、哲学の教育などをやっているとして、いまの若い人とディスカッションをしますと、わりと真理相対主義、真理合意説（真理は対象の正確な反映ではなく、すべての人々の合意であるという考え）が強くて、ものごとを論理で体系的にとらえようという見方を拒否するところがあって、やりにくさを感じていることです。

沢田 若いうちは何でもはい、ふつたものの言い方をけつこうするもので、僕は若い人たちと年齢の高い人たちのあいだにそれほどいい気があるのですが、いまおっしゃったような、共通のものは何も無いのだという人がいたとすれば、たとえば数学の計算のような明らかに共通の理解になっていることを例にして反論します。真理相対主義を主張する人だって、計算をまちがえておつりが少なくて自分が損をするとなれば、共通の真理を認めざるをえなくなるも

のです。

島崎 やりにくさを感じるといいますのは、学生の方に哲学をやる必然性がないような気がするということなんです。私は大学紛争がはなやかなときに大学を卒業した世代なんです。すが、ああいうすごい問題がつきつけられていると、どうしたって必死に自分の考えを構築しようとする。しかしいまの人たちというのは、むしろいまのままの考えでよくて、考えを変えるのを嫌うし、哲学的な七面倒くさい議論をなんでするのという感じがするんです。

沢田 自分の思想をきちつと作りあげることなしに、いまの生活にどっぷり浸っていれば、そんなことはしなくても生きていかれるというところから、それはくると思います。そういう学生に対しては、僕は教室でそのような態度の中に色々な矛盾を指摘して相手を追い詰めるという、ソクラテスがソフィストに対してやったのと同じことをやっています。そしてこれが哲学そのものだ、と言っているのです。

島崎 先生のお話を聞いていますと、古代ギリシャの対話、議論、コミュニケーション、そこにいつももどる必要があるということをおっしゃっているのかなという気がします。

沢田 それが哲学のルーツのような気がするんです。片方

に自然科学、物理学があつて、もう一方にギリシャ神話の流れがあつた。この両方を批判することが、本当のことを知ろうとした愛智の精神だと思えます。

編集部 いまだって毎日のようにTVから流れてくるのは、神話にあたる消費社会であつて、これは圧倒的なものです。

沢田 僕が神話ということで想定するものの中には、国家・民族といった概念もはいつています。これが原因となつて戦争が起る。だから僕は、みんなが僕のように生まれ故郷のないコスモポリタンになつた方がいいと考えています。

島崎 相手の問題意識のなから矛盾をみつけだしてそれを自覚させるというのは、まさにソクラテスの「無知の知」ですが、これは言うのはかんたんですが、やるのはこちらも相当疲れますね。

沢田 これはポバーのいうフォールシフケーション（反証例をみつけること）で、物理学者、自然科学者だと当然のことなんです。自分がいいアイデアを思いついたときに、一番気になるのは反対の例がないだろうかということです。ところが哲学者というのは、そういうことを考えない。僕も昔、実存哲学をやっていたときには、そんなもの（反証を気にすること）は必要ないと思つていましたが、言語に対して警戒

的になつて科学的な考え方を知るようになつて、哲学者にもそれが必要だということがわかつた。

島崎 ポバーの反証可能性の議論は、僕も気になつていまして、普通のマルクス主義ですと、ポバーはやつつける対象なんです。考えてみるとJ・S・ミルが『自由論』でそれに近いことを言っています。反証可能性の議論というのは、科学的な基準であると同時に、民主的であることの基準でもあると思います。

沢田 そう言つてもいいでしょうね。カントが完全にそうです。『純粹理性批判』で、自分のやり方は物理学、自然科学に範を求めて実験によつて認められるものだけを認める、それによつて否定されるものは認めないということを言っていますから。

編集部 そういう反証・検証のプロセスを経て、人間は相互に分かりあう地点に近づいてきたのだというのが先生のお話の主旨だと思うのですが、あることが反証されるということとはもう少しむずかしい問題をかかえているのではないのでしょうか。クーンのパラダイム論も、ポバー批判の文脈の中で形成されたということですし……。さらに言えば、理論と理論の非和解性と言いますか、相手の言っていることの意味が

わかつたうえで、なおかつ賛成できないということが最終的にはあるとも思います。

沢田 それは、現実には立場や職業によってもちがうでしょうし、昔の社会で言えば、支配階級と被支配階級のあいだにその区別があったし、いまでもあると思います。理屈ではわかるけれど理解できないというのは、階級間だけでなく、たとえば夫婦げんかなどの場合もそうですね。では、それをなくしていくにはどうしたらよいか。一方が他方を押しつづせばいいのか。資本家が労働者を押しつづせば資本家自身のためになるし、その逆でもうまくいかない。ソビエトなどで起こった事態は、そうすることによって自由な発想をも押し殺してしまったところにある。だから階級闘争をどのようにやるかということは、いままでのソビエトの社会主義では示されていない。マルクスにすれば、あれはマルクス主義とはまるつきり外れたところで起こっていることになるでしょう。だから、ソビエトの社会主義が何となくお手本になってしまっていたのが、僕はまちがいなんだと思います。

●マルクス主義、あるいは共産主義（マルクス主義）について●

島崎

先生は、マルクス主義ないし唯物論に対して回想されていて、そのなかで、過去のマルクス主義は、ある権威づけられた考え方に同調するか、さもないければマルキストではないという二者択一的な傾向が強かったと言われていました。また、マルクス主義の最大の課題の一つは、哲学的な世界観と科学的な方法とを統一することだともおっしゃっています。が、やはりそれができていないところに、今日の社会主義の崩壊状況がもたらされた原因があるとお考えなのでしょうか。

沢田

僕は、共産主義という理念を、いま新たに真剣に考えたうえで、いまの資本主義を変えていかなければならないと思っています。しかし、ソビエトがやったやり方はかえってマイナスではなかったか。あの国を滅ぼしたのは、共産主義ではなく、一党独裁による官僚のビューロクラシーと、一つの思想だけに全部を統一してしまおうとしたことにあるのではないかと思います。しかし、マルクスが言っている共産主義のなかには、そんなことは一つもはいつてない。だからあれはやはり、ロシアの古い前近代的な意識が支配したのだ

ろうと思います。そこが混同されている。いまソビエトがあるようになったからといって、共産主義は全部だめだというのは非常に危険だと思っています。

島崎 これまで先生は、対話とか議論の重要性、ポバーの「反証可能性」などについて話されてきましたが、結局、従来のマルクス主義では、そういう他の科学の成果をちゃんととり入れていないことになるのでしょうか。

沢田 そうだと思っています。それは、サイバネティックスの受け取り方に代表的にでていると思います。最初の頃、あれはアメリカの資本主義の理論だと言いだしたのはマルクシストの哲学者だった。で、そういう哲学者をやったのは同じソビエトの物理学者でした。僕はメキシコで第一三回世界哲学会があったとき、ソビエトの長老哲学者ミーチンと会いました。その前にも、ミーチンが日本へ来たときに松本正夫さんなどと一緒に会って顔みしりだったもので、一緒にピラミッドの山に登ったのですが、その頃のミーチンというのは、大名行列のようにいろいろな学者を引き連れていました。あれではミーチンが気にいらなことがあったら、それだけで全部だめになってしまうだろうなと思いました。そういうところがソビエトにはあった。しかしこれは、共産主義

とは何の関係もないことで、むしろ、資本主義よりもっと前の、古い封建体制がそのまま出ていると思います。

島崎 他方、資本主義をみますと、バブル経済が破綻して大問題になっています。以前、経済同友会の人が、日本の経営者には理念も哲学もないと言っていました。マルクスは、人間が労働力商品として扱われるという、そこに資本主義の一番の問題を感じていたと思います。もちろん、人格は売り渡さないのですが、それでも人格に引っかかってくる場所があって、マルクスは、人間が人格と人格でもってつきあえるような社会を理想としていたと思うのですが、しかしそう言った理想的な社会をどうやったら実現できるか、きわめてむずかしい。

沢田 僕は、小さい単位の社会をつくることだと思っています。これだとカネで労働を買うことの意味がない。労働はみんなで一緒にやり、自分たちの生活を守るためのもので、まさにコー・オペレイションとなる。そこでは役割分担はあるだろうが、みんなの顔が見えるわけだから、一部の者があぐらをかくわけにはいかない。しかし逆に小さい社会だと、相互に対立しやすい。だから小さい社会で、なおかつ対立が起きないような社会であることが必要なのだが、今日では通

信網などが発達しているから、昔とはちがう。そのためには、経済をどうするかとか流通機構をどうするかとか、いろいろな問題があるわけだが、それは経済学者に考えてもらいたい。

編集部

そういう考えは、先生の「風景」というキーワードにもあらわれていますね。エコロジーなどにもそういう運動があつて、自給自足できるような共同体をつくるために鎖国論も出てきている。私もそういう考えに共通するところもあるのですが、しかしやはり、近代の歴史をみると、鎖国や藩体制がいやで、福沢諭吉などがでてきたわけでしょう。方に閉ざされた社会から、ある意味で公共的な空間が出てきたというのも、やはり近代の一つの仕事だったわけで、結局その両方に引き裂かれているのだという印象をもっています。

沢田 それをどう両立させるかが、ほんとうは共産主義の一番の課題だったと僕は思っているんです。ところが現実にはソビエトで起こった共産主義は、そういうことは一つも考えなかった。

島崎

その点に関連して、人間と人間の争いをどう解決していくかという問題のほかに、人間と自然の関係の問題をどう解決するかということがあります。マルクス主義ではエンゲルスが「自然の弁証法」ということを言います。これは自

然中心主義の見方で、評判の悪い面もあるのですが、今日のような環境破壊の問題など考えますと、意外と重要なのではないかという気もするのですが。エンゲルスは、機械論的な自然観をなかに含みながらも、たとえばダーウィンの進化論など当時の最新の科学的な成果にもとづいた有機的な世界観をもっていたと思います。そういう自然のなかにつまれてこそ人間は存在しているのだ、人間も自然存在なのだという考えです。

沢田

そういう考えの出発点がニュートンだった。宇宙とかコスモスというのは無限であつて、人間もその中の一つで自然の法則にしたがつているのだから、人間に価値があるわけではなくて、他のものと同じ価値しかもたないという考え方ですね。そういう考え方が環境破壊に対してマイナスに作用するのかプラスに作用するのかは一口では言えない。というのは、そうでありながら人間は、毎日食うものが必要で、そのように考えたからといって食わずにすむものではないからです。ではどういう宇宙観が環境問題を解決するものなのかということとは、まさにこれから考えなければならない問題だと思います。

島崎

エンゲルスなどは、環境問題についても言っていて、

人間がどんどん自然を利用して破壊していけば、逆に自然に復讐されて、自分たちが害をうけると言うことを言っています。

沢田 労働者を搾取するのはいけないという理論を、今度は自然を搾取するのはいけないというように、マルクス主義の基本原理を自然に向ければいいと思います。

島崎 マルクス主義には人間中心主義と自然中心主義の両方があるって、これは両方とも重要なのだが、従来のマルクス主義というのはその統一の仕方がうまくいっていないのではないかという気がするのですが。

沢田 最近の宇宙論に「人間原理」というのがあるんです。

これをどう解釈するかはこれからの問題なのですが、要するに、人間は宇宙のほんの一部だというわけではないということをおうとしているんです。人間原理という場合でも強弱二つの意味がありますが、要するに、ビッグバンを一つの花の種とすると、この種は人間という花を咲かせるように最初からできていた、つまりこの宇宙というものは、人間という知性をもち観察することのできる生物をうみだすようにできていたという考えです。しかしこの場合宇宙は、この花のためだけにあるのかというところではない。葉や茎の部分もある。

って、それらは全部つながっており、その一部だけを切り取って重要かどうかを論じることではない。そういう意味で、人間までふくんだ進化の理論を考えないといけないということをおうっているんです。これはまだ物理学者が言っているだけで、人間に関心を持っている人がどのようにこれを利用できるかは一つもやられてないのですが、僕はいまそれを考えているんです。

しかしこれは古い意味での人間中心主義ではない。一九六〇年代の宇宙物理学で、R・H・ディッケ、B・カーター、ホーキングなどが言っていることです。しかし彼らのなかでも意見が一致しているわけではなく、バカらしいという人もいます。

島崎 目的論と機械論の対立に関係しますね。マルクスも若い頃は、自然中心主義と人間中心主義を統一しなければいけないというような話をしていますが、雄大なスケールの話ですね。

● 哲学教育について ●

編集部 哲学の研究者になるためには、大学院で、哲学史

の細かい研究をやって一応の資格を取るわけですが、いまのような話は、そういうスタイルの研究からは出てきにくいだろうと思います。いまの哲学教育のシステムでは、そのような問題はなかなか認知されないのです。哲学は、哲学でないものに根をもつことによって哲学であるのだと思うのですが、その意味で、哲学教育が制度化されたために哲学教育がだめになったという面があるのではないでしょうか。

島崎 業績をあげ、専門の哲学論文を書かないと就職できないということもあります。

沢田 哲学教育のことで言えば、一つまずいのは、哲学が一般教育科目に入っているのはいいのですが、たいいてい一年か二年で教えることになっているんですね。しかし現代のように、受験勉強に没頭ばかりしていて問題意識もないままに高校を卒業し、哲学を聞いてもぜんぜん受けつけなところがある。そうした人たちがそのまま卒業して、社会に出て、哲学なんてつまらないと言いつつ。しかし、これを三年か四年でやるようにするとすごく吸収がいい。慶応の工学部ではそのような時間割りにしまして、僕が担当したことがあるのですが、みんなとても熱心に聞いてくれました。もちろん彼らは哲学者になるわけではないが、管理者、技術者になっ

ていったとしても、そこで哲学を思いだしてもらえんと思います。

編集部 先生のお話をいままでうかがっておりまして、科学の営みと哲学の営みとの出会いということが、先生のお仕事の中心であったように思われたのですが。

沢田 ただその場合の科学という言葉の使い方には注意が必要です。僕は事実をよく知りたいということなんです。事実を知るのに、科学は万全ではなく、間違うこともあるかもしれないが、では、科学を抜きにして宗教のようなものではない。哲学者は科学を知る必要があるというよりも、事実を知る必要があると言った方が正確ですね。

島崎 本日は興味深いお話をいろいろありがとうございました。

(さわだ のぶしげ 慶応義塾大学名誉教授・哲学)
(しまざき たかし 一橋大学教授・哲学)

学校哲学からの脱出

一

三木清に「哲学はやさしくできないか」というエッセイがある。⁽¹⁾「哲学はむつかしいということは、いわゆる定評である。なぜ哲学はむつかしいのか、哲学はもっとやさしくすることができないか、そういう問いに対して誌上でぜひ答えをせよとの、『鉄塔』の編輯者からの再三の命令を受け、督促に会って、何か自分の意見を述べねばならないことになった。」と、必ずしも書きたくて書いた文ではないという断り書きを

つけて発表されたものではあるが、三木らしい鋭い洞察と気のきいたフレーズがちりばめられた作品である。

その稿で、三木は先ず、哲学には理論的要素と思想的要素がふくまれるが、哲学がむつかしくなるのは、その思想的要素が貧しい場合だと指摘し、その理由をつぎのように書いている。

「思想は哲学において飽く迄理論化されることを要求されるけれども、しかし思想は思想として直観的に理解されるという性質を失わないであろう。それ故に豊富な思想によって生かされている哲学は『理屈でなしにわかる』とい

中 村 行 秀

う方面をもっている。かかる見地からすれば、哲学がむづかしいと言われるのは、哲学における思想の貧困にもとづくものと見られよう。」

さらに彼は、理論は模倣され翻訳されてもわかるが、思想はそうでないと述べ、思想に必要なものは「思索の根源性」だと主張する。彼のいう「思索の根源性」とは、「他の哲学を模倣したり翻訳したりするのでなく、他の哲学に従って或いはそれを手引として自分自身で考えるところ」とであり、彼は、思索の根源性によって哲学の問題が「生きてくる」と表現し、つづけてこう語る。

「そのうちに問題が生きているものはなんといつてもわかり易い。そういう問題は現実性を有する問題である。本からではなく、ものから考えることが大事である。自分にとって現実的に問題になっていないことを、それが流行であるからといって、或いはそれについてひとが論じているからというので、問題にしたのでは、わからないものになるのは当然である。」

この「哲学はやさしくできないか」の話には続きがある。三木にこの問題をぶつけた編集者は、よほどこのことが気になっていたらしく、そして相当粘りづよい性格の人だったら

しく、それから二〇年あまりたった戦後に、再度この問いを今度は粟田賢三と古在由重の両氏につきつけたのである。

「今日どうして哲学がふるわないのか。哲学者がおおいに大衆を動かしたということをきかない。哲学は学界の片隅に、忘れられているようにみえる。現在のように暗い感じのある時期には、むしろいちばん根本的な問題から考えてゆくのがいいとおもうから、だれかがちゃんとしたことをいつてもらいたいのだが、やっぱりいわない。あなたがたは哲学者というだけでなくて、いちばんそういう問題を答えうる人たちだとおもうから、おおいにやつてもらいたいです。そのことについて話してください。」⁽²⁾

この問いかけを、両氏は、三木に比して、はるかに深刻に受けとめている。二人は、自分たちが哲学の勉強をはじめた時の哲学についての考え方が間違っていたという反省から始めている。「日本のなかで、日本の民衆がいろいろ悩んでいる問題があるのに、そこから問題をくみあげてこないで、ヨーロッパの学界で出ている問題をやってさえいいんだという考えかたが、まちがっていたとおもう。日本の社会からでてくる問題、それとつくんで日本人なりにそれに解決をあたえるという努力をしなかったということ、これが日本

の哲学を駄目にした根本じゃないかとおもう」(栗田)。

だから、哲学に必要なことは、「だれもが日夜痛切に身をもって対決しているもの、したがって直接の経験からだれにもわかることをつかまえ」ること、「だから書物から問題をとってくるのではなくて、いますべての人びと、世界中の人びとが日夜心の底から悩みぬいている問題」にぶつかることであり、「そういうところから出なせれば、はじめて哲学はわかりやすいものになる」(古在)。

質問者は、さらに問う、「そいつはよくにもわかる。そのくらい哲学というものをあなたがたは必要な学問だ、ひじょうに根本的な問題だとお考えになるわけですね。それを考えていて、どうしてできないか、日本の現状で。……すくなくとも日本のように、こんなにひどい目にあつて、人間が根本的に考えなければならぬ問題に毎日まいにち接しているにもかかわらず、日本の哲学はいっこうに問題にならんということはどういうわけだ」。このきびしい追求にたいして、古在は、「そういうことがわかつていてもできないということとは、やっぱりくらが駄目だつてことなんだ。かんたんにいえば、それにふさわしいあたらしい考えかたやあたらしい表現方法をもちあわせていないつてことに、悩みがある」と率

直に告白し、そうした課題に応えるためには哲学者といろいろな専門家との協力の態勢が必要だという栗田の発言にたいして、つぎのような重要な指摘をしてこの座談会をしめていく。「しかも専門家たちだけのあいだの交流、協力だけじゃ足りないとおもう。古い学問なんかに毒されていない普通の人、働いている人、そういう人との交流がなければ、とても駄目だとおもう。そしてこれこそ根本的なことだと思う」。

以上、哲学がなぜむつかしいかにかんする三木、栗田、古在と彼らにそれを問うた編集者の主張を要約紹介した。三木の文章から六〇年、戦後の古在たちの発言からさえすでに四〇年ちかくが経過している現在でも、哲学を仕事と考えている者にたいして、同じ問いがつきつけられているのではないか、と思うからである。

多くの悩みをかかえて生きる民衆がいて、根本的に考えたという「哲学への要求」をもっていること、その人びとにとって哲学がむつかしすぎることに、そしてなぜ哲学がむつかしすぎるかの理由についても、この三者の考えは基本的に一致しているといえるであろう。さらに、この三者だけでなく、いまの私たちの多くもまた、この問題にかんしては、彼らと同じ見解をいっているともしえるだろう。その意味では、

彼らは特になにか新しいことをいつているわけではないのである。にもかかわらず、いぜんとしてこの問題は解決されないままであり、私たちは相変わらず彼らと同じ地点で、同じことの「必要性」だけを確認し合っているのではないか、という気がするのである。近代以後の哲学史をふりかえってみても、すぐれた哲学者の多くがこの問題と対決し同じ結論に達しながら、現実の問題を解決できなかった。しかし、これら過去の哲学者と、現代に生きる私たちとの決定的な違いは、彼らには解決できる客観的条件がなかったのに、今はある、ということではないだろうか。だからこそ、私たちが、哲学をめぐるこの事態を、これ以上このままにしておくことは許されないと、私には思われる。

二

前節において、「思索の根源性」を欠いている、あるいは、「書物から問題をとってくる」と批判された哲学のスタイルを、務台理作は「羅列的解説本位の学校哲学」と呼び、「哲学が学校哲学の姿勢で十分でありえた時代は、いま過ぎ去るうとして、ことに注意を寄せるべきだ」と書いている。⁽³⁾

して彼は、現代の哲学が「学校哲学」であることに甘んじて「哲学の役割そのものを甘く考え、且つ職業意識のもとに、人生の真実を逃避したり、隠蔽したりしてきた」ことをきびしく批判した。私は、彼の言う「学校哲学」からの脱出こそ、近代以降の哲学の存在意義にかかわる大きな課題だったと思う。エンゲルスをパロディ化するように不謹慎かもしれないが、「すべての哲学の、とくに近世の哲学の、大きな根本問題は、学校哲学からの脱出という問題である」といったとしても、それほど誇張とは思えない。

近代の夜明けを告げる哲学者F・ベーコンがそうだった。彼は、事実の不足と論理の過剰の「学校哲学」を、「病氣」にかかり「墮落」した学問だときめつけ、スコラ学者たちは「鋭くて強い知力と豊かなひまをもちながら、ごくわずかな種類の書物しか読まず、その身が僧院や学寮の子部屋にとじこめられていたように、かれらの知識は少数の作家（主として独裁的支配者アリステレス）の外に出ることはな⁽⁴⁾」という。彼は、「僧院」と「書物」に閉じこもって、クモが糸を紡ぎ出すように思弁する「学校哲学」のあり方を批判して、「精神と事物の交わり」⁽⁵⁾（「ものから考える」——三木）の回復を目指したのだった。

デカルトの場合も同じである。「あらゆる事柄についていかにもつともらしく語り、自分よりも常識の浅いものに自分を賞賛させる方法を授けてくれる」⁽⁶⁾学校哲学を棄てて、「自分のなかにあるいは世間という大きな書物のなかに発見されるかもしれない学問以外はもはや求めない決心をして」⁽⁷⁾旅にでたという、あの有名な告白もまた、彼にとつて、「学校哲学」からの脱出こそが、ほんものの哲学探究に必要な手続きであつたことを物語っている。

あのカントでさえ、こういつている。「私はみづから好んで研究者となつてゐる者である。私は知識へのつよい渴望を感じ、知識を先へ進めたいという欲望のせいで落ち着きがなく、少しでも進歩があれば満足を感じる。そしてこのことが人間性の榮譽を成しうるかに考えた時期があつた。私は物を知らない民衆を軽蔑した。しかしルソーが私を正してくれた。このまやかしの優越性は消えてなくなり、私は人間を尊敬することを学んだ。そして私の思索が、他のすべての思索にも、人間性の権利を確立する力を与えることになるのだ、と私が信ずるのでないならば、私は自分を卑しい労働者よりもなお無益な者とみとめることであろう」⁽⁸⁾。つまり、カントは、すべての人びとに「人間性の権利を確立する力を与えること」

こそ、哲学の任務だと考えたのである。この考えの延長線上に、知識の体系的統一と論理的完全性だけを目的とする「単なる学」にすぎない哲学の「学校概念」(Schulbegriff)を、「何びとも必然的に関心を持たざるをえないもの」にかかわる哲学の「世界概念」(conceptus cosmicus)に従属させねばならないというあの主張が形成されるのである。⁽⁹⁾カントにあつても「学校哲学からの脱出」が哲学の課題であつたといえるだろう。「哲学は学院の知的貴族階級の独占物であるどころか、何よりもまず、あらゆる人間に関係のあるものだということ」⁽¹⁰⁾は、カントの確信だつた。

いうまでもなく、「学校哲学」は、ベーコンとデカルトにあつてはいわゆるスコラ哲学を、カントでは当時ドイツの大学で大きな地位を占めていたライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学・存在論を意味していたし、それからの「脱出」の必要性と方向にかんする認識もそれぞれで違つていた。しかし、自然・社会・人間との直接対決ではなく、書物あるいは自分の頭の中だけで考へる哲学を、「学校」哲学ないし哲学の「学校」概念として批判的にとらえる点では、彼らは一致していたといえるだろう。彼らは、そうした「学校哲学」の克服を課題とし、それに一定の成功をおさめたからこそ、彼

らの著作が古典として評価されるのである。しかしまたそれが、彼らが「学校」哲学からの脱出に全面的に成功している、ということの意味するのではないことも明らかである。学校哲学からの脱出は、彼らの時代にあつては不可能なことだったからである。カントが、哲学は「万人の関心事」だといかに確信しようとも、現実には、識字率という一事をとつてみるだけでも、当時の哲学は社会の一部の知的階級の独占でありえなかったことはいうまでもない。彼らは、知的階級が受け入れる言語と文体で、知的階級に訴えることができる問題を論じる以外に道はなかった。民衆は彼らの読者であるはずはなく、著者は読者の制約を超えられないのは当然である。(右の引用における「卑しい労働者(die gemeinen Arbeiter)」という表現がカントの制約を象徴している、といえよう)。

しかし、今はちがう。哲学者は民衆を読者としてもつことができ、直接民衆に訴えることができるだけでなく、哲学者自身も民衆であることができるのである。いまこそ、真の意味の「学校哲学からの脱出」が可能である。つまり、哲学者が「学校」からでて「民衆」のなかで思索することができるのである(この点に関しては、先の三木、栗田、古在と比べても、われわれは有利な立場にいる)。このときに、かえって哲学者が

「大学」のなかにとじこもり、過去の哲学者が手がけた問題を、彼らと同じ様なやり方で、卒業に必要な単位をとるためにがまんして出席している学生に、解説することに満足しているとしたら、それは、哲学の歴史にたいする裏切りではないか、と考えるしまう。

三

「なぜか哲学がモテはやされている。『哲学もの』のテレビの番組がウィークデーの深夜にもかかわらず人気を集めたり、入門書がロングセラーとなっているのだ。何も、インド哲学や西洋哲学などに真正面から取り組もうというのではない。わかりやすく、面白い哲学がウケ筋。豊かさの中に不安を感じている現代人に、そのとつつきやすさがマッチしたようだ。バブル経済もはじけたことだし、これからは人も中身が大切?!」。これは、つい先頃「現代人における哲学のブーム」という見出しをつけた新聞の解説記事のリードである。⁽¹⁾私自身が、自分の著書に、「『哲学の本が売れなくなった』、『哲学の講義に学生が集まらなくなった』というなげきをよく耳にしたのはいつの頃だったろうか。最近では、それすら

3日(木曜日)

読者

白

読者

読者

(タチ)

現代人における哲学のブーム



「わかりやすい、哲学の入門書が人気」

私って何?

「私って何?」という問いは、現代人にとって最も切実な問いの一つである。この問いは、自己の存在意義や価値を問うものである。現代人は、社会の圧力や競争の激化によって、自己の存在意義を失っている。この問いは、自己の存在意義を再発見するための問いである。

学がさの中の不安をみつめ

「学がさの中の不安をみつめ」という問いは、現代人にとって最も切実な問いの一つである。この問いは、自己の存在意義や価値を問うものである。現代人は、社会の圧力や競争の激化によって、自己の存在意義を失っている。この問いは、自己の存在意義を再発見するための問いである。

あの特徴は今



フジテレビの深夜番組「哲学の夜」の司会者(左)と小坂さん

存在論的な価値を探究

「存在論的な価値を探究」という問いは、現代人にとって最も切実な問いの一つである。この問いは、自己の存在意義や価値を問うものである。現代人は、社会の圧力や競争の激化によって、自己の存在意義を失っている。この問いは、自己の存在意義を再発見するための問いである。

話題にならなくらい哲学の『不人気』が定着した感がある」などというようなことを書いてから、それほど月日がたっていないので、いささかの驚きをもって、その記事を読んだものである。

「モテはやされている」はマスコミ流の誇張だとしても、たしかに「人気がある」のである。言及されているテレビ番

組「哲学の傲慢」は、今年四月にスタートした水曜深夜の三〇分番組だが、視聴率調査によると関東地区だけで四〇万近い人が見ているという。出版界でも、昨年一〇月刊行の竹田青嗣著『自分を知るための哲学入門』(筑摩書房)が三万部、小坂修平著『イラスト西洋哲学史』(JICC出版局)は七年のロングセラーで八万八千部、というように「静かなブーム」になっているらしい。この現象は、いっけん「学生の哲学離れ」と矛盾するようであるが、それらの著者たちが大学の外の人であること、そして、購買者の中心が大学生であることを考えあわせると、これは、ほんものの哲学を求める学生の「学校哲学離れ」現象のひとつ、と解すべきであろう。「学校哲学」は、学生からも見離されたのである。かつて、務台が、こうした「学校哲学」について、「このような哲学が科学者に見離され、やがて哲学青年にさえ見捨てられるようになる」とすれば、それは哲学として憂うべきことではなくて、むしろ当然の結果として受けとるべきものであろう。もし哲学が現代批判の力を失って、そのために死んでいくというならば、死ぬべきものはいつそ殺してしまえ、死ぬものは墓場に送ってしまえともいいたくなるのである。新しい哲学が新しい生命をもって、誰人からでもいい、生まれ出てくるため

にである⁽¹³⁾」とラジカルに語った事態が確実に進行している。

「学校哲学」から抜け出て「新しい哲学」をつくりだすことは、哲学が生き残るためにどうしても果たさなければならぬ課題なのである。

現代の課題としての「学校哲学からの脱出」には、二つの意味がある。ひとつは、文字通り哲学が「学校」のキャンパスの外にでることである。はじめに紹介した編集者が四〇年前にいった、「日本のように、こんなひどい目にあって、人間が根本的に考えなければならぬ問題に毎日まいにち接しているにもかかわらず」ということは、死ぬまで働かされる労働者、福祉に殺される弱者、依然として権利を奪われたままの女性、テスト・受験の教育でいじめぬかれる子どもたちなどの問題として、いっそうの現実性をもっている。哲学者は、それらの人びとの問題を「根本的に考える」ために、自らすすんで人びとのなかへ出てゆかねばならない。勤労者の集会で、市や町の公民館で、いろいろな市民大学・公開講座で、場合によっては行きつけの飲み屋で、「哲学すること」が求められているのである。また、そうした「既成」の場とは別に、哲学者自身が組織者となって、人びとと哲学を語る場造りすることも大切だろう。友人にそうした試みを

続けているものがあり、私も一度招かれたことがあるが、じつに楽しかった。古在の指摘にあったように、生活者として痛切な問題を哲学的に解くためには、「普通の人、働いている人、そういう人との交流」こそが「根本的」なのである。

このように、哲学が「学校」から出て普通の人の要求に応えるためには、いわゆる学校哲学の「内容」から「脱出」しなければならぬことは当然であろう。それは、大学における学生対象の講義にもあてはまることである。学生がほんとうに求めているのは、「誰が何を言った」式の講義ではなく、彼ら自身が生活者として悩んだり、気づかずに来た問題——たとえば、能力主義教育における人格形成、消費主義の文化のなかで育てられた彼ら自身の行動と意識の特徴など——を、根本的に解明する理論であるからだ。公民館へ「脱出」してみると、そこには、きびしい差別・選別の教育のなかで子どもと共に疲れはてた母親たち、また、ノルマと人事考課の追いつけ追いつけの中で過労死寸前まで働かされたあげく「定年」で放りだされた男性たちなど、本物の哲学を求めているたくさん^{フィロソフス}の「愛知者」に出会うのである。こうした人びとの痛切な問題と格闘しないでな^{フィロソフス}が「愛知」な^{フィロソフス}のかと、反省させられる。大切なことは、それは同時代に生きる哲学者自身にとっても

切実な問題であるという認識である。三木がいうように、「自分にとって現実に問題となっていないことを、……問題にしたのでは、わからないものになるのは当然である」から。」

断っておかねばならないが、私は、伝統的な哲学問題が無意味だと主張したいのではない。それらの問題が、現代のなかで帯びる意味と無関係に、ただ普遍的・抽象的なかたちで論じられるのではまったく不十分だ、と主張したいだけである。たとえば、「物質とはなにか」という問題をとりあげて、レーニンの物質概念の意義を説明することは必要かもしれない。しかしそれが、いまの日本人の多くが迷っている問題、たとえば「自分たちの生活にとって、ものの豊かさとは何なのか」というような問題、と無関係に論じられるとしたら、それこそが無力な「学校哲学」だといいたのである。「論より証拠」が求められるかもしれないので、ある公民館で私が担当した哲学講座のプログラム（週一回・全部で一二回）を、参考に供しておくことにする。

第一部 哲学の基礎理論

第一回 哲学とはなにか

第二回 現実とはなにか

第三回 生活とはなにか

第二部 いま、生活を考える

第四回 労働を考える

第五回 スポーツと遊びを考える

第六回 食を考える

第七回 教育を考える

第八回 宗教を考える

第三部 いま、生き方を考える

第九回 子ども・青年は豊かに生きているか

第十回 女性は豊かに生きているか

第十一回 老人は豊かに生きているか

第十二回 私たちは平和に生きているか（まとめ）

必ずしも哲学者だけの組織ではないが、唯物論研究協会が「学校哲学からの脱出」のために果たしてきた役割は大きいといえる。そのことは、機関誌『思想と現代』の特集テーマに明らかである。私も、それらの活動に学びながら、自分の哲学を立て直してきたのである。しかし、発行部数が二千程度の機関誌では、まだ民衆の「哲学への要求」に応えていない。やはり、民衆にとってはまだまだむづかしすぎる。普通

の人がわかることはと文体で、普通の人になじんでいるメディアや手段（ビデオ、イラストなど）も活用して、民衆のなかで、民衆の問題を、民衆のひとりとして考える姿勢が問われているのではないだろうか。私たちが、いまその課題に答えられなければ、現在進行中の「大学改革」の波をも受けて、哲学はやがて「学校」のなかでさえ存在場所を失うかもしれない。哲学は、博物館入りするには、まだ早すぎると思うのだが。

注

- (1) 一九三二年、『鉄塔』に発表。『三木清著作集』第一五巻（岩波書店）から引用。ただし、旧漢字、旧かなづかいはいは、改めた。
- (2) 岩波『図書』誌、一九五四年二月号。古在由重対話集『思想のデュエット』（新日本出版社）に収録。引用は同書から。
- (3) 務台理作「哲学における現代」、岩波講座哲学Ⅰ『現代の課題』（一九六七年）、八九九ページ。
- (4) ベーコン『学問の進歩』第一巻、河出『世界の大思想』6、二九ページ。
- (5) ベーコン『大革新』の「著者の声明」、同右書、二〇三ページ。
- (6) デカルト『方法序説』（角川文庫）、一二二―一二三ページ。
- (7) 同右書、一七ページ。
- (8) カント『美と崇高との感情についての考察』自用本の書き込み。『カント全集』第一六巻（理想社）、二九五ページ。ただし、訳文はかえた。
- (9) カント『純粹理性批判』、河出『世界の大思想』10、五二四―五三ページ。
- (10) ルイ・ギエルミ「イマヌエル・カントと批判哲学」、『シャトレ哲学史』Ⅴ（白水社）、二二六ページ。
- (11) 『毎日新聞』（夕刊）、一九九一年八月二九日。
- (12) 中村行秀『哲学入門―生活の中のフィロソフィー』（青木書店）、一八五ページ。
- (13) 務台、前掲書、八ページ。
- (14) （なかむら ゆきひで 千葉短大・哲学）

哲学への要求

I 私の受けた哲学教育から

編集委員会から本号のテーマに関わる長文の趣旨説明付きの原稿依頼が届いた。そこでは、哲学教育の問題についても触れられていたので、私が受けた哲学教育を具体的にふりかえるとところから始めたい。

私が大学の一般教育科目として哲学の手ほどきを直接受けたのは、今から三〇余年前、一九五八年と五九年の事で、当時はまだお若かった河西章先生（河西先生は私のクラス担任で

伊藤セツ

もあった）と秋間実先生からであった。このお二人の哲学の時間は、私にはとても楽しみであった。記憶に誤りがあるかも知れないが、河西先生からは、ギリシャに始まる哲学史一般と、続いて特に実存主義哲学、マルクス主義哲学を学んだ。私と親しかった私設女子寮の学友たちは、サルトルを読まされた後は、断然実存主義者となり、マルクスを読まされた後は、がらりと変わってマルクス主義者となった。そんな学生達の動揺を見すかしたように、河西先生は、平然として「あなたがたのほとんどは気付いてはいないだろうが、実はプラグマチストなのです。私の講義を聞いてそれから変わる

人はたかだか五%ぐらいのものでしょう。その半分は、実存主義に、そして半分はマルクス主義にね」と言われた。この言葉を私は三〇年余も覚えている。ちなみに、この講義をとっていた学生は九〇人くらいだった。私は、なぜか、その五%にぜひとも入りたいものだと思うてそつと数を数えたものであった。

河西先生は、私たちに最初のレポートとして、岩波新書のダンハム著『現代の神話上・下』をとりあげ、「あなたがたが考えている当面の問題の解決にダンハムの本がどう役立つか、また問題点は何かについて書きなさい」という課題を出した。時は一九五八年である。当時の学生たちはエニウエトク水爆実験阻止を始めとする平和や国際情勢の様々な問題を真剣に考えていた。私は当時こうした問題には疎いほうであったが、このレポートに夢中になって取り組んだ。河西先生は丁寧に読んで、私の疑問にたいするコメントをつけて返して下さり、良い評価をいただいた。ダンハムの『現代の神話』は、当時の私にとつてとても面白く、刺激的であり、また適度の疑問点もひきおこさせる恰好の哲学入門書になったと思う。

翌一九五九年の、秋間先生の哲学特講は、「論理実証主義

哲学と唯物論哲学」を関連させて比較しながらの講義であった。内容は、先生御自身の哲学的軌跡にもとづくものであり、ドイツ留学から帰国されたばかりの若い先生の講義は、まだトツトツとしていたと記憶する。しかし、一語、一語、日本語をかみしめるような正確な話し方は、かえって妙に説得力があった。だが、内容は難しく、どれだけ理解できたかは心許ない。秋間先生は、この他にヘーゲルの「小論理学」の講義もなさっており、まじめな多くの学生を集めておられたが、私は残念ながらこれを履修していない。後悔している。

やがて、教養部を終えて学部に進学するときまでに、私は文学部国文学科志望を徐々にきりかえて、経済学部に進学する決心がついていた。経済学部を選んだのは、やはり、主に一般教育での経済学の講義のせいでもあったが、多分に哲学の影響のせいでもある。「本質を疑え」ということを、私は二人の若い哲学者から教えられ、その結果が、あの一九六〇年に経済学にたどりついたといってもよいのだから。私は、しばしば、この、一般教育時代の哲学の教育が私に対して持った意味と、その後の私の選んだ道とのかかりについて、若き両先生の、教育効果を考えての講義に対する真摯な工夫への感謝をこめて反題してきた。私にとつて、大学の一般教

育の哲学は、このように意味あるものであった。

さて、その後、哲学は私の前に具体的にどう姿を現し、私の目にどう写り、どういう役割を果たしたであろうか。

Ⅱ 女性論と唯物論

私は今、女子大の女性文化研究所という名称の所を仕事場所にしており、仕事内容はそこでの研究と、女性学公開講座などの企画・担当、大学院生の教育が中心であるが、学生向けには、一般教育の経済学と家政学部の専門科目の三つの講義（家庭経済学、消費者経済学、家政学原論）を担当している。

つまり、女性文化・女性学・女性論といったぐいのもの、経済学、家政学が、守備範囲となる。まず、女性論の領域から哲学との関わりをたどり、私なりの哲学への要求をいわせていただきたい。

「唯物論と婦人問題は関係ないよ」と、四分の一世紀以上前、私が大学院で「クララ・ツェトキンの婦人解放論」をテーマに研究しているとき、唯物論哲学のある先輩院生（もちろん男性）が言った。私は、そのあまりの屈託ない言い方に唖然としてその先、議論をしようとも思わなかったが、そう

いう認識がまかりとおっていること自体に失望は覚えた。そして、ただ「何という無邪気なことをこの哲学者（の卵）は平気で言うのだろう」と思い、そんなことでは、今に、何かとんでもないことになるのではないかとの予感をもった。今流行の「女性学」ならさしずめ、「それ見た事か！ 唯物論も男の手でつくられた！」と勝ち誇ったように叫んだであろう。同じ唯物論でも経済学の先輩院生（これも男性）は、対照的であり、むしろその経済学の男性先輩からこそ、唯物論哲学と「婦人問題」の抜きさしならぬ関係について示唆されるところ大であった。

私が研究してきたクララ・ツェトキンは、一九〇三年、マルクスの没後二〇年に当たって「女性がカール・マルクスに負うもの⁽¹⁾」という小論を書いているが、その中で「——マルクスは、『それ自体として』あるいは『このようなものとして』は、けっして女性問題をとりあつかいはしなかった。それにもかかわらず、かれは、完全な権利をもとめる女性のたかいたのために、なにものにもかえがたい業績、もつとも重要な業績をのこしたのである。かれは、唯物史観を通じて、女性問題に関する完成した諸定式ではないけれども、もつともよいもの、すなわち、女性問題を探求し、把握する、正し

い、的確な方法をわたしたちに与えた。唯物史観が、はじめ
てわたしたちに可能とさせたことは、女性の問題を、一般的・
歴史的発展の流れのなかで、すなわち、その歴史的條件と権
利を与えた一般的・社会的関連の光に照らして、はつきりと
理解すること、女性運動がもっている力を認識すること、そ
の力が駆り立てられていく目標や、提起された問題が、その
もとのみ解決される諸條件を認識すること、などである。

——⁽²⁾と書いている。これはドイツ語で直接読んだ。

何も、もっともらしくクララなど引き合いにださなくとも、
女性解放運動について少なからぬ関心のあった当時の男女に
としてはこれぐらいのことは、自明であつたであらう。

唯物論哲学は、本誌の前身の前身、『唯物論』の創刊号
(一九七三年一〇月号)に、嶋津千利世氏の「現代社会の家族
と史的唯物論」を載せた。当時の私にはこの種のテーマにも
哲学は本格的関心を抱いたのかとの期待を持った。しかし、
その後五年間女性に関する論文は掲載された形跡がない。そ
して一〇号(一九七八年一月号)の「自由」の特集号に、私
は、短いエッセイ「婦人と自由」を書いた。私はそこで、一
言でいえば、自由論に、女性の視点を投入しなければならな
いと問題を投げかけたつもりであつた。しかし、何人の哲学

者がそれを理解したかはわからない。私からみれば、自由
は、具体的に恐ろしいほどの性差があるのに、おおかたの自
由論の論文は、それを問題にする事に気づかないかのごとく
であつたから。要するに論文の陰に見えかくれするのは、ユ
ニセックス的、あるいはセックス・ブラインドともいふべき、
男とも女ともつかない抽象的人間であり、結局は男性であつ
た。自由の問題は階級の問題であるという認識はありすぎる
ほどあるというのに、どうして、諸階級も両性から成り立ち、
どの階級においても、自由から距離をおかされているのは女
性の方であるということに哲学の自由論は鈍感なのであらう
か。その時も私が書いた事であつたが、レーニン「どの
階級にとつての自由か? またどのように具体的に使うため
の自由か? どの階級とどの階級との平等か? またどうい
う点での平等か?」というところまではせまっていた。そ
れを哲学の自由論は深めたのか。深めていないうちに、今、
世界のあちこちで、そのレーニンの巨大な像がたおされ、若
者がその上で踊りを踊っている。もちろん、これは唯物論哲
学者だけの責任でない事はわかつてはいるが——。

そのときから、さらに五年が過ぎて、『唯物論研究』八号
(一九八三年五月号)の、「マルクス没後百年」特集号に、私

は「マルクスの婦人解放論」と題する一文を書く事を依頼された。そのときすでに、マルクス主義婦人解放論は、各種フェミニズムの批判の矢面に立たされていた。これは、哲学の問題というより、まさに私自身の専門領域の問題であり、私自身の研究者としての危機でもあった。私は、あの小論の中でも事態の深刻さを訴えたつもりであったが、今読みかえすと、私自身も、時代の変化の捉えかたに、甘さと不勉強があったことを深く反省しなければならぬ。多くの哲学者が「婦人解放論」などのんびりと読み流して、ほとんど反応などなかったのはもちろんであったが、一人の先輩からは、この論文の弱さを注意された記憶がある。その先輩は哲学者ではない。

本誌二二号（一九九〇年）でも、古茂田宏氏と対談した上野千鶴子氏らが、一九八四年、『マルクス主義フェミニズムの挑戦』⁽³⁾（原題は、『フェミニズムとマテリアリズム——女性と生産様式』）という刺激的標題の本を出してマスコミの路線に載ったとき、そして、いわゆる「マルクス主義フェミニスト」の発言がマスコミ上でも目を引くようになったとき、唯物論哲学は、マルクス主義、唯物論と女性の問題の関わりにやつと、外部から揺さぶられて目をさまされかけたのではないだ

ろうか。先にのべた、「とんでもないことになるのではないか」という予感の時が来たのだった。人類の半分の女性と哲学との関わりに気づくにはあまりに、わが国の女性の哲学研究者が少なすぎるということもあったであろうことは理解できる。しかし、哲学としては本来そんなことは言っていられないのだ。

この間、本誌にはときどき、「性」の特集やフェミニズム関係の書評も載った。しかし、私にはそのとりあげかたに常に釈然としないものを感じた。また、フランス革命二百年を記念する一六号（一九八八年）には、私は驚き失望した。フランス革命を論じるのに女性が全く登場しないのである。男性のみを人とみなした「人権宣言」の背後に、そのためにギロチンの露と消えたオラン・ド・グージュの「女権宣言」があったことに触れるのに、どうして書き手の誰一人も気づかないのであろうか。人権がこれだけの広がりをもってきたこの時代に！ 書き手と言うより編集委員会の意識のなきの表れでもあろうし、女性の書き手の持ち駒がないということの表れでもあろう（しかし、「ぶっく・えんど」の書き手だけは女性であったが——）。一七号に載った「前号批評」にもこの致命的欠陥（と私が感じたこと）への言及はなかった。

しかし、失望のほとぼりもさめぬうちに今度は、遅ればせながら唐突に（と感じられた）先に述べた上野氏と古茂田氏の対談の載っている「フェミニズムと唯物論」特集そのものが表れた（二二号、一九九〇年）。それには、浅野富美枝さんの活躍がおおきかったことであろう。今、勝手なことを書いている私は、編集部を助けたこともないので、私は浅野さんにはいつも感謝している。あの号では、多くの男性哲学者が、フェミニズムについて哲学的論陣を張った。これは喜ばしい事である。ただ私にはこの喜ばしさの一方で疑問に感じる点がある。

それは、哲学者は概念やカテゴリーの規定を重んじるはずであり、それにたいするかなりの信頼を私がおいてきた事に關してである。というのは、あの特集では、「フェミニズム」というカテゴリーにたいしては、それぞれの人が、非常に気楽に扱っているのに私はいたく失望した。特に私は「マルクス主義フェミニズム」という概念については、哲学者らしく厳密であって貰いたかったと切に思っている。これは、その次の号二三号の「前号批評」についてもあてはまる。概念や規定を重んじるのが仕事の一つであるはずの哲学者がこういうことだから、現在の唯物論哲学の女性問題への弱さ、そし

てまた逆にフェミニズムの混迷は当分続くのは当然であろう。哲学者がそのことを我が責任と思い、痛みを感じている様子も伺われないのだから、この混迷からの脱出を哲学者などに私は期待しない事にして久しかったのである。

ともあれ、あの二二号のフェミニズム特集の対談の流れは、唯物論研究会に於けるトーマス・クーン流の意味での「パラダイム転換」といってよいと私はひそかに思った。

そういえば、唯物論哲学者も加わって行なっていた主に『日本の科学者』誌上で戦われていたパラダイム論争は⁽⁵⁾今どうなっているのだろうか。このことは、科学論において、私が非常に気にしていたことのひとつである。唯物論哲学者の仲本章夫氏のねばり強い論陣にも関わらず、わが女性論の分野は、最近の状況をみていると、クーンの「科学革命」に軍配をあげる方向で進んでいることを認めざるを得なくなる。本誌二二号（一九九〇年）古茂田宏氏と上野千鶴子氏の対談のトーンこそその何よりの証明と私は読み取った。私にいわせれば古茂田氏の上野評は信じられないほど甘い（ついでながらこの対談については一橋大学経済研究所の『経済研究』の最新号（四三巻一号、一九九二年）の書評欄で私がふれているので参照されたい）。こういうトーンがいつまで続くかはわからない

し、仲本氏によるクーンの科学史批判がまちがっているというつもりはない。ただフェミニズムと哲学をめぐるあれこれの状況を考えるに「そういうことでよいのでしょうか」「もっと緻密に概念規定をし、自らの領域や他の領域での論争や蓄積や、共有財産とも関連させて、哲学者らしく矛盾のないような展開を我われに見せてほしい」と、私は哲学者に多少の不信の念をこめて伺い、お願いしたい思いである。

(1) Die Gleichheit, 25. März 1903

(2) 拙著『クララ・ツェトキンの婦人解放論』有斐閣 一九

八四 一五七—一五八頁

(3) 上野千鶴子他訳『マルクス主義フェミニズムの挑戦』勁

草書房、一九七四年一月

Kuhn, Annette and Wolpe, AnnMarie(eds): *Feminism and*

Materialism, Routledge and Kegan Paul, 1978.

(4) トーマス・クーン著、中山茂訳『科学革命の構造』一九

七一年、みすず書房

(5) 仲本章夫『「パラダイム論」の批判的検討』『唯物論』

(東京唯物論研究会) 第五七号、一九八三年、伊藤嘉昭

「パラダイム論は有効だ」『日本の科学者』第一九巻、四

号、一九八四年四月、その他

III 家政学（生活科学）と科学論

私は、経済学部卒業であり、その大学院に身を置いたものであるが、職業としては、経済学部の学生に講義したことは一度もない。冒頭にも述べたように、今は、私立女子大の、女性文化研究所という、ナウイのか、その反対なのか解釈のしようではどちらにもなるところ、しかも大学院生活機構研究科という新設博士課程の付属機関でもあるところで仕事をしている。

しかし、この生活機構研究科という博士課程は、家政学を発展させたものであり、これに対応する私の勤務校の修士課程は、家政学研究科である。私は大学院経済学研究科博士課程を単位取得で出てから、実に二〇年余り、短期大学の家政学科（今は、家政学という名称をやめて、生活科学とか生活文化とか呼ぶ大学・短大が多い）の教員をして、家庭経済学や婦人問題を中心に講義したり研究したりしてきたのち、この生活機構研究科の付属女性文化研究所に移ったものである。

経済学に対しては「何それ？」ときく人はまづいない。家政学に対しては、当事者以外のおおかたの研究者は、うす笑

いさえ浮かべて「何それ？」と聞く。哲学者のなかにも「何それ？」と聞く者がいる。この哲学者は科学論、科学史にたいして責任回避をしていることは明白なのだが、悲しむべき事にそう自覚する哲学者はほとんどいない。「何それ？」と聞く方はまだよい。さらにひどいと私が思うのは、全く自分にかかわらないこととして、無関心を隠さない哲学者である。もとより、哲学にもそれぞれの専門分野がある。しかし、哲学というものは、諸科学を統括する責任のあるものであり、諸科学の発展をこそ、自らの栄養分として摂取して成立する学問ではなかったのであろうか。

私は、経済学部出身者として、自ら選んだのではない「家政学」と、「衣食の道」として関わり、この新しく、かついわれのない偏見を一手に背負っている地味な学問領域の担い手となった。そして、私の貴重な三〇歳代、四〇歳代が、家政学との格闘のなかで、あつという間に過ぎて行つた。

「家政学って何？」「その独自性は？」「方法は？」と自分で納得し「家政学原論」という講義で学生に自分なりの言葉で自信をもって説明するために、莫大な時間を積み重ねなければならなかった。その過程で哲学の科学論の力が必要なのはいうまでもない。家政学の学問としての地位の低さ、その混

迷ぶりの責任の一端は、哲学者の誰一人もそう思っていないが、哲学者が「家政学」の存在にも気づいていないという事と残念ながら関連があるというのがわたしの意見である。

近年、科学の領域には、従来の科学の分類には納まりきれない境界領域を多く含む、新しい分野が次々と生まれている。情報論とか、国際学とかはその例であろう。社会科学と自然科学にまたがり、両者の総合でなければ解決しない研究領域も増え続けるばかりである。家政学は実はその駆りであったのだ。しかし、物理学や科学や経済学という従来からの伝統ある科学の領域での最先端の研究が何を問題にしているかには、鋭い触覚を働かす哲学者も、女性の問題の研究だの、家庭生活の研究だのには、ほとんど関心を示してこなかった。私は、何度か、まわりの哲学者に助けを求めたことはある。そして反応を見た。彼らは、助けてくれなかった訳ではないが、また一定の助言をいただかなかった訳ではないが、それは、ほんの一次的な儀礼的なものであり、こうした新しい研究の領域についての科学論こそ今要求されているとひらめいた哲学者には残念ながらお目にかからなかった。

私が、最初に依拠した、家政学に有効な科学論は、フランク・フィードラー⁽¹⁾のものであった。フィードラーのこの書に

出くわさなかったら、私は、「家政学とは何か」の間にまだしばらくの時間を掛けて悩み続けなければならなかったであろう。

二〇年近くのさまざまな試行の果てに、私たちは、家計や、生活時間や、家事労働等の、生活の問題、今流のフェミニスト用語でいえば、「再生産」領域（経済学出身の私にとっては、それは「労働力の再生産」というべきであり、単に「再生産」などといえば、「拡大再生産」や「単純再生産」のことに思われて仕方がないのだが）の問題に一定レベルの、「家政学的」業績をあげることができた。その頃、哲学もまた、生活の問題に熱い眼差しをむけていることを私たちは身近に感じていた。私たちはもちろん隣接領域で何を問題にしているか、その到達点は何かについては見落とすことのないようにとアンテナを張り、摂取すべきものは摂取し、自己流のレベルでよしとする事のないように細心の注意を払っているつもりである。従って私たちは、生活に熱い眼差しを向けた哲学が、家政学の存在や、その到達点におかまいなしに、自説を展開しているのを再三三のあたりに見て、古き伝統を誇る哲学者の自信から引き起こされる一種の「無知」に、啞然としたこともあった。隣接領域での到達水準無関心ということ、これは、経済学

にたいしても同じことがいえる。しかも、問題なのは彼らの無関心な隣接領域は決して公平ではないということである。つまり、家政学や「女性学」への無関心である。女の領域として無視された家政学の不幸は、女性の問題への無関心と深く関わり合っていることを、私はどれほど思い知らされてきたかわからない。

やがて、私たちは、一九八四年、二〇余名の有志で、家政学方法論研究会というものをつくって家政学の現代的課題に切り込んだ。その時、どうしても哲学的科学論が必要であった。私は、当時、都立立川短大に務めていたので、隣の大学、都立商科短大の仲本章夫氏の力を借りようとした。「家政学原論」だの「家政学概論」だのと名が付く本を図書館から借り出して、とにかく仲本氏に読んでいただいた。仲本氏がいろいろな意味で目をまわしたのはいうまでもない。もし、隣の短大に家政学科があるのに、哲学者が一度もそれを理解しようとしなかったとしても、家政学者の方が腹をたてるというのはやはり筋力がいいのであろうか。家政学者が哲学者のもとに、必要とあらば、知恵をかりに行くべきなのであって、それをしていなかったことの怠慢をこそ反省すべきであらうか。

さて、仲本氏はただでさえ忙しい時間をさいて、何度か私たちの研究会に加わり、議論に参加して下さった。その成果は、家政学のテキスト中⁽²⁾に残された。その本は今も版を重ね、多くの家政学部の学生が、家政学によって科学論を学んでいる事になる。仲本氏は何を書いたか。家政学の研究方法という章の中で「科学の対象と方法」という節を担当して下さった。それは、わずか六ページという短い節ではあった。そこで、仲本氏は、一、科学とは、二、諸科学の分類と統一（諸科学の分類、諸科学とくに自然科学と社会科学の統一）、三、科学の方法（科学の方法とは、総合的な科学の方法）を、非常にわかりやすい言葉で書かれた。自然科学と社会科学の統一のくだりは、先に述べたフィードラー流であったが、総合的科學の方法のところは、「核問題、公害問題を解決する理論はもちろんであるが、家政学や医学など自然科学的側面と社会科学の側面の統一された分野での方法は、もちろん自然科学の方法と社会科学の方法を構成部分として含む。それは、自然と社会とが統一された対象をとりあつかうからである。しかし、どんな単純な機械でも部品から組み立てられた完成品になると、部品の段階ではなかったような新しい質が発生し、それがその機械を特徴づける。まして、科学の場合には、総合さ

れ統一されると、かつてなかったような複雑で新しい質が生まれ、それがその科学を特徴づけ、根拠づけ、その科学を人間生活にとってなくてはならないものにするのである。家政学はまさにそのような分野である」と結ばれた。学生は、これにたいする私たちの説明を受けて非常によく理解し、自分が選んだ「家政学」に自信を持つ事が出来るようになっていく。

(1) フランク・フィードラー 著 岩崎允胤訳 『自然科学と社会科学の統一』（大月書店 一九七三年）

(2) 家政学方法論研究会『ホーム・エコノミックス——新家政学概論』（ドメス出版 一九八五年）

IV 哲学への期待

最近の、本誌の特集をみると、私は唯物論哲学の新しい生命力を感じる。私はいま、職場で、「実存思想協会」の役員をしている私よりずっと若い女性と机を並べている。私たちは、女性文化研究所の所員である限り、出身領域が何であらうと、何哲学に心をよせようと、女性文化に関わるテー

マを見いだし、研究を發展させ続けなければならない。彼女は、哲学が女性文化の問題をテーマとするのは至難の技だと研究所勤務以来苦渋し続けてきた。彼女はもちろん実存主義に依拠していて唯物論とは遠い距離にある。しかし、私は最近、本誌『思想と現代』の特集号のいくつかを、彼女の机上に置く衝動にかられてそうした。「家族」「子ども」「若い」「コミュニケーション」「フェミニズム」に関心をもつ彼女に、二〇号（一九九〇年）の「文明批判」としての家族・子ども・老人」、二一号（一九九〇年）の「コミュニケーション」を哲学する」、そして再三触れてきた二二号（一九九〇年）の「フェミニズムと唯物論」である。これらを彼女は面白いと言ってくれた。そして、哲学的に女性文化のテーマを掘り起こしていく方向を、最近ぐいぐいと見いだしてくれている。もちろん、実存主義思想においてであるが、冒頭に私が述べた、河西章先生の「学生五％変化論」に立てば、彼女はその五％の私のかけがえない同志である。

女性文化に限らず、高齢者問題、豊かさの問題、労働時間短縮問題、資本主義論争、そして社会主義とは何ぞやという焦眉の課題を含めて、哲学の出番は今こそ、期待されている。私は、最近、哲学者の志田昇氏の依頼を受けて、日立武蔵

の田中秀幸さんの二四年に渡る残業拒否裁判にたいする「女性視点署名」の呼びかけ人の一人となった。私は、生活時間の研究者として、また家庭生活や女性論の専門家として田中秀幸さんの裁判を注目していたのだが、これに多数の哲学者が関わっている事を知ってどんなに心強く思ったか知れない。そして、この田中さんを守る会の副会長は、哲学者の後藤道夫氏である。後藤氏のものでは、私は「国際論争」「日本の経営」は世界に何をもたらすか？」のコメントとして「利潤・競争原理への労働者の『同意』と屈服」と題する論文を読み、田中さんの問題に哲学者としての後藤氏が関わっている意味を理解した。かねてから、生活の問題に関心を寄せ、豊かさとは何かを追求し、自由論を論じる哲学が、わが国の長時間労働の問題に関心を持ち、残業拒否で二四年間も戦っている一人の労働者の問題の持つ深い意味に、それこそ深入りせざるをえないのは、必然であろう。

私は、このことでは、今までと全く違った意味で、哲学に強い親近感を覚えた。哲学研究者は今や、こうして、労働時間や、日本の経営の特質や、フェミニズムや、新しい科学論に取り組むのに、寸暇惜しむべき状況ではないと思う。そして、哲学教育の必要性はそれと同等に重要である。他の科学

では決して代わる事の出来ない哲学教育の深さ（概念規定や論理性の圧倒的優位）こそが、今の学生には、そして今のような時代には要求されている。もちろん、今の学生は一九五八年や五九年の、私の時代の学生ではない。しかしあの時、私の若き師たちが工夫を凝らして、情熱を持って私たちに教えたように、若き哲学者たちが、現代の焦眉の課題と結合して、今の学生の心をとらえて離さない工夫を、題材においても、教授法においても、労をいとわずしていただきたいと切に思う。

（１）後藤道夫「利潤・競争原理への労働者の『同意』と屈服」

『季刊窓』五号（一九九〇年秋）

（いとう せつ 昭和女子大学 経済学／女性論）

現代の倫理

岩崎允胤編著

平和と民主主義のために 日本の歴史的な現実とその課題への着目を失うことなく、われわれにとっての現代の倫理、ニヒリズム、非合理主義に対峙し、人間の尊厳、平和と民主主義に根ざす倫理を体系的に展開する。たんなる倫理思想史ではなく、新しい観点からの試みである。

○内容から 序章／現代倫理学の課題 第一部現代倫理の理論 人間とその生活／生活と倫理／個人と社会／倫理的価値／倫理的自由／倫理的行為の構造／倫理的人格とその形成／平和と民主主義の倫理 第二部平和の倫理思想 仏教における平和の倫理／キリスト教における平和の倫理／近世以降のヨーロッパにおける平和思想 人名索引付

定価2575円

白石書店

東京都千代田区神田神保町1-28

振替東京2-16824

長き不在

真しな問題提起を課せられた本論なのに、感想文ともいふべき内容でしかないのを、お許し願いたい。専門的な論文でないので、論証やデータを備えていない主観的なものであり、概念規定や表現も自己流である。論者は哲学に興味を持ってはいるが、生物論や人間論などの具体的な問題に則してではない。専門的素養は無いので好意的に読み取っていただきたい。

さて「現代の」自然科学者の主要な部分は、その研究に哲学は全く必要がないと思ひ込んでいない。研究者が講義のときなど、哲学を必要だと感ずることもあろうが、その

小 原 秀 雄

場合でも自然観や自然像を再検討するために必要だと思ふ人はまずいまい。思想や社会的関心を持つ人以外は、改めて必要を感じず、新しく得た自然に関する知識や情報から既成の自然観を自己流に組み立てていくからである。一つには自然科学の講義などは事実に基づいた知識を知らせることが第一であり、「主観を交えずに」自然の解明の成果を、できるだけ精密に伝達すべきだと信じているからであろう。訴えたいものを込めるときには、研究態度や自分の体験等に則したものが多い。

しかしながら自然科学者が、自らの研究成果で確かめ得た

と思う部分は、現代ではごくわずかであり、多くは集団的研究である。しかも先端的研究にたずさわっていれば、短時間に関連論文を読むだけである。独創的な実験研究を行なおうとすれば、長い論文など読んではいられず、寸暇を惜しんで実験せねばならず、心を広げ思考を発展させようと考えるこんでいる時間などはない。フィールドワークとて同じで、夜研究者たちが酒を飲みかわしていたとしても、明日の鋭気を養うためにほかならず、研究上の議論をしていたとしてもデータの読み方についてなどがせいぜいだろう。といつて自然科学者がものを考えないとか、知的でないといっているわけではないし、知性溢れる人はいくらでもいるのだが、研究を進める上で哲学が欠かせないと感ずることは、ほとんどないということだ。ある指導的研究者は、有害だとさえいい切っている。もちろん領域でちがいがあろうが、研究が日進月歩といわれるところほど、「哲学不要」や「不在」の傾向は強い。

くり返しているが、それで困らないのだ。加えて、専門誌にどの位多く引用されたかが、その研究論文の評価となるし、科学者の評価ともなる。誰が自然科学の成果を相対化する（それは自らの成果をも相対化しかねない）哲学的な検討に、エネルギーを使うだろうか。今日の理論生物学といえば、数理

論的なものを指すのであり、哲学的な理論生物学は科学基礎論研究などに見られるものだろう。それとても一つの傾向としては現代の主流的な生物学の理論化だとみなし得るようだ。哲学に関心を払う自然科学の研究者は、既に第一線の研究者ではないといった批判も、生物学の分野では度々耳にした。いわゆる進歩的生物学者からである。

こうした潮流の隆盛は、自然科学の人類史における意義の問い直しを迫っている。かつては自然科学も含めて期待された、科学の普及、あるいは教育などによって「科学的なものの見方や考え方」が徹底したならば、不合理に満ちた時代の社会意識が変わるだろうというロマンがあった。しかし、現実の事態がロマンを吹き飛ばしている。この状況をどう見るかもまた、今日の哲学の課題の一つであろうか。

さて今日の科学教育の一つ、生物学教育では、生命の物質的基礎に関して、精密な分子生物学的知識が飛躍的に増大している。だがこうした教育を受けた若者たちに、宗教的生命観はもちろん、占いや魂など、不合理で迷信的なものの見方が蔓延している。現代社会の病理が生み出しているのではあるが、その中の新興宗教が科学（自然科学を指すと思われる）や合理を正面に押し出す例があつて興味深く感じられた。科

学の成果を取り入れない限り、新しい宗教が存立できないのかもしれないし、現代の科学が分断的で取り込みやすいのかもしれない。特に科学の成果が情報としてだけしか受けとめられず、自然科学を学んだ結果、新しい自然像を描き得るといった科学教育が成されていない結果になるというべきだろうか。学んだ若者たちの側に、対象の像を構成する能力も必要性もないといつてよい。

生命科学的物質的解明は進んでいるのだが、それと迷信の要求とは全く関係ない状態かもしれない。あるいはまた、現在の科学教育（理科）で学ぶ知識は、記憶するべき情報を与えるのが主だから、生命理解が進んだとはいえないといった見方もある。だが、どのような見方ではあっても科学的物質的な生命観が定着してもなお、新興宗教を信ずるか否かに影響はないのだといえるのではあるまいか。

論者がここでわざわざ例に引いたのは、科学教育に献身している教育者であればあるほど、中には「生命の基盤である物質交代のしくみを正確に精密に教える」ことで、こうした風潮に対抗できるとみなす考えがあるからである。現象的でない本質的な生命活動の「普遍性」を分子レベルで理解しても、多様な生物の生態や人間と人間的な行動をする動物たち

などの実在を知ると、「不思議」だとの感じが湧き上がるのがしぜんである。その多様さをひたすら進化の結果だと説いて、進化の普遍的法則性として自然選択と遺伝的変異のしくみを、数式を用いるなどして精密に集団遺伝学の知識を動員して教えてみても、「不思議さは増すばかり」であろう。たとえばDNAは、実に不思議でうまく働くということになつてしまふのではないか。

実は歴史を実証的に扱うとは、どのようなことなのかは哲学的な問題でもある。また現代の進化理論である総合説では、種内変異を起すしくみなど、一部を解明したといえるに過ぎない（より厳密に言えば、進化の起る要因の一部の推論というべきだろうか）。進化を矮小化しており（この見方などがもう通じないが）、進化の法則性については、要因も含めてほとんど解明されていない。これは進化否定ではない。進化の事実は自然の実態が証明しているとみなせる。厳密な実証かと問われれば、実験の実証と異なった方法ではあるが、実験室で精密に行なった実験といえども生物についていえば、物理学者にいわせれば物理法則上の精密さでは欠けるといえるのである。

生物の諸現象を物理的に解明しても、それは物性の対象としての生物の解明である。それは自然科学として一つの分野

の成果であろうし、生物的自然の一面——物質的側面の解明である。そしてこの構造的関係の位置を示すのは、哲学に基づく理論生物学の役割であろう。今日の生物学では、この位置づけが明確ではなく、したがって生物現象についての階層的理解が充分ではない。対象の特殊性をふまえない生物論が、ほとんど絶対的真理のように見られている。現代生物科学者や科学史家の中でも、現代の主要な潮流である還元的普遍性の考え方を、自然科学の発展と評価し、唯物論的前進ととらえる発想が多い。自然科学が物理学と同義になりつつあるし、普遍性をミクロな、より下位の階層にだけ求める傾向が強い。生物には生物の特殊性（生物のみの普遍的法則性）があり、それを無視して「質」を見ないのでは、本質の理解のしかたが問われてしかるべきであろう。生物は有機体であり、有機体としての特殊性を普遍的に備えている。然るに生物有機体論は全体論的な見方とされ、「全体主義的」な発想だとか「觀念的」だとの短絡的な批判も見られる。生物が集まって歴史的に構成した生物界は、単なる物質系としての性質だけではなく、非生物的物质系と異なる有機体としての特殊性が生み出されている。集合や統合によって生ずる法則性を見出すのを現象論的、あるいは全体論的とみなすのが最近の傾向である。

自然科学の対象は自然である。理論的には全物質がその対象である。具体的には自然（物質）は、自然「界」を構成し、人間の出現以来社会化によって人間（社会化された自然でもある）自身と共に「社会」を構成し、「人工」物をつくる。狭義に、あるいは一般に自然とは自然界を指すのがふつうである。自然界は歴史的には自然史を経て存在し、ミクロからマクロ、素粒子から宇宙まで、また生物的自然と非生物的自然（無機的自然）を構成する。人間の出現以来、基本的には全て社会化され人間化されている。社会的法則性の影響を受けて変化しており、原生自然とされる地域や海底もまた、保存や調査などの人間の社会的営為の対象になっている。保護区などになっている秘境も、そうした原生自然の一例である。さらにまた、社会的生産物も、あるいは都市なども、物質の存在形態としてみれば、歴史的に形成された階層性を備えている。社会も基本的に社会化された自然でもあり、構造を表わせば社会（自然）となり、自然的性質が内包されている。階層的理解の重要さは改めていうまでもないが、それには質的な法則性のちがいを知らねばなるまい。脳の思考の働きのしくみを、物理的に解明することは重要であるが、しくみが思考の内容に影響を与えることはあっても、決定的に規定

されない。思考内容を規定するのは社会的なありかた及び、人間形成を含めて人間的な法則性である。同様に、動物体を動かすしくみは、動物の生活行動に機能的に影響するのであって、生活行動は生態的条件とのかかわりあい、営まれる。体機能の内的しくみを精密に分子レベルの機構で説明しても、このしくみが行動の生態的機能を決定づけはしない。たとえば餌生物の存在は捕食行動を開発するが、餌生物は捕食者の内的なしくみから導かれるものではない。外的な条件が内的な過程に影響して、行動が起される。その行動の様式は基本は種としては生得的で、内的なしくみが十全に機能しないと行動はできないのであるが、餌動物との出会いには内的なしくみとは全く別の法則性である。生物界における生物どうしの相互作用である。

複合された系や物質がもたらす相互作用は、自然条件下でのものが問題である。複雑であり、多様な条件がかかわり、偶然的な要因が含まれていて、完全に同じ条件は起り得ないとみなせる。したがってしくみの解明には条件をコントロールした実験室での実験が、重要になってくる。とはいえ、法則は得られた後か、法則化するときにかではあるが、自然条件下（ここでいう自然条件とは具体的なフィールドでという意味で、

都市でも同質である）で再度問われねばならない。ある面では実践のためということであり、技術化でもある。ただし今日の技術は、この点で問題もある。むしろ複雑な自然条件下でも所与の機能を果すべく、条件を排除または逆に適合させる非自然的な、ある種の粗っぱさと強さを持つていいる。バイオテクや現在の医療などに、こうした傾向をみる思いがする。

技術の強引さは、企業や行政の要請や競争などによるものかもしれないが、科学にもその傾向が影響しているように思える。実験室という特殊な条件下での再現性やミクロな法則性の検討などにおいて、実験室での純理的な（？）結果が根源的な普遍性を備えた本質的な答とみなされがちだ。自然の諸現象から共通の要素や要因を純粹に抽出したと考えるからだろう。これは一面での正当性を持つがまた、物質の具体的な存在形態である「現象」の出現するしくみが問われる場合は、本質的解明の一つの「段階」となる。本質は現象のうちにのみあり、現象は本質的であると思うが、こういった論題をこれ以上簡単に扱うことはできない。また現代の科学や技術の根源的な評価にかかわってくるので、論者の手に余るからである。

遺伝物質とそのしくみの具体的な発見をはじめ、技術の発

達からミクロな物質の世界が知られて現実に生物の物質的解明が進んだ。生命活動を物質の原子のふるまいとして具体的に明らかにした結果、構成物質としての非生物が生物体をどのようににつくっているかがわかりつつある。この分子生物学が開いた生命観（その延長上に社会生物学もある）は、多くの唯物論哲学者や社会科学者、あるいは生物学者の中で多少とも哲学に関心を持つ人の中にさえも、観念的生命観に対して物質性を科学的に実証したとして歓迎されたのである。このような観点に立てば、生物の多様性は現象的なものである。多様性の記述などは前近代的な羅列的博物学からの名残りであり、種は「物質交代の型のちがい」であるとか、進化によって生じたものといった規定ですます論理が述べられたとしても不思議ではない。

現代社会がもたらす人間性の荒廃などには、一見前近代社会における人間性や人間関係よりも後退したものがある。文学における人間性の理解などには無論のこと、自然科学でさえも発想において近代科学より優れた例を見るのに、一見現代社会に批判的な科学史家の論述の多くが、なぜ現代の自然科学をほとんど無批判に肯定するのかが不思議である。現象は本質的であり、多様な生物の存在を現わす本質的な法則性

が個々の「現象は本質そのものではない」と混同されたのは、よりミクロな発見への滔々たる大きな流れに傾向づけられたためであろう。多様性は斉一性を備えて、雑多と区別され位置づけられるものである。ミクロな法則性の発見にも価値を認めるものの、この流れは自然科学各分野の対象の持つ基本的法則性が他の対象から区別される特殊な普遍性（特殊性）であることを見失い、自然の多様さや多彩さを単なる偶然的現象とみなしてはいまいか。数式に表わされる、抽象的な法則が本質的とみられる傾向もある。技術でさえも、現実での実践から離れ、自然科学の発見も新しい機械などの操作から導かれるものが価値づけられるにいたった。コンピュータやエレクトロニクス、電顕などが自然科学の解析の手段から研究方向を規定するようにまでいたっている。

どちらにせよ、今日の技術はもちろん、科学も、人間の社会的営為である。現代の自然科学は、具体的には現代という時代の歴史的制約下にある自然科学である。また対象となる自然もその時代の社会的影響下にある。自然は社会化されているのである。

現代までに法則化された自然科学からのみ描く自然像は、厳密に精密に描けば描くほど社会化されている具体的な自然

からはもちろん、多様で多彩な自然の全体像からの「ズレ」を生む。物質（生物を含め）の存在様式の多様さなどは、先にも述べたように本質的なものではないとみられる。実験室での研究においても、また合成物質の報告などからも、物質の多様さを感じる研究者も多いだろう。しかし、この多様さは、自然誌や自然史、自然地理、さらには現実の具体的な事物などに見られる多様さとは程遠いのである。

哲学への希求は、現代の科学のみから導かれる自然像や合理性、あるいは科学的とみなす実証性などと、自然との間にズレや理論的不斉合などを感じた際に生ずる。現代では、こうしたズレを感得する感受性を失った科学者が多い。一方先に例にあげたように教育と、現実の日常的認識との間のズレや、科学・技術が今日深く関わっている環境問題や自然破壊については、生活者から科学・技術の発達のしすぎという見方で、現代の科学や技術への批判が生まれている。情報化時代の今日ではまた、センセーショナルリズムとも関係して科学と迷信とは紙一重とでもいふべき状況にある。個々の自由の尊重とエゴイズムの発達（民族問題も）という社会的風潮に適した、利己的な遺伝子（この表現は巧みなPRだが）の存在という「仮説」に基づく行動学書が話題を呼んだのがその一例だ。

社会の動きと全く歩調を合わせないまでも、それが自然科学者を通してその発想等に影響を与え、一方では対象とする自然に則しつつも、他方では歴史的時代的制約の下に対象の選択などに社会的意識との関係が生ずる。自然科学者もまた、社会的意識を共有するのである。さらに科学研究の成果や知見が社会の中でそれなりの働きをするのであり、社会的ニーズといわれるものと関係する。社会的ニーズは単純ではないが、研究調査費や賞などによって時代のリーダーシップの影響が著しい。科学技術の発展が絶対善であるとの見方には、科学及び現代社会の見方との関係を問わねばならない点がある。というのは、絶対善の考え方は「科学技術」は双刃の剣であって使い手によるのだとみなす。そしてこれは、現代の科学技術が具体的には現代社会の中で機能するのであって人間が生み出したものは常にその生み出した社会との関係があるのだとする主張に対し、現代の科学技術だけが別でいわゆる中立的である（自然と自然科学との区別をした上で）との論理を証明する必要があるからだ。

いわゆる環境問題の認識以来、現代の科学（技術はもちろんだが、技術のもととなる）に対する不信は、批判や否定を含みながら、具体的な生活する人間から出て来ている。もちろん

ん、そうした声は、科学の絶対善を信じている科学者には届かない。かつて絶対善を信じていた化学技術者が、後に公害などで苦しんだ例のように、科学者もまた、こうした批判的眼を持つ必要があると思うが、自然破壊や環境問題以来多少の変化はあるものの、科学は技術とは別と割り切ったり、あるいは科学の力でこれらの問題を解決できると信じていたりする。批判は、実は異なる方向の発達を目指し求めているのだが、現在の段階では現代の科学技術を超えた具体的な、いわゆるパラダイムの転換が構成できているとはいえない。欧米では東洋思想やエコロジズムがその萌芽であるともみられるが、これらの潮流も多様であり、まだ科学技術の上で具体化されたものとなっていない。この問題は、現実の企業社会における巨大な物質的力と、その中における現代の主流の科学技術とからみて、果してそれを超える論理の現実化が可能であるかといった哲学的・理論的課題でもあろう。そもそも理論とその力とはどのようなものなのか、その形態の変化をさえ、黙示しているように思える。現代の科学技術への批判が一部は宗教的、そしてヒステリックにさえ見えるような情念的観念的になるのにも、根拠があるように思える。現代の科学技術が物質生産などで巨大な実績を上げている以上、

現状を肯定的にみなすのにも、それなりの確かな物質的根拠がある。分断的で多様で多彩な物質生産など（単純化を許してほしい）の状態を反映しているのであろうか、分析的還元的な（機械論的あるいは素朴實在論的ともいうべき）歴史性を欠いた思考に根拠を与えているのである。一方でこうした物の支配と人工化された都市環境の閉塞状況からの離脱を求める情動がある。人間学的な（論者は人間（ヒト）と表現する）発想としての感性的情緒的な反応を含めた論理が必要だと論者は主張したいが、それは別の機会にゆずるとして、現代の科学・技術に対する批判が、抽象的理念的であり、一方で情念的となつて、共に「情緒的」「観念的」になるのもしぜんではなからうか。これらを反科学的観念的であり、かつ思弁的で非合理的と非難し、具体性を求める反批判にもそれなりの論拠はある。とはいえ、批判は実は生産的であり、社会的な真の有効性を考えるときどう評価すべきかは問題であろう。現代社会や人間の問題をここで述べる必要はあるまいが、いわゆる自然破壊や環境問題は、現代の主流の科学技術及び従来の労働運動などの側からは提示されなかった。先に述べたように現代の科学技術批判と同様に情念的で、感性的直観的な動きから出ていわゆる市民運動となった。人間環境の物

質的現実の反映と思える。大量生産消費の社会がもたらす一様化や、管理的システム化とその社会に組みこまれる人間の存在形態その他の現況を、論者は「自己家畜化論」からの人間存在の基本的自己運動によるものとみなした。詳細は別にゆずる（たとえば「人（ヒト）」に成る「大月書店」及び唯物論59「人間（ヒト）」と自然の社会化」（東京唯物論研究会）が、ヒトである人間の内なる自然性と、道具及びそれから派生した全ての社会化された「自然」物との固い結びつきによる相互関係が、人間のありかたの全てを決定するとみなした。論題とのかかわりでいえば、社会と文化の発達によって人間の生活はより「文化的」になるが、それは作り出される「もの」や自然の社会化の進行によって、人間はそれに一層依存的になり、人間の全てがくみこまれてゆくのである。科学及び技術もその例外ではない。このような「世の中」では「有効性」がまず問われ前述したように「現代の」科学界（欧米が主だが）でより多く引用される優れた論文などの業績を持つ科学技術者こそが一流だとされる。こうした業績も上げないで、抽象的に現代の科学技術を批判する理論や、自然像を描く理論的研究などには否定的評価（となるのが問題だが）が大勢を占めている。なにが真の「有効性」か、あるいは現代社会で

の有効性に基く判断で、学問を評価してよいのかといった問いは当然発せられているが、今日の社会における圧倒的な物質的な豊かさの実現は、「善」であるのは確かでもあるため、問いの声はかすんでゆく。今日のマス時代は知的課題は、大衆性を得にくく、少数のための媒体の存在をさえ難しくしている。論者の人間の自己家畜化の論理からすれば、この状態がよりいっそう批判の土壌を失なわせてゆくのである。散文的な表現を許してもらえば、この状況は思想の一層の「自己家畜化（ベット化）」的な状態であり、様々な意味で管理的で文化のゆきとどかぬ「辺境」や「自然」の中にのみ新たな息吹きが可能だといえる根拠を成す。

当然のことながら、「辺境」にはなお前近代が生きており、今日の科学批判などにも前近代的要素が含まれている。一方、一流の科学者云々や「現代の」科学の絶対善を主張し、国立大学でエリートコースを歩んだ科学者たちが国家に科学振興策と共に研究費の増額等を当然のように求めるとき、科学の規定その他哲学的に改めて問われるべき課題の多大さを黙示する。しかし、哲学者は自然科学者ではないので、現代の科学の成果の批判を求めるのは無理かもしれないが、ほとんど肯定的に現代の生物学の成果を唯物論的云々と論じているの

を見ると、寒心にたえなくなる。そして自然像の構築が、自然科学の目的であるとは見なされなくなつて（というよりも自然科学者の目的ではなくなつたというべきか）いる。世界観の基礎に影響を与える以上（今日の多くの自然科学者の自然像と自然観とは現代の科学に基いて形成されているが、それは存在によつて無意図的につくられているのだらう）、必要を認める自然科学者か哲学者、またはその協同研究によつて自然像は生み出されねばなるまい。

実は生物学の分野こそ、エコロジーをはじめとし、自然保護や環境問題、臓器移植や生命倫理に環境倫理、バイオハザード、動物の権利等々、現代の課題が多い。哲学の分野がどうこれに関わるのか専門的にはわからないが、一般的イメージからいえば哲学的な見解が求められるところである。生物学、特に理論生物学は、ルイセンコ理論に代表されるソビエト生物学の過去の負の遺産が大きな影を落してきた。哲学過剰がもたらしたものとされ、観念的（？）理論を忌避し、理論生物学は数理論といった考え方が支配的となつた。

貨幣の物質的構成や量、その物理的運動などをどれほど精密に数量的に把握できても、経済の法則性が解明されたとは誰も思ふまい。また同じ炭素原子からできているダイヤモンド

と黒鉛とは、物質として異なる上に社会的には大きく異なつた働きをする。こうした見方を誰もが肯定しながら、生物現象を物理学の法則で説明しきることが科学的で生物学の十全の目的だと思ふ生物学者が少なくない。現代社会科学に対する批判は、反科学とはみなさないが、現代自然科学への批判は反科学とする科学論はよく見かける。また、科学史家や科学理論研究者の中に、思想の先見性や優位、重要性を主張する一方で、現代進化学論などへの理論的批判を「観念的」「抽象的」とみなしてしまふ人が多いのはなぜか。

論者のこうした主張を含めて、「前近代」への危険な流れとみなす見解も強いだろうか。

文化遺産だけでなく歴史的遺産の全てを価値のないものとみなすのは、歴史性を尊ぶとするならば奇妙であり、古いからとてその考えの全てが誤りとはいへまい。断つておろが、こうした論争をしかけ、「火中の栗を拾う」ように加わろうとする意志は無い。また、本論もまた、新しい展開が期待し得るほど有効で価値があるものとは思われず、グチに近い故に黙殺されることであらう。それにも根拠がある。

とはいえ今日の環境問題は、これまで述べたような現代の物質生産の肥大化した社会動向に課題を提起した。それは論

理的には自然の法則性に合法的に社会化する、あるいは利用するならば、おそらく破壊的状况が起らなかったはずの自然利用が、黙示した「成果」であった。科学技術の適用のしかたが問題だとする見解もあるし、その通りである点もあろうが、再生や補正をしようとする科学技術もまた破壊を引き起す例もあって、科学技術そのものが問われている面も否定できまい。なん度も指摘したように現代の自然科学が、自然の存在形態に則しているかという問いも発せられるべきである。自然の法則性を正確に、その歴史的变化まで含めてとらえようとしているか、またとらえられるかという問いである。前近代のとみられていた博物学の科学的な部分、即ち自然を記述する自然誌と、自然の歴史性をとらえようとする自然史研究の方法とその論理とが価値を再認識されるべきではないのか。現代の自然科学と自然とのズレは、理論を含めて構築される自然像を、具体的な自然現象（それは分断されたものではなく）で検証するところで確かめられる。その場合に現在の社会化された自然を対象とするのでよいのだろうか。その点から、自然誌及び自然史と共に検証する自然を守る自然保護の重要性が、今日的意義を明示するのである。

このような自然の自然性ともいふべき存在形態への問い

に加えて、本論の主題からいささかズレるが、一言付け加えておきたいのは、人間の自然性、内なる自然についてである。人間と自然との関係において、また現代の人工的物質、あるいは社会化され人工化された社会的自然即ち具体的な社会の中で、人間が人間としての主体性を保って新しい文化と社会への欲求を育てていくには、人間がその内なる自然を認識して、その法則性にも即した人間（ヒト）としての自然さ（論者はナチュラリティと、野生的自然と区別して呼び分けているが）を保持するようにせねばなるまい。この新しい人間学的認識は、ヒトとしての人間、即ち種としてのヒト（生理的性質と混同されがちだ）を動物の種と比較してとらえる必要がある。種とは分類学上の単位ではなく、生物の基本的存在形態であるが、我が国では過去においても現在でも充分に生物学的に認識されたことはなかった。モダニズムが圧倒的であったからであろうか。また比較生物学的認識も、重要視されたことはない。動物とヒトとの比較によって、人間ひいてはヒトの普遍的特殊性がとらえられようが、その場合にも短絡的にサル類との比較で終り、ヒトに近縁な他の哺乳類についての知見は欠落に近いのである。欧米とは驚くほどのちがいである。主題からやや外れるので多くを引例し得ないが、動物の食生態は

その種の存在形態を規定する大きな要因であり古人類がグループハンターであったのにサル類には大型動物の捕食者としての生態を持つ種は見当らない。こうした状況でありながらサル類だけの中から人間の諸性質との類似を見出し、人間化（ヒト化）を論ずる傾向が強い。また、オオカミについての認識を欠いたままで、オオカミの育てた少女の話信じている例もある。エンゲルスの著作を知り、労働に注目する思想を持つ人の中にも、ヒトの特殊性や人間化の由来を、「科学的」に大脳の大きさや学習能力に求める傾向が大切である故であろうか。

こうしたヒト観に関する論者の説の詳細は拙著「人（ヒト）に成る」（大月書店）によってほしい。

以上のような問題の起る要因には哲学の不足や理論の未熟さがあげられようが、生物学者の側も非専門的な啓蒙的著作（自然像や生物像を描く）に価値を見出さない点が大きい。いわゆる進歩的生物学者の中にも、専門研究に力を入れずに云々と批判を加える人が少なくないためだろうか。

いくつかの生物的自然認識の問題を、くどくどと述べてきたが、進化の基本的理解も含めて「自然」及び「自然性」の解明こそが重要だと強調したい。このような表現が妥当かど

うかは別として、自然の自然性と人間の自然性（自然的側面）とは、その社会化の認識を含めて現代社会の潮流の中で大きく変貌しつつある。そのテンポが問題なのか、社会化の方法が問われるのか、失われるのが「自然な」のか等々が課題である。また、こうした問いを発し得る根源としての自然界（自然の系）の保全が急務でもある。と同時に人間性の自然な根源である衰弱しつつある知の保全と回復も重要である。そのため努力を要する時代なのであると思う。それには、絶えず疑問を発し問い直しをする以外はあるまい。科学が、常に正当性の解釈や説明になつては、根底からの問いは衰亡するほかないのではあるまいか。

今、戦後の荒廃から反省と新しい胎動が芽生えたように、知の荒廃地から、古き「玉」を拾い上げ、新たに知の種を蒔くことが求められている。かつて万学の祖といわれた哲学が再び不死鳥のように知をよみがえらすか、それが問われているように思う。学界で求められている境界領域という形が、それを語っている。論者自身は、社会を含めた全「自然における人間（ヒト）の位置」という「有効性」なき命題が改めてつきつけられている想いがしている。

（おばら ひでお 女子栄養大学・動物学／人間学）

今、マルクス主義哲学の課題を考える

向 井 俊 彦

ソ連共産党が解体したいま、一哲学徒として、私は何を考えるべきか。感想を列挙するだけになるかもしれないが、マルクス主義哲学が何を課題とすべきかについて、率直に私の考えを述べることにしたい。

ソ連共産党の誤りについて、外国から見ると特に大国主義、覇権主義が批判されるべきであるが、さらに国内のいわゆるスターリン主義的体質、官僚主義・指令主義の問題も取り上

げられるべきである。ソ連共産党はその誤りを自主的に解決できなかったということが、歴史的事実となった。そういう重みをもつ問題として考えられなければならない。ゴーゴリやドストエフスキーの小説にも出てくるロシア人の官僚主義的体質ということもある。政治・経済の戦時体制（私はネッブの時代以外はほとんどこうだったのではないかと思う）ということが人々の心理に何をもたらすかということもある。一般化して考えると、権威主義的パーソナリティーの克服は人類史においていかなされるのか、これは、フランクフルト学派が探究したテーマの一つであるが、あらためて考えられな

ければならない。ひいては、組織と人間というテーマであり、管理社会の問題でもある。ソ連だけの問題ではない。日本人にひきつけてみると、いわゆる天皇制の心性という問題がある。歴史においてそれはいかに克服されるのか、重い課題として残されていると思う。社会主義への展望として考えると、社会主義への平和的移行のあり方の探究ということが、民主主義の深化、市民社会の成熟とあわせて、権威主義的パーソナリティ克服の可能性を切り拓くうえで、重要な条件として、議論されるべきだと思う。

二

つぎに、(戦後の)現代世界の三つの矛盾とか、四つの矛盾ということがよく言われ、そのうち、社会主義も世界体制になったとして、資本主義体制と社会主義体制の体制間矛盾がその第一の矛盾としてあげられることがしばしばであった。これはやはり誤りであったと思う。私は、これまで社会主義といわれた国も発展途上国の一種で、非資本主義的な発展方向を歩もうとした国であったと思う。そしてまた、現代世界の第一の矛盾としては、発達した資本主義国と発展途上国、

帝国主義と植民地・従属国の矛盾、いわゆる南北問題があげられるべきであったのだと思う。体制間矛盾を第一の矛盾にあげるのは、先の矛盾の人類史にとってもつ重大性や、発達した資本主義国の経済の強さとその帝国主義的政策の犯罪性を明らかにするうえで障害であったと思う。また、社会主義国が国際的に封じ込められているのを逆に合理化し、まるで体制間競争に勝った方が正しいのだといった論理になってしまっていたと思う。

三

ソ連経済の専門家が報告するシンポジウムで、私は、これまでしばしば体制と法則が混同される傾向があったのではないかと感じる。一九八九年九月、ベルリンの壁崩壊の二ヵ月前、資本主義、社会主義といっても、経済の発展の法則性ということでは共通性もそうとうあるとは思われないか、という私の質問に、A氏は、社会主義と資本主義では法則が全く違うのだと答えたものだ。技術の発展をとっても、管理のあり方をとっても、産業間や、生産と消費の関係をとっても、いくらも共通の法則性があるのではないか。発展途上国の経

済建設を考えると、発達した資本主義国のとった経済発展のなかに、体制とは相対的に独立した法則性があることを学ばなければならぬし、発達した資本主義を批判的に研究するときにも、体制批判だけでなく、体制がもし変わったとしてもそこに貫かれている経済発展の法則性について同時に明らかにしなければならぬ。私にはこれは社会科学の常識だと思われるが、社会主義経済の専門家にはどうだったのだろうか。

一九九一年九月、ソ連政変劇の後、ソ連の計画経済・指令経済の誤りを指摘して、B氏はマルクスにまで遡った。何もかもがマルクスになればならないと思うのは、ひいきの引き倒しだと思う。マルクスは、世界情勢の見方が先進国革命論であった。だから、ロシア革命は予見できなかった。にもかかわらず、ザスーリツチへの手紙も書いている。そこにマルクスの偉さをむしろ見るべきだと思う。先進国と後進国とは経済建設の性格のどこがちがうか。独占資本のあるなしだけでなく、その基礎にある市場の発展が経済発展上にもつ位置を明らかにしていなければならなかったということになる。先進国革命論の図式をそのまま適用しようとするのではなくて、後進国革命の経済建設のむずかしさということが全

面的に問題にされなければならなかったのである。

ソ連・東欧の激動によって、いわゆる歴史の「神話」としてのマルクス主義は、過去のものとなったとしばしば言われる。私は、人類史の展望としての科学的社会主义は少しも古くなっていないと思う。マルクスの第一の業績は『資本論』なのであって、今なお支配的である資本主義経済の分析にある。その理論的精神は、資本主義経済についてもその現実の肯定的理解のなかに否定的理解を含めるものである。単なる批判ではない。資本主義経済の理論的分析、その運動している矛盾の析出において、私は現在でもその基本において右にできるものを知らない。また、発達した資本主義国に生き、資本主義の諸矛盾をつぶさに知る者として、何といっても資本主義社会は階級社会なのだから、人類史の展望として、資本主義から社会主義へというマルクス、エンゲルスの『共産党宣言』は古くはならないと思うのである。これがマルクスの第二の偉さである。ハバーマスは、発達した資本主義国における労働者階級の闘争に悲観し、フェミニズムの運動や環境を守る運動、若者の文化の動きなどを支持して、歴史哲学の時代は去ったと考えるようになっていた。⁽²⁾もちろんこれらの運動も重要なのだが、しかし、それらと階級闘争との関係の

考察を深めなければならない。今、あらためて、人類の将来を展望する歴史哲学が重要な課題となったと言えないであらうか。

四

この間の激動のなかで、民族問題が深刻な問題として、あらためてクローズアップされてきた。戦後すぐの植民地の独立とはちがって、多民族国家における民族問題として、民族問題の人類史における位置のさらに複雑な性格が明らかにになったのだと考えられる。階級と民族というテーマは、しばしば論じられるテーマであったにもかかわらず、私は、史的唯物論の重要テーマとして、どれだけ論じられてきたか、とあらためて問い返さなければならないと思う。高島善哉氏に『民族と階級』という著書がある。³⁾一九七〇年の議論であるが、民族の問題を史的唯物論の見地から問題にするうえで、重要な問題提起がなされていると私は思う。氏の議論は、市民社会主義とか生産力主義とかと批判されてきたかもしれないが、本書は氏の他の著書と若干性格のちがいもあって、民族の問題を市民社会の成熟の問題や生産力の発達の問題と合

わせて議論していることは、人類の主体形成の過程を総体として問題にしようという意味を汲み上げることができるのであって、この見地は、資本主義社会の矛盾の洞察の議論と結合されるならば、現在の問題状況を考察するうえで、大いに参考になると思うのである。

これまで、ナショナリズムの問題は大国の拡張主義的民族主義や小民族でもとすれば陥りがちな民族排外主義という点から見られがちであったが、それに対置されるインターナショナルイズムが、かえって大国の民族主義の隠れみものになっている場合もあったのではないか。唯物史観は、人類の人間の解放の理論であって、人類のすべての構成員の政治的自覚に資するものでなければならないと思われるが、その観点から、人類の主体形成の過程における民族的自覚の位置を明らかにしなければならぬといえるであろうし、発展途上国における社会変革を考えると、それは必須の課題である。われわれは発達した国の観点からものを見がちだったことをいましめなければならないのではないか。

すべての民族の政治的経済的自立の尊重と、相互理解の前進がはからなければならない。文化の問題は民族のアイデンティティの問題でもある。経済大国日本のそれではなく、

発展途上国のそれを考える、そういう国際的視野が重要だと思ふ。

五

民族対立はしばしば宗教対立をとまなう。だから、いつも複雑な問題となる。私もはじめて外国を歩く機会をもったが、日本にいたのと、一步でも外国に出てとでは、宗教の問題は全くちがったものと感じられてくる。アルチュセールは「国家のイデオロギー装置」について論じ、その主要なものについて、中世は教会と家族のセット、近代は学校と家族のセットと考⁽⁴⁾えた。中世ほどではないにしても、ヨーロッパにおけるキリスト教の根強さということが現代においてももっと考えられなければならない。また、イスラム教の世界やその他どこを見ても、宗教の問題の根深さを考えずに社会の变革を考えられるか、私は考えられないと思う。マルクス主義者はしばしば、宗教的教義の非科学性を批判すれば、それで宗教批判は終わったように考えてはいしなかったか。しかし、マルクスはちがう。宗教批判をもっと重いものとして、なぜ特定の宗教形態がその社会で支配的なかを、経済的土台の

あり方から展開しなければならないと考えていた。そういう精神にあらためて学ばなければならない。近年は文化人類学や宗教社会学の宗教諸現象の研究も積み重ねられている。新々宗教ブームに注目するだけでなく、もっと原理的な宗教論が重要な課題となっている。

最近出た竹内芳郎氏の『意味への渇き』⁽⁵⁾も、この点で、いい刺激になるのではなからうか。氏は本格的な宗教の形態を原始宗教―国家宗教―普遍宗教と区分する。後二者は、これまで民族宗教、世界宗教といわれたものをいいかえ、いわゆる天皇制的心性を天⁽⁶⁾皇教と考え、それを国家宗教として、それに対する普遍宗教の歴史的意義を、国家を批判する精神というところに求めようとするものである。ここでは、民族の問題はかえって位置づけがあいまいになるし、普遍宗教はほんとうに普遍的かという点から、人類普遍の倫理をあらためて問題にしなければならないと思われるのであるが、しかし、天皇制の問題を包括的な宗教論として展開しようとしたところが刺激的である。氏による史的唯物論の諸カテゴリーの書き換えを批判するだけでなく、その文化論や言語論、宗教論の批判的検討が重要であると思う。われわれは、立場のちがいにあまりこだわらず、事柄に即して議論する、そこで唯物

論の精神を鍛えるということではなければならないと思う。

宗教論や文化論を考えながら、唯物論の認識論や意識論を振り返ると、そこに、重要な盲点があったのではないかと思われる。知覚と思考を中心に論じるだけでは不十分であって、想像力の問題がぜひともつけ加えられなければならない。ルカーチが『美学』で、バヴロフの信号体系Ⅰ、信号体系Ⅱの議論について、信号体系Ⅰをつけ加え、知覚の世界と言語の世界に対して、想像力の世界に理論的位置を与えようとしていたことを思い起こす必要があるだろう。⁽⁶⁾

人類普遍の倫理のあり方については、バイオエシックスの観点からエンゲルハートが、非宗教的倫理のあり方を問題にしているが、私は、宗教的信条のちがいを踏まえかつ越えるという意味で、いわば包摂的普遍倫理のあり方を議論すべき時代になっているのではないかと思う。鈴木茂氏は、マルクスは人間の普遍的本性なるものを否定しているのではない、むしろそれを積極的に明らかにしようとする立場だということ⁽⁷⁾を掘り起こし、その意味からフロムやチョムスキーの議論に注目してきた⁽⁸⁾。また、ユネスコ等国連の諸機関において、人権について自由権的基本権や社会権的基本権だけでなく、いわば第三世代の人権として発達権的基本権の主張もな

されている。私は、平和や環境の問題を人権の問題として捉えることも必要だと思うが、人間の普遍的本性についての科学的研究と、人権についての人間の実践的な主張との関連を問題にすることが、哲学の重要な課題になるのではないかと思う。

六

科学と哲学の関係を考えるとき、マルクスの第三の偉さとして、ダーウィンの進化論やモルガンの文化人類学をいち早く評価し、発展の弁証法を包括的に研究しようとしたことがあげられる。エンゲルスがいろんな分野の自然科学の前進について系統的な目配りをしながら、弁証法的唯物論を前進させようとしてきたことも忘れてはならない。われわれは、あらためて諸科学の前進とともに歩み、唯物論のあたらしいあり方を絶えず探究しなければならないのだと思う。

そういう観点から、自然弁証法という階層性のカテゴリーが重要であるし、それをさらに一般化して考えてみることも重要であると問題提起したい。物理学のなかでも、発展の論理の重要性に注目するものがいくつもあらわれている。プリ

ゴジンのような議論⁽⁹⁾も哲学でも議論されるべきだと思う。物質についても、進化するものとしての物質観、運動・発展する主体としての物質観、それが、そうとう広い視野をもって問題にされるようになってきているし、その点から階層性のカテゴリも、たんに進化・発展する物質の総体としてのイメージという意味だけでなく、素粒子論で発見の論理として階層性が問題とされた精神に立ちかえて、二つの階層間の関係ということを立ていって議論する、そういう土壌が開かれていると思う。レーニンの物質の哲学的概念も重要であるけれども、レーニン以後の物理学の発展をふまえた、弁証法的な物質観を具体的に示さなければならぬのが今日の科学の発展状況ではないか。その意味で、町田茂氏や有尾善繁氏の問題提起⁽¹⁰⁾に私は賛成である。

生物学では、それがさらに具体的に捉えられなければならない。唯物弁証法の論理学が生物学に役に立つとはどういうことが真剣に問題にされる必要がある。松村一人氏がヘーゲル論理学を唯物論的に書き換えようとしていた頃はそういう観点がなかった⁽¹¹⁾。しかし、ヘーゲル論理学の概念論をよく見ると、主体としての生命の論理、それがヘーゲル弁証法の中心であることが分かる。こういうヘーゲルの論理をも批判

的に摂取する観点を加えて、現実の矛盾の論理的性格をはじめ弁証法的唯物論の諸カテゴリをめぐる論争をあらためて振り返ることにならなければならないと思う。井尻正二氏の議論⁽¹²⁾の仕方にしても、ヘーゲル論理学に種の進化の論理がないというのはその通りだと思うが、そういう指摘に終わるのではなく、個体発生の論理をヘーゲルが明らかにしたそういう精神をもって、種の進化の論理を明らかにするとは何かを考察しなければならぬ。そして、ヘーゲルは生物の系統発生の論理を必ずしももっているわけではないのに、人間精神については系統発生の観点をもっている、それをどう唯物論的に汲み上げるか、そういう精神からの探究が必要であると思う。

マルクスの社会観・歴史観における階層性の論理の適用、こういうこともある。土台―上部構造の関係の理解や鈴木茂氏が系統発生的人間史観として示そうとしたマルクスの人類史についての大きな見方、これらも新しい観点から議論し直すべきであり、自然観と社会観の関係についても、方法や論理の点から総合的に議論しなければならぬ、それが、哲学をめぐる理論状況だと、私は思う。

文化に関する理論を考えても、文化人類学や言語学、精神

分析等の発展を一般化して、たんに文化に対する知見をひろげられたというだけでなく、方法や論理の問題をもっと見なければならぬと思う。ここでは、いわゆる表層・深層という分析の枠組みについての評価の仕方が問われなければならない。たんにイデオロギー批判の観点からだけでなく、われわれが文化理論をこれらの諸科学の発展を概括しながらつくりあげる観点からも考えなければならない。そうすると、解釈の枠組み（梅原猛氏や川合隼雄氏が日本文化論を論じる場合はこうなっていると言いたい）と分析の枠組みを区別して、後者についてはむしろ、階層性の論理の文化諸科学への適用例として見られるべきではないか、と思う。フロイトが夢を分析してその底に願望充足という意味があることを明らかにしたこと、チョムスキーが話された文法構造・統辞構造の底にどのような深層構造があるかを明らかにすること、あるいは文化人類学が親族の呼称とかの底にどのような親族の構造があるかを明らかにすること、これらは文化諸現象の分析として重要である。私は、価値表現の底に他者を自己に等置するという意識されていない人間活動があることを明らかにしたマルクスの分析と、これらの分析との間に共通性を見ることができると、このことは、マルクス主義的文化理論を考えるうえで、

方法上の基礎の一つになると思うのである。

階層性ということをごのように一般的に考えたとき、哲学としてはそこにどういう寄与ができるか。階層性と普遍・特殊の弁証法との関係を考えることが、まず、われわれのなしていることであると思う。岩崎允胤氏の普遍・特殊の弁証法の説明は、言葉上は弁証法的用語を使いながら、実質的には形式論理学的分類の論理のことを言うものであり、形式論理と弁証法的論理の区別を明確にし、それぞれの意義を明らかにする観点に立っていないものと考えられるのであるが、氏が階層性の問題に普遍・特殊の弁証法を適用したことは、重要な問題提起である。氏には、普遍の特殊化の論理、とくに、発生的方法でものの概念をとらえるときの主要なモメントとしての普遍とは区別された意味で、より派生的なもの、より発展したものが実際にそのものの主要なもの、支配的なものとなるという側面の理解が全くないのであるが、二つの階層間の関係を明らかにする観点から、普遍・特殊の弁証法の具体的あり方を探究することが重要である。そういう観点は、生理的過程と心理活動の関係を考察しながら、生理学に対して独自の科学としての心理学の基礎づけを行なおうとしたルビンシュテインにもあるものである。⁽¹⁴⁾

七

最後に、イデオロギー批判とか哲学の諸立場の批判のあり方について、考えておく必要がある。唯物論と観念論というのは哲学の根本的対立であり、もちろん軽視すべきことではないが、様々な哲学の立場について、その階級的立場を指摘して能事終われりという態度にわれわれはなっていなかったか、ということである。この点では、ヘーゲルに学ぶ必要がある。批判すべき哲学の長所を自らの体系上に位置づけることが、その最も本格的な批判になるということである（もちろんすぐれた哲学について言っているのだが）。これが、その哲学が何であり、それ以上のものでないことを示すことである。いわゆるブルジョア哲学とされるものについてのマルクス主義的批判も、こうでなければならぬと思う。例えば、プラグマティズムはアメリカ帝国主義の哲学であるといつて、何かを批判したつもりになるのは間違いである。例えばパース、われわれにとつても学ぶべきものも多いのではないか。相手をけなすことと理論闘争とをとりちがえてはならない。サイバネティクスといえは弁証法的でないといわなければなら

ないような精神、構造主義といえは歴史的でないから、すべてが誤りのようにいわなければならぬと思う精神、これらは分析的な批判ではない。自らの哲学を豊かにする批判ではない。相手の理論のなかにどういう時代や学問の前進の反映があるかを明らかにする精神こそが科学的な精神である。立場が同じ者からしか学ぶことのできない精神では、精神が弱すぎるということになる。

われわれのなかに、すくなくともマルクス主義については、これまで社会主義とよばれた国々が先進国であつて、そのマルクス主義の議論を単純にすぐれたものと考えた精神がなかったであろうか。例えば、矛盾論の論争において、そういう論争はソ連や東独で解決済みである、こういう言葉を聞かなかったであろうか。もちろんどの国からも学ぶことが重要であるが、理論的精神においても、自主独立の精神を堅持して着実に前進すること、それが重要なことである。

註

(1) アドルフ・『権威主義的パーソナリティ』（三沢謙一・田中義久訳、青木書店）

(2) ハーバース『コミュニケーション的行為の理論(下)』

(丸山高司ほか訳、未来社)

(3) 高島善哉『民族と階級—現代ナショナリズム批判の展開—』(現代評論社、一九七〇)

(4) アルチュセール『国家とイデオロギー』(西川長夫訳、福村出版)、拙稿「アルチュセールのイデオロギー論についての批判的検討」(『唯物論と現代』第二号、文理閣、一九八八、所収) 参照。

(5) 竹内芳郎『意味への渇き—宗教表象の記号学的考察—』

(筑摩書房、一九八八)

(6) ルカーチ『美学Ⅲ』(後藤狷土訳、勁草書房)

(7) エンゲルハート『バイオエシックスの基礎づけ』(加藤尚武、飯田亘之監訳、朝日出版)

(8) 鈴木茂「マルクスにおける人間と理性」(鈴木茂論文集Ⅰ『理性と人間』、文理閣、所収)

(9) ブリゴジン、スタンダール『混沌からの秩序』(伏見康治ほか訳、みすず書房)、ブリゴジン『存在から発展へ』

(小出昭一郎ほか訳、みすず書房)

(10) 有尾善繁「現代における唯物論哲学の課題」(『科学と思想』第八一号所収)

(11) 松村一人『ヘーゲルの論理学』(勁草書房)

(12) 井尻正二『ヘーゲル「大論理学」に学ぶ』(筑地書館、一九八〇)

(13) 岩崎允胤、宮原将平「弁証法的カテゴリーとしての普遍・特殊・個別」(『唯物論』第四号、一九七五、所収)

(14) ルビンシュテイン『存在と意識(下)』(寺沢恒信訳、青木書店)

(むかい としひこ 立命館大学・哲学)

生活に根ざした哲学 へのいざない

島 崎 隆

大きな書店の哲学・思想書のコーナーに行くと、たくさんの本が並べられており、どれを選んでよいのか迷ってしまうのが現状である。しかし、生活と実践にまともな形でつながる良書は意外と置いてなくて、けばけばしいファッションに包まれたものをついつかまされてしまったりする。この欄は、哲学にほとんどしろろとだが、なにか良い、わかりやすい哲学書を読みたいという人たちに向けられている（また、非アカデミズムの哲学者の著作も紹介される）。以下では、唯物論、マルクス主義を中心として入門書を紹介したい。なぜならば、哲学・思想を、日常の生活が生み出す問題を解決する一環として真剣に考える立場といえ、個々人の努力は別として、他にほとんど存在しないというのが、経済大國日本の現状であるから。

最近注目されたものを紹介すると、現代人の生活スタイルをどう評価したらよいのかについて、最新の資料（官庁資料、新聞記事など）にもとづいて展開した、中村行秀『哲学入門』（青木書店）があげられる。ジャガイモの写真が表紙に載せられており、斬新なスタイルをもつこの本のメリットは、哲学的な

説明のさいに抽象的な言葉の羅列におわらずに、スポーツ、食生活、テレビなどの興味深い、しかも身近な現代文化をデータとして、それについて批判的に考えさせるところにある。本書は生活の豊かさとは何か、意識の発展と深まりなどの問題について理論的に展開している。私もその一人だが、多くの大学のテキストに利用されているようである。

とくに若者に訴えかけるスタイルで書かれているのは、『ソクラテスはアテネの広場で、小川のほとりで若者たちと語り明かしたけれど、僕たちは喫茶店での数知れぬおしゃべりの中からこの本をつくった』という、新時代工房制作『喫茶店のソクラテス』（汐文社）である。イラストもあり、写真が面白い。都市、消費文化、学校、男と女、友愛などについて、若手哲学者たちがフレッシシュに論ずる。続編に『公園通りのソクラテス』（同上）があり、モノとココロ、生命のリアリティ、性と人間、コミュニケーションと人々の連帯などのテーマが刺激的に展開される。ほぼ同傾向のものとして、若者と同じ地平に立つてファッション、食生活、セックスなどをテーマとして展開した、新世紀伴走舎制作『拘泥講座』（同上）があり、さあ、僕たちと「自分

さがし」の旅に出ようと、ソフトに語りかける。ところで、こだわりをもって「自分らしさ」を求めると、デカルトの「われ思う、ゆえにわれ有り」の主張とはどのくらい関係するのだろうか、などと連想することは不当なのだろうか。

一方で生活の問題に根ざしながら、他方で不可知論、相対主義、神秘主義、オカルト、非合理主義、感性至上主義、ニヒリズムなどの現代流行思想を精力的に批判するのは、仲本章夫氏の一連の著作である。氏は親しみやすい筆致で、ときにユーモアを交えながら、『理性の復権』（新日本出版社）、『生活のなかの哲学』（創風社）、『続・生活のなかの哲学』（同上）、『現代の流行思想』（学習の友社）などの著作を書き上げたが、氏の特徴は、理性的に考えることを人間にとってあくまでも大切なことと考える点にある。高田求氏もまた、長いあいだ哲学教育にたずさわり、魅力的な文章を書き綴ってきた。氏の『マルクス主義哲学入門』（新日本出版社）、『人間の未来への哲学』（青木書店）などによって、哲学とは何かを体系的に学べる。また氏の『新・人生論ノート』（1、2、新日本出版社）は読みやすいエッセイである。労働者教

育協会編『社会科学の基礎理論・哲学編』（学習の友社）、村本敏『人間・社会・歴史観入門』（同上）も、働く人々を対象にした、懇切丁寧に書かれた本である。

牧野道場を主催し、独自の立場から哲学教育を行ってきたのは、牧野紀之氏である。氏はマルクスやヘーゲル、さらに弁証法、労働論などを現実生活のなかに生かそうとしており、アカデミズムの哲学を痛烈に批判する。在野の哲学者として、氏の切り開いた境地は貴重であり、氏の著作を私も学生に勧めてきた。『労働と社会』（鶏鳴出版）、『生活のなかの哲学』（同上）、『ヘーゲルの修行』（同上）など数多くの著作を「鶏鳴双書」として出版している。だが、氏の名誉のために付け加えると、哲学をマスターするのに原書講読などはいらないとはけっしていいわない。「青年時代の一時期に、横文字しか読まない……という期間を、一年以上持たない人は大成できないと思います」というのが、氏の立場なのである。このあたりに氏のユニークさがたよるが、氏の自己宣伝の弁を最後に記そう。「まあ、自分でいうのも何ですが、私の哲学随想なんかを読むと、何て言うか、これま

でのいわゆる『哲学』とも、その例の『マルクス主義』とやらとも何かこう根本的に違っている感じがするでしょう？言葉の使い方や論理展開が。そう、これなんですよ。／これがわかるには「頭がいい」段階よりもう一段高まらなければなりません。」たしかに、こうした点に興味深い問題が隠されているような気がする。

さて、ほぼ同タイプの、非アカデミズムの哲学者として、三浦つとむ氏がおり、氏の『弁証法とはどういう科学か』（講談社）は私も学生時代に熟読しており、弁証法をどう現実認識の武器として使うかをわかりやすく、豊富な例によって展開している。氏は弁証法における対立物の相互浸透の法則や否定の否定の法則について、ユニークで説得的な説明をしている。そして氏の認識論、言語論、芸術論は優れた到達点を示している。林田茂雄氏もまた、自分の経験に裏づけられた、個人的で魅力的な人間論を展開しており、最近のものとして、『人間行動の弁証法』（白石書店）などがある。とはいっても、私は氏の学問論争よりも、たとえば、『自殺論』（三一書房）などを傑作と思う。氏は三回も自殺を企てたというが、氏の体験に裏打ちされた自殺論は

人間の真実に肉迫している。『親鸞』（同上）などで、仏教と唯物論は矛盾しないといひ、般若心経の独自の解釈を試みた林田人生哲学は、アカデミズム哲学とは別の峰を形成しているように思われる。

弁証法ないしヘーゲルをわかりやすく解説するというのは至難の業であるが、その点では、**鰐坂／有尾／鈴木編『ヘーゲル論理学入門』（有斐閣）**はヘーゲル『小論理学』のエッセンスをとともよくかみ砕いて解説している。自然科学者からの入門書として、**井尻正二『弁証法をどう学ぶか』（大月書店）**はわかりやすく、興味深い。この著作における自然の弁証法的分析は、哲学にたいして重要な問題を提起している。さて、論理学に対する入門書といえば、アリストテレスを継承した伝統的論理学、数学的論理学（記号論理学）、弁証法的論理学の三者をコンパクトに、しかも体系的に解説した、**仲本章夫『論理学入門』（青木書店）**が便利である。また、**沢田允茂『考え方の論理』（講談社）**は年少少女のためにわかりやすく「です、ます」調で書かれており、豊富な図表つきの好著である。論理と言葉に対する氏の信頼が伝わってくる。

古代ギリシャからの入門書として、**左近寺祥子『はじめての哲学』（北樹出版）**は、女性らしい筆致で人間、恋心、ことばなどについて語りかける。古典的なものといえ、**三木清『哲学入門』（岩波書店）**があるが、旧漢字・旧字体で書かれており、読みづらいかもしれない。哲学史の著作は多数あるが、とくに**唯物論研究協会編『哲学を学ぶ人のために』（白石書店）**は、多数の執筆者がそれぞれ工夫をこらしてとりくんでいる。**河井徳治『ビジネスマンのための哲学がわかる本』（日本実業出版社）**は、豊富な人生体験から語りかけるユニークな本である。ジョークと駄洒落をたつぷり効かした哲学史の本として、**加藤尚武『ジョーク哲学史』（河出書房新社）**がある。

ここで古典に対する解説書をあげることが適当かと思うが、一般的にはそうした類の書物はまた多数あるので、**エンゲルス『フォイエエルバッハ論』（大月書店・国民文庫）**への解説書として、**島田豊『フォイエエルバッハ論・講義』（学習の友社）、秋間美『哲学を学ぶ人へ』（大月書店）**を、**エンゲルス『空想から科学へ』（大月書店・国民文庫）**に対する解

説書として、**加藤正『空想から科学への社会主義の発展・訳と解説』（季節社）、白井厚『空想から科学へ』講義』（未来社）**をそれぞれ列挙するにとどめたい。

最後に、哲学入門書ではないけれども、哲学辞典を紹介しておきたい。わかりやすいものとして、**思想の科学研究会編『増補改訂／哲学・論理用語辞典』（三一書房）**がある。「わかりよいこと」が第一条件にあげられており、用例も豊富に、自由闊達に書かれているという印象をもつ。少し水準の高いものとして、**森宏一企画・編集『哲学辞典』（青木書店）、古在／粟田編『岩波哲学小辞典』**がある。

（しまざき たかし 一橋大学・哲学）

宇宙の構造と人間

多重宇宙と人間原理

この宇宙の諸々の構造は、物質間の実に精妙な組み合わせの下で成立しており、その必然的な進化の過程で人間は生まれた。その過程の研究から、人間という宇宙を認識する主体が存在するが故にこの宇宙が存在している、という「人間原理」の主張があちこちに見られるようになった。⁽¹⁾ 私達はこれまで、宇宙の構造や進化を、物理定数など所与の条件の下で明らかにすることを第一義にして、何故そのような条件が準備され

池 内 了

たか、の問題を後回しにしてきた。宇宙が、唯一この宇宙に留まる限り、それで十分であったと言える。ただ一つのは、特殊なのか一般的なのか区別できず、与えられた条件下での無矛盾性と必然の運動を論ずるしかないからである。

とすると、その条件を付与したものは「神の一撃」たらざるを得ず、これは喉にひっかかった骨のように、物理学者を不愉快にさせてきた。ブーツストラップ（靴紐）のように、この宇宙のなかで個々の条件が互いを規定し合っており、全体として斉一性を保つよう定まっていると考えるは成功しなかった。見出されたのは、少しでも所与の条件が異なっ

いれば現在観察している構造は発現し得ない、というものであった。(例えば、何故この空間は三次元か、という問いに、それ以外では永続する惑星運動と物質の立体構造をとり得ない、という答しか下せない。) 結果としての必要条件の証明は、神を排することにはならない。

一九八〇年代に入って、宇宙の創成についての新しいアイデアが提出された。それは、物理的真空の吟味から見出されたもので、二十年の胎動があった。ある仮想的な物質場を想定する。その場のエネルギーの最低状態を「真空」と定義する。場の入れ物である宇宙が膨張するにつれ、場の状態が変わって異なった「真空」へ転移することが強制される。この時、二つの「真空」のエネルギー差が宇宙に放出される。当然ながら、放出されたエネルギーは宇宙の膨張に反作用をひきおこす。時には、新たな宇宙の発生に結びつく。真空の転移が非一様であれば、様々な反作用を受けた宇宙の各領域が独自に進化できるようになるからである。これが佐藤勝彦らによって提唱された多重宇宙の創成のアイデアである。⁽²⁾

一方、従来のアインシュタイン・フリードマン宇宙では、時刻がゼロの宇宙は、すべての物理量が無限大となる「特異点」を免がれることができなかった。特異点で潰されてしま

わないのは、再び神のみである。真空の相転移を宇宙の始まりにまで敷衍し、特異点のない物理理論を構成する(これを「無境界条件仮説」と言う)ことを目指したS・ホーキングは、虚数時間という新たな次元を導入することにより、特異点を解消することに成功した。⁽³⁾ 宇宙は半径もエネルギーもゼロの「無」の状態から、虚数時間を刻みながら、やがて私達の認識しうる宇宙として登場する。この宇宙は、同じ道を辿って元の「無」に帰ることもできる。こうして宇宙の生成消滅は極めてありふれた物理事象になる。宇宙は、唯一この宇宙だけではないのである。(注 二つの多重宇宙の生成のアイデアは、共に真空の相転移は利用するものの、本質的には異なっている。佐藤らのアイデアは古典論であり、宇宙の各領域での相転移の非一様に注目している。一方、ホーキングは、宇宙の相転移を起こす過程での量子論的振舞いを扱っている。前者はチャイルド宇宙の誕生と表現し、後者はベビー宇宙と読んで、直観的に区別している。)

これら多重宇宙の生成モデルを受け入れると、多数の(原理的には無限個の)宇宙が存在し得るし、その各々が異なった物理定数を持つて独自の進化をすると考えてよい。とすると、私達のこの宇宙を特徴づける物理定数が生み出した構造の最大の成果は、この宇宙を認識する主体としての人間となる。

もはや神は、どこにも必要としないからである。そして、認識しうる人間を生み出し得ない宇宙は、永遠に認識されることなく、運動と進化を続けてゆくのみである。これが人間原理の主張である。

以上の宇宙観は、私達の自然観・認識論にいくつか重要な論点を提示しているように見える。一つは、客観的自然の認識とはいかなることか、という原初的な問題である。虚数時間（あるいは隠れた次元）のような直接感知し得ない物理量を導入することによって記述された自然は、本来的に認識されたことになるのであろうか。（以下に述べるように私はイエスと答える。）もう一つは、認識主体としての人間と客観的自然の間の関係である人間原理は、無限個の客観的自然としての宇宙の存在は承認する点においては観念論ではない。しかし一方、この宇宙の所与の条件（物理定数や次元）の説明を、人間を持ち込むことによって回避する。あるいは、物理定数はどんな値でもとりうるのであって、それを選ぶ論理は（人間の存在以外には）ないとする。その意味では不可知論であり、考えることを放棄する。ではしかし、人間と客観的自然の関係をどのように考えるべきなのだろうか、そして、現在の自然のとなえ方に問題はないのか、これが第二の主題である。

客観的自然の認識

私達は、自然を観察し、あるいは働きかけることにより、そこに何があり、いかなる運動をし、どのような性質を持つかを知る。この時の人間の働きかけは、限られた性能の限られた手段による限られた条件下のものだから、得られる知見はあくまで部分である。部分で得られた知見を下に、より広大で多重に広がる自然をより統一的に認識するためには理論の力を必要とする。経験事実を土台にした仮説なり原理を足場にして、まだ見ぬ部分をも含めた全体の斉一的な構造なり運動を導出しつつ、部分の多様性へせまろうとする。実験によって得られた事実、あくまで限られた条件下での一つの現象形態にすぎないのである。

対象が素粒子であれ原子核であれ宇宙であれ、ある物質階層を認識するとは、それら全体の斉一な構造を無矛盾に記述することであると言える。（無矛盾とは、むしろ実験事実のみならず、理論の論理構造として矛盾を含まないことは言うまでもない。）

しかしながら、部分の経験を土台にして構成される理論には当然ながら限界がある。その理論は、真に全体をとらえて

いるか（なおかつ部分しか記述していないか）の問いには答えきれないからである。象の尻尾と鼻と足のみでは、象の全体象を認識したことになるのではないのは当然としても、その三器官を組み合わせるだけでは全体像には程遠い。しかしそれは先見적으로는わからない。この点は理論が予見する新たな質の実験によって試されるべきことで、これは限界と言うべきではないのかもしれない。

もう一つの限界は、自然のまだ見ぬ部分への仮説が含まれることであり、そこに虚数時間・隠れた空間次元・マイナスの質量等の日常経験に本来的に入り得ない概念が使われることである。それらを使うことにより、旧来の矛盾なり難点が解消され、斉一的な全体構造が描き出せたとした場合、私達は客観的自然を真に認識したことになるのであろうか。旧来の矛盾と難点を、新たな概念に置き換えただけと言えそうである。しかしながら、私はそのような「非常識」と思える新しい概念こそが、自然の多重性を認識する上での重要なステップではないかと考えている。

真空に高電圧をかけると、電子とその反物質である陽電子が対で生成される。この現象は、高電圧による電位エネルギーに伴う光子からの、電子・陽電子の対生成と運動学的には

簡単に理解できる。しかし、素粒子のより本質的な記述である場の概念を使うと、次のようにも解釈ができる。真空とは、全くの「無」の状態ではなく、マイナスのエネルギーの電子がぎつしりとつまった状態である。私達が認識しうる物質は、すべてプラスエネルギーを持っているもののみだから、マイナスエネルギーの電子は認識の外にある。ここに高電圧がかかると、マイナスエネルギーの電子はエネルギーを得てプラスエネルギーに転化する。同時に、マイナスエネルギーの電子の海に空孔ができる。この空孔は、一個のマイナスエネルギーの電子が入れば消えさるものだから、それと全く反対の物理状態にある。つまり、プラスエネルギーの陽電子である。

このディラックの解釈は、そのままでは本来的には認識できない状態（エネルギーがマイナス）だが、物質としては存在していることを主張する。（高電圧をかけることによって認識可能な状態になったのである。）ならば、たとえ高電圧をかけなくとも、マイナスのエネルギーの電子がつまっている状態として真空を記述しておくことが必要となるだろう。実際、場の理論にはこの観点が不可欠である。

この例から、そのままでは認識できぬ状態だが、客観的自然として物質は豊かに存在していることを示唆しているよう

に思える。従って、いわゆる常識をはずれた概念ではあつても、客観的自然の感知し得ぬ多様な状態を引き摺り出す手段として大胆に採用すべきなのではないだろうか。

同様の方法は、この空間の次元に対しても試みられている。私達は、三次元の空間と一次元の時間という四次元の時空に生きている。素粒子の従う三つの相互作用（強い力・弱い力・電磁力）を統一する一つの試みとして、空間は非常に高エネルギーの状態では十次元であるとするモデルがある。非常に高エネルギー状態では、¹⁰⁻³⁰センチという超微視的空間の性質が素粒子反応に反映する。私達の知っている三次元以外に、七次元分の空間パイパスが控えていると考えてよい。この空間においては、素粒子の三つの相互作用は、単一の定数を持つ単一の相互作用へ帰着する。エネルギーの低下と共に、あるいは宇宙の膨張と共に、七次元の空間はコンパクト化して反応に関与できなくなる。それは同時に、三つの相互作用の区別がつく過程でもある。開いていた次元を通じて可能であった反応のルートが閉ざされることにより、相互作用間の差違が生じてくるからである。この場合、七つの余分の次元は、通常の（地上で実験しうる最高の）エネルギーの範囲では、何らの影響も与えないから経験による認識の外にある。しかし、

素粒子の首尾一貫した全体構造の記述には、この隠れた次元をも含めて記述されねばならない。それによってこそ、個々の素粒子の特殊性を導き出すことが可能になる。

ホーキングの宇宙創成のシナリオは、実はこれ程手のこんだものではない。まず物理的真空についての仮説をおく。真空とは、何もない状態のことだが、先に述べたように、マイナスエネルギーの粒子がぎゅっつまっている状態とも解される。単に認識しうる物質が存在しない状態では不十分なのである。そこで、真空は何についての無の状態であるかを決めてやる必要がある。最も簡単な方法は、ある種の物質場を想定し、その場の量がゼロである状態が、最低のエネルギー状態となつている場合を真空とする。真空を測るメジャーとして物質場を持ち込むのである。物質場の量がゼロの状態は最低のエネルギー状態であるから、安定である。

宇宙のような時空が時間と共に変化する場合を考えよう。（温度のように物質場に影響を与える物理量が変化する場合でもよい。）何らかのゆらぎ（不確定性原理による量子論的ゆらぎは常に存在する）によって、ゼロでない場の量が生じると自己相互作用が、それを強めたり弱めたりする。（ゆらぎによって、電子、陽電子の対生成が起こり、それらの間の相互作用を考慮するの

と似ている。)場の量がゼロの状態がエネルギーの最低状態である限り、ゆらぎによって生じた場の量はゼロに戻る。これが安定という意味である。ところが、宇宙の膨張と共に、場の量がゼロでない状態の方が最低エネルギーとなりうる場合が考えられる。(温度が摂氏ゼロ度以上では、水という液体が最低のエネルギー状態であったのが、ゼロ度以下では氷という固体が最低エネルギー状態に変わるのに似ている。氷の量だけで見れば、ゼロ度以上では存在しなかったのが、ゼロ度以下では有限量存在するようになる。)自然は最低エネルギー状態に移ってその安定性を確保する。場の量がゼロでない状態へ遷移してゆくことを、水と氷の例に因んで、真空の相転移という。

宇宙の始まりは、場の量がゼロの状態の真空であった。この時、宇宙の半径もゼロ、エネルギーもゼロである。従って、完全な「無」であった。と言っても、不確定性原理による量子ゆらぎは存在している。しかし、ゆらぎのみでは、この宇宙へ引継がれることはない。ここで虚数の時間が導入される。ゆらぎは、実時間では減衰するのみだが、虚数時間では生き延びることができる。量子論的に言えば、トンネル効果である。(波動論で言えば、山の向こうの音が聞こえる現象。)つまり、実時間では(あるいは、古典論では、また粒子論では)許容され

ない状態が、虚数時間では(量子論では、また波動論では)許容されることになる。生き延びた場のゆらぎは、自己相互作用によって有限値の場合に場のエネルギーが最低となる。つまり真空の相転移が起こり、一気に宇宙は膨張を開始して、現在のビッグバンへ引継がれるのである。(宇宙は、¹⁰⁻³³秒の時刻に¹⁰⁻³³センチという大ききで、突如出現する。それ以前は、虚数時間の宇宙であった。)

以上のように、宇宙創成の虚数時間は、宇宙の量子論的記述の便法とも言える。その意味では、トンネル効果とか、量子ゆらぎなどの量子力学的实在の認識論と同じである。そのように問題を押しつめて、宇宙創成を神の役割から量子論的世界へ帰着させたのがホーキングの(本来のアイデアは、ビレンキンによって一九八二年に出されていた)アイデアと言える。果たして宇宙という実体にこのような方法が適用できるかどうか、重力の扱いが量子論的でない、という問題点は残るが、客観的自然の無矛盾な記述のために新しい次元や観測不可能な物理量を導入する方法は、自然の多様な存在形態の反映なのではないだろうか。

むろん、この方法は容易に観念論に転化する。「かくある筈」や「かくあれかし」の自然像を作るために、新しい概念

人間と客観的自然の關係

を恣意的に導入し、それに対応する実体や物理量が隠れていると主張することが可能になるからである。ある意味で、先端的なアイデアは観念論に見える。少なくとも提案された時点では、認識の外にあることが多く、理論のための（自らの自然像に合わせるための）操作としか思えないからである。しかし一方、自然がいかなる形態で隠れ潜んでいるかわからないから、何をもって観念論と断じるかの基準はない。

私自身は、客観的自然の多様な存在様式を前提に、唯物論と観念論の狭間を進まねばならないと考えている。観測できないからと言ってその物質の存在形態は観念の所産のみではない。その形態を通過して後に、観測可能量が出現するならば、その観測によって観測不可能な部分をも認識し得たと言うべきではないだろうか。むしろ、観測にかからない領域での自然の運動や存在様式への想像力こそ、自然認識の本質的部分である。むしろ、最終的には、観測によって理論全体の斉一構造が実証されねばならない。その実証は、必ずしも直接的なものではないかもしれないが、緊密に組立てられた理論構造にとつてはそれで十分なのである。

この宇宙の、この地球において、生命の誕生から人間への進化は、四十億年以上もの長い時間を必要としたにせよ、必然であつたように見える。地球のような惑星の存在は、ありふれた天文学的事象だし、水と太陽の光を用いた、有機物・アミノ酸・たんばく質そして生命への進化は、まだ未解明であるが、必然的な化学進化として追実験できそうな状況にある。宇宙の進化過程での太陽及び地球の誕生、地球環境の間をかけた変遷、生命の発生による地球環境の整備（二酸化炭素の減少、酸素の増加）という一連の過程は、この宇宙を認識する人間の誕生を宇宙自身が内蔵しているかのようである。

一方、この宇宙自身が、物理定数について極めて「不安定」な存在であることが明らかにされてきた。⁽⁴⁾ここでいう「不安定」とは、物理定数がほんの少しだけ異なっているだけで、この宇宙の姿は根本的に異なってしまうという意味である。むしろこの宇宙の物理「定数」を変化させることはできないから、ほんの少し物理定数が異なつた宇宙が存在したとすれば、その宇宙の姿はこの宇宙とは全く異なつた姿をしており、

人間を誕生させることができないことを意味する。逆に言えば、この宇宙における人間の存在は、物理定数の微妙な配合の上で実現しており、それは偶然とは思えない程のみごとさなのである。

例えば、電子の質量が観測されている値の二・五倍以上なら、原子の寿命は二週間程度となり、原子による物質構造は存在しなくなる。また、電磁相互作用を特徴づける微細構造定数は、観測値の一・六倍以下でないと原子核の安定性が保証されないし、〇・八倍以上でないと原子構造が不安定となってしまう。同様の条件は、陽子と中性子の質量差、強い力・弱い力・重力の結合定数などについても求められる。

自然界の物質構造は、強い力が主要な役割を果たす原子核の階層、電磁力による原子の階層、重力による天体の階層という、三つの異なった階層から成り立っている。⁽⁵⁾ 原子核が安定であり、そこに陽子と中性子がほぼ同数含まれていることが、原子の階層を形成する前提条件である。そのような原子核が存在したとしても、原子の寿命が短ければ、分子・高分子そして人間を存在させることができない。また、星の寿命が一億年以下であれば、有機物から生命の誕生に到る時間としては短すぎるだろう。このような条件は、意外に物理定数

がとりうる範囲を厳しく制限しているのである。

その厳しさは、次の点を考えるとさらに単純ではないことがわかる。電子の質量を考えてみよう。電子は、ニュートリノを除いて最も質量の小さい素粒子である。電子の次に軽い素粒子はミュー粒子だが、その質量は電子の二百倍以上である。原子核を構成している核子（陽子・中性子）の質量は、電子の二千倍近くにもなる。逆に、電子（とニュートリノ）を除くと、素粒子の質量はすべて核子の10分の1から10倍の範囲にある。何故、電子のみがこんなに軽いのであろうか。ところが、電子の質量が、二・五倍大きいだけで原子の寿命は短くなり原子の階層構造を作り得ない。電子の質量が、他の素粒子に比べて異常に小さいことが、原子の安定性を保証しているのである。このことは、核子である中性子と陽子の質量差についても言える。この質量差は、他の同種素粒子間の質量差に比べて異常に小さい。これが小さいことが、原子核中で中性子が安定であることを保証している。安定でなく中性子が陽子に変わってしまうと、原子核の安定性は保証されない。二個の陽子や四個の陽子からのみ成る原子核は安定でない。その上、中性子と陽子の質量差が、観測値の〇・四倍より大きく、一・六倍より小さい範囲内にあらねばならない

のである。

このように、平均と大きくずれた物理定数（電子の質量や、中性子と陽子の質量差）である上に、その値の許される幅は小さい。これらの条件が満たされないと、三つの階層構造の一つ又は全部が存在しなくなってしまうのである。

この事情は、有機物から生命の誕生に到るまでの化学進化の過程でも言えることである。微妙な電子配置の下で複雑な分子・高分子が形成されていくが、電子の質量や電荷の大きさが少し異なるだけで、生命に必要な化学物質が形成されないのである。（むろんこの場合、無限に近い原子の組み合わせのなかで、より適当な化学物質を合成してゆく可能性もあり、必ずしも地球上の生命体の条件のみを課すのは正しくないのかもしれない。）

さて、以上を振り返ってみると、この宇宙を構成する物理的・化学的条件は、非常に確率の小さい稀有の状況にあることがわかる。他方、その条件下では容易に人間の誕生へつながっているように見える。とすると、この宇宙は、人間を誕生させるに好都合なように生まれたと考えるとよいだろう。そしてそのような宇宙だからこそ、人間によって認識されているのも確かである。

この観点をより強調すれば、人間原理となる。以上の記述

は「弱い」人間原理であり、結果として人間が生まれる宇宙であつたと説明する。「強い」人間原理は、物理定数が何故観測されているような値をとっているかをも、人間を基準にして「説明」しようとする。神から与えられたものではなく、また何らかの物理原理の下で導出されるものでもなく、物理定数は人間を造りうる値の時のみ「認識」されるというわけである。

むろんこれは、物理学者の一種の遊びだから、「人間」が無限定に使われている。猿や類人猿では認識主体にはなり得ないし、果たして人間という「種」があと何年持つか予測もできない。人間が絶滅した時、突如この宇宙は認識不可能な対象となる。むろん人間のような認識主体は、この宇宙には何億とあるから、その知的レベルにに応じて宇宙は認識されていることになるのだが、対話と相互研鑽のない自然認識はそれが正鵠を得ているかどうかの保証はない。（現在の私達の宇宙への認識そのものが真に正しいかについての疑問は残る。）

人間原理の背景には、この宇宙の在り様を性急に説明しつくしたいという焦りがあるようで、それは神の名によって調和ある宇宙という鋳型にはめこもうとした態度とよく似ている。自然を、現在知っている概念なり実体に合わせる必要は

ないし、人間は宇宙の存在を判定できる程「知」が豊かでもない。

従って、残りうるのは、抽象的認識主体として「人間」を定義し、その「人間」が生まれ得ない存在は認識されず、従って存在そのものを云々しても意味がない、という論である。一方で多種多様な無限個の宇宙を論じつつ、他方で認識可能かどうかでそれを考慮の外に置く、という思考となりつつある。むろん、この宇宙以外の宇宙は、「人間」の有無如何に関わらず、認識できないのだから、これ以上踏み込んでも無駄なのかもしれない。

自然をとらえる新しい観点

これまでの科学の進め方では、自然は直線的に進化してきたととらえ勝ちだが、自然は個々の現象での様々のゆらぎのなかで、構造の発現の道を発見してきたのではないかという観点を紹介しておこう。例えば、人間のDNA上の情報のうち、実際に使われている部分はその一〇%程度である。後の九〇%は、生命史のなかで一度は発現し、あるいは発現しないままロックされてしまった情報である。それは、厳しく変

化する自然環境のなかで、多様にゆらぎつつ構造化する方途を探し求めてきた数十億年の歴史を暗示しているように思える。

このような観点は、生命だけに限ったことではない。原子核や原子という構造、それより成る星や銀河の階層においても同様に考えられる。私達は与えられた材料と条件の下で、エネルギーなりエントロピーという指標を用いて安定構造を計算し、それが自然において実現しているかどうかを検証する。ある場合は、「くりこみ」という便法で無限を消去し、ある場合は、「打ち切り」という近似で矛盾に目を瞑っている。自然はジグザグに構造発現の道を探ってきたのに、人間は自らが手に入れた手法で直線的に道を開けようとしているという感が深い。

例えば、星の質量という超マクロな量は、重力定数や微細構造定数・電子質量などの物理定数を用いて表現することができる。これは、従来の手法が成功している例である。しかし、宇宙の主要構成物である銀河の質量については、この方法は成功していない。銀河は、この宇宙の密度・温度・膨張速度などのこの宇宙の持つ特性に依存しつつ、物質の状態と様々なレベルの相互作用が競合して形成されたものであり、

刻々と変化する環境下で発現した構造と見ることができると。

より詳しく見れば、宇宙の創成時にセットされたゆらぎの初期条件、宇宙の膨張過程でのその変遷、環境と自己相互作用下での構造の発現、環境と切り離された後の非線型成長など、数段階の物理的に異なった過程を経て現在の姿に到達した。これは生命の発生・進化過程に似ており、各段階でゆらぎつつ、小さな可能性の裂け目を縫って構造を発現させてきたと見ることができると。一見非常に小さな確率で稀有な事象に見えることが、必然の道を辿っているのである。

このような観点は、物質の階層性を基礎にした要素還元主義では解決できぬ自然現象にとって重要である。数段階の異なった過程とは、各々に特有の質を持った物理過程であり、単一原理で切り取られるものではない。

ある局面では、物質の相転移が起こっている。物質の存在様式が、無秩序から秩序へ、あるいは秩序から新たな秩序への突然の飛躍である。相転移においては、秩序を特徴づけるパラメーターの変化に伴って、全系が共動（コヒーレント）状態へ移行する。この時、系の温度とか磁場の強さのような、系全体を特徴づける外部変数が秩序パラメーターの場合、比較的その理解は容易である。秩序パラメーターを単一原理に

擬せられるからである。しかし、秩序パラメーターがある分布を持っている場合、あるいは秩序パラメーターが内部の自己相互作用に起因する場合、同様の手法が有効とは限らない。

また、本質的に非線型性が原因となるカオスのような現象では、結果から出発点に戻ることはできない。例えば、小惑星の運動は、ニュートン力学に従う決定論とわかっており、現在の運動から逆行してゆけば必ずそれが生まれた時点に戻る筈だが、それは不可能である。逆行運動を与えるべき初期条件のほんの少しの誤差が、全く異なった出発点へ導くためである。これは単に私達の計算能力が欠けているためではない。私達の自然の認識方法が、このような非線型問題に適していないからである。

私達は、閉じた、外部よりコントロールできる系を、単純さと審美性の原理で自然と見なしてきた嫌いがある。その上に立つ哲学は、ある一面の真理を切り捨ててきたのかもしれない。開放系の、自ら組織化する系については、まだ記述の段階でしかない。それは外部からのコントロール（つまり、私達の実験）から相対的に独立して、自己組織化する過程である。この過程は、従来の認識の枠をはずれているが、漸く私達はこの過程が自然のより多様な存在様式と運動を生み出

していることに気づき始めている。

果たして、このような観点がいかなる新しい自然認識に導くかはまだ不明である。ゆらぎの理論、非線型相互作用、開放系の熱力学など、その解析の方法をまだ十分に発見していないからである。しかし、物質の階層構造と相反する、同似的フラクタル構造、ゆらぎやカオスの運動の規則性など、従来の認識から洩れ落ちてきた多くの事象を取り上げることになる。日常の現象に、これらの概念があてはまることが特に多いことを考えると、極微の素粒子・極大の宇宙・超高速や超重力下の相対性理論の世界へ進むことを自然認識の最先端としてきたことへの反省をせまることになるかもしれない。

(1) R・C・ディヴィス「宇宙はなぜあるのか」(戸田盛和訳、岩波書店、一九八五年)

松田卓也「人間原理の宇宙論」(培風館、一九九〇年)

(2) 佐藤勝彦「宇宙は、われわれの宇宙だけではなかった」

(同文書店、一九九一年)

(3) S・ホーキング「ホーキング、宇宙を語る」(林一訳、早川書房、一九八九年)

(4) I・L・ローゼンタール「ビッグバン・ビッグバウンス」

(池内了訳、シュプリンガー・フェアラーク東京、一九九

一年)

(5) 池内了「宇宙進化の構図」(大月書店、一九八九年)

(いけうち さとる 国立天文台・宇宙論)

ト ポ ス

「開戦50年を考える 市民の集い」について

吉 田 裕

日本海軍によるパールハーバーへの奇襲攻撃Ⅱ太平洋戦争の開戦から五〇年たった本年、太平洋戦争の歴史的位置づけが、日米両国の中で再び大きな関心をよんでいる。アメリカでは、一二月八日の当日、ホノルルで旧軍人などを中心とした大規模な記念式典やシンポジウムが計画されているようだし、日本のテレビや新聞などでも、太平洋戦争関係の企画がめだつ。

しかし、そこにある種のバイアスを感じるのは、私だけではないだろう。アメリカ側からいえば、パールハーバーへの奇襲は、アンフェアな日本の代名詞であるだけに、「五〇周年」は「ジャパン・バッシング」の恰好の題材にもなりうるし、太平洋戦争の開戦Ⅱ第二次世界大戦への参入も、グローバル・パワーへの成長の大きな転機として回顧される傾向がある。他方、日本側にしても、昨今の日米経済摩擦や対米ナショナリズムの抬頭を背景にして、アメリカに対する感情的反発が、これを機に噴出しかねない状況にある。

こうして、双方の視野が狭い意味での日米関係だけに限定されてしまう時、そこから完全に抜け落ちてしまうのは、アジアの問題である。最近、歴史家の間では、

「太平洋戦争」という日米関係だけに眼をうばわれた呼称をやめて、「アジア・太平洋戦争」という呼称を採用すべきだとする主張が、しだいに市民権を得つつある。

「太平洋戦争」は、満州事変に始まる日本の中国侵略の延長線上に発生した戦争であつたし、何よりもその戦争の最大の被害者はアジアの民衆であつた。また、「太平洋戦争」の時期にあつても、中国の抗戦に象徴されるアジアの民族的抵抗は、日本の戦争遂行能力に大きな打撃を与え続けていた。そうした点を考えるならば、戦争の実態を最も正確に反映した呼称は、やはり、「アジア・太平洋戦争」だといえるだろう。

しかし、残念なことに、そうした歴史認識が、日本国民の間に、しっかりと定着している訳ではない。むしろ、そのような歴史認識が希薄であるからこそ、日米関係という枠組を通じてしか、太平洋戦争をふり返えることができないという事態が生じるのだろう。こうした状況に一石を投じるために、私たちが在京の歴史家や、わだつみ会・アジア民衆法廷準備会・戦後補償国際フォーラム・不戦兵士の会などの市民団体の活動家を中心となつて、アジア・太平洋戦争の意味を問い直す市民集会を開催す

ることにした。その要綱は次の通りだが、この問題に関心を持つ多くの方々の参加を期待したい。

記

日時 一二月七日（土）午後一時半～四時

場所 日本教育会館（地下鉄東西線竹橋駅下車・徒歩

五分）

集会名 開戦五〇年を考える市民の集い

この集会で私たちは、日本の戦争責任を深く反省するとともに、日本政府に対して次の点を強く要求してゆきたいと考えている。

一、アジアの戦争被害者や虐待をうけた連合国捕虜を調査し、確定した被害に対しては正当な補償を行なうこと。

二、戦争体験の継承のために、戦争関係の全ての資料を全面的に公開するとともに、国立の平和記念館を建設して、戦争の実態を広く国民に知らせること。

また、歴史教育を通じて侵略戦争の実態を若い世代に伝えてゆくこと。

(一〇月末日脱稿)
ゆたか
一橋大学・日本史
(よしだ)

唯物論研究協会 編

白石新書

もう一つの思想家像

龍馬の論理——主体的実務家像……重本直利

大杉栄私記……清 眞人

山本宣治の生涯と学問論、知識人論……佐々木敏二

「腰を沈める」思想家 中井正一……吉田千秋

花田清輝と近代の超克……石井伸男



定価824円

白石書店

千代田区神田神保町一三六
☎〇三(三二九一)七六〇一

ト ポ ス

他者の発見 = 征服と「文明」の野蛮

——コロンブス、アメリカ到達500年——

伊 藤 宏 一

デイドロ——一七八〇年

一七八〇年、カントの『純粹理性批判』の出版される前年、七〇歳に近づいていたデイドロは、タヒチ島の老人の口を借りて、「文明人」であるフランス探検隊長ブーガンヴィルをこう告発した。「お前のいうことならなんでもきく強盗どもを引き連れた親分よ。われわれの島の岸辺から、さっさとお前の船を遠ざけてくれ。：われわれは幸福に暮らしている。それなのに、お前がしでかすことといったら、われわれの幸福を台無しにすることだけではないか。：お前がわれわれを奴隷にしようとするとは。：いったい、お前は、タヒチ人を支配するどんな権利をもっているのだ。：おれははっきり言うが、お前は人間が生きていく状況を野獣の状況よりもっと悪くしてしまったんだ。」（『ブーガンヴィル航海記補遺』ヨーロッパ人によるヨーロッパの自己告発、つまり自己批判：。それはカントによる内向きの理性の自己批判とベクトルを逆にして、非ヨーロッパ世界に対するヨーロッパの態度つまり「野蛮」対「文明」というスタンスに対する数少ない外向きの自己批判として近代思想史の中に光

彩を放っている。デイドロがこう書く時、その胸中にはジェノバ人クリストーバル・コロン（コロンブス）による「新大陸発見」『征服への批判と、その当時勇氣を持つてこの批判を遂行したドミニコ会修道士ラス・カサスへの限り無い共感がよぎっていた。

「おお、ラス・カサスよ。あなたの身をもって示したユマニテの精神は高くそびえ立ち、あなたの同国人が力をつくしてなしたあの征服という共同事業をもってしても、それには及びもつくまい。征服者たちに侵犯された不幸な民が、再びそこに安住の地を見出し、その地に法や規範、正義や自由を打ち立てる日が、もしこれから後に到来するようなことがあれば、彼ら住民が、その地に築き上げる第一の立像はあなたのものであるにちがいない。」デイドロはレナルの『東西両インドにおけるヨーロッパ人の植民事業と通商に関する哲学的・政治的歴史』第三版（一七八一年）に執筆協力し、こう書いた。（以上については石原保徳『インディアスの発見』田畑書店一九八〇年および中川久定『デイドロ』講談社「人類の知的遺産41」一九八五年による）

コロン——一四九二年

一四九二年一〇月一二日バハマ諸島のウォトリング島（グアナハニ島）に到着したコロンは、カトリック両王の名をもって島を領有する儀式を行った。五〇〇年前のこの日、この島ばかりでなくインディアスのすべての土地とその先住民はカステイリヤ王の支配下に置かれたのであった。コロンは島の人々と友好的な物々交換をしつつも、日誌にこう書いた。「彼らは利巧なよい使用人となるに違いありません。」（『コロンブス航海誌』ラス・カサス要約岩波文庫一九七七年）一〇月一四日彼は先住民七名を捕らえ、彼らの自由を奪った。インディアスの征服と虐殺はここから始まった。スペインとポルトガルによる新大陸征服——ブラジルやキューバ島の征服やコルテスによるアステカ文明破壊、ピサロによるインカ文明破壊、そして四〇年間で数千万人と言われるカリブ海諸島や中米各地における先住民虐殺がここから始まるのである。「アメリカにおける金銀産地の発見、土着民の奴隷化、彼らの皆殺し、東インドの征服と略奪との開始……これらは、資本主義時代の燭光を告げる本源的蓄積の牧歌

的手段である」と、マルクスは『資本論』で書いているが、それは「牧歌的」というより「野蛮」というにふさわしいジェノサイドであった。（ラス・カサス『インディアス破壊を弾劾する簡略なる陳述』石原保徳訳現代企画室一九八七年及び同書『インディアスの破壊についての簡潔な報告』染田秀藤訳岩波文庫一九七六年）

ラス・カサス——一五五〇年

一五五〇年夏、ラス・カサスはヨーロッパによるインディアス支配を肯定する論敵セブルベダと対決するためバリャドリッドで大論戦を行った。セブルベダはポロニャのサン・クレメンテ学院に留学し、ピエトロ・ボンボナツィに師事してアリストテレスを研究し、この論戦に先立つ一五四八年バリでアリストテレスの『政治学』ラテン語訳を出版した学者だった。そしてこのルネッサンス期にアリストテレスはヨーロッパにおける思想の第一の主流であった。セブルベダはアリストテレスの自然的奴隷説に基づいてアメリカに住むインディオは自然的奴隷 *servi a natura* であって生来粗野であり劣等である、従って文明をもつ優等なスペイン人が野蛮で

劣等なインディオを支配するのは正当である、と主張した。これに対してラス・カサスは真正面から立ち向かい、インディオが非常にすぐれた人間であることを主張した。（L・ハンケ『アリストテレスとアメリカ・インディアン』岩波新書一九七四年）

一四八四年セビーリヤ生まれのラス・カサスは、一四九三年コロンが第一回航海を終えて、拘束した七名のインディオとともにセビーリヤに到着したのを目撃している。彼の父や叔父はコロンのその後の航海に参加していた。こういう環境の中でラス・カサス自身も一五〇二年、コロンにかわって総督に任命されたオバンドの船団に加わってエスパニョーラ島へ向かった。翌年この島の西部ハラグワ地方の征服遠征に参加したラス・カサスは、総督から分配されたインディオのひとりをも自分の奴隷として使った。彼はここから始まるエンコメンデーロ（征服者）兼聖職者としての自己を、生涯二回の回心を通じて克服していく。それは同時に自分の属するヨーロッパのインディアス征服全体への批判の仕事でもあった。第一回の回心は一五一四年で、キューバ島のスペイン人居留地サンクティ・スピリトゥスで説教を行うに際してのことであった。「この説教を準備するにあたって、聖書

のいくつかの基本原則をよく考えてみた。私はシラク書「集会の書」：の一節につきあつた。その貧者は、わずかなパン以外に何も持っていない。それを奪おうとする者は人殺しだ。人を働かせて報酬を与えない者は血を求める獵犬だ……と。私はこの土着の民がなめている困窮と奴隷状態に思いを致した……。私は考えれば考えるほど確信が深まった。我々がこれまでインディオの上にもたらししたすべては、暴虐と不正以外の何ものでもない……」この発見Ⅱ自己批判は、その後の彼の生涯の導きの糸となった。それは「野蛮」に対する「文明」の正当な征服という思想から、「文明」の野蛮の認識と自己批判という思想への転換を意味していた。彼はさらに一五二二年に第二回目の、更に根本的な回心を行い、サント・ドミングで、ドミニコ会修道士となった。（染田秀藤『ラス・カサス―新世界征服の審問者―』岩波書店一九九〇年）彼はここでトマス・アケイナスの『神学大全』の研究に従事する。そしてカジェタス枢機卿による『神学大全』の注釈における異教徒の区別につきあたる。それは事実上も法律上もキリスト教君主の支配下にいるもの、法律上その支配下にいるもの、事実上も法律上もその支配下に入らないものの三種に異教徒を区別し、第三の異教徒に対す

るキリスト教の支配は不正であると論じ、これにはインディオが含まれるとしていた。彼はこの考えに触発されて『すべての人々を真の教えに導く唯一の方法について』を執筆し、インディオのような異教徒に対する戦争を自然法・神法・人定法に反する「恐れを知らない、不正で暴虐的な戦い」と非難した。その後ラス・カサスは多くの著書を刊行するが、その中でも著名なものは、先のバリャドリッド論戦後に刊行された『インディアス破壊を弾劾する簡略なる陳述』（一五五二年）ならびに膨大な『インディアス史』（一五五二年から六三年にかけて編纂）である。これらの文献はヨーロッパ近代文明とは何であったかを問う上で欠かすことのできない記念碑的著書であるといえよう。（後者については岩波書店の大航海時代叢書第Ⅱ期の一部として長南実氏の翻訳、増田義郎氏の注により一九八一年以来五巻で刊行中である。）

デューラー——一五二〇年など

ラス・カサスと同じスピリットを持つヨーロッパ人は、数は少ないが幾人か見つけることはできる。一五二〇年アルブレヒト・デューラーはブリュッセルでインディオ

の様々な作品を見てこう述べた。「私はこれまでの生涯に、かくも私の心を歓喜せしめた物を見たためしがない。なぜなら、それらのうちに驚くべき芸術作品が見られたからで、私はこれら彼方の土地に住む人々の霊妙な才能に感激したのである。」（前掲ハンケ著）またモンテーニユの『エッセー』における「人食い人種について」も同様に偏見のないスピリットが漂っている。時代は下って、一九六七年。ドイツの作家エンツェンスベルガーは、ハナ・アーレントの全体主義批判なども援用しながら、またアメリカ帝国主義のベトナム侵略を批判することを視野に納めながら、『ラス・カサス あるいは未来への回顧』を情熱をこめて執筆した。（前掲の石原訳ラス・カサス著に田中克彦訳で掲載）この論文に比べると、確かに一九八二年のトドロフ著『他者の記号学——アメリカ大陸の征服』（及川・大谷・菊池訳 法政大学出版社 一九八六年）は、スピリットの点でトーン・ダウンしている。

日本——一九九〇年代

…さて、コロンが第一回航海に乗り出したとき、彼はマルコポーロの『東方見聞録』で読んだジバング島をめ

ざしていた。黄金の島ジバング…。一九九〇年代の今、経済大国化したその島日本をめざしてアジア各地から多くの他者がやってきている。日本人は船を漕ぎ出さなくても、目の前の地域で多数の外国人と接触することができる。しかしこれらの他者・異邦人をつめる日本人の眼差しはどうか。偏見なく澄んでいるか…。明治維新と敗戦・占領という二つの開国は、いずれも主に欧米への劣等意識が支配的であった。しかし現在の開国は、明らかに外に向かっては帝国主義的な優越意識が支配的である。一九六〇年代、エンツェンスベルガーはラス・カサスに思いを馳せつつ、アメリカ帝国主義のベトナム侵略を批判した。一九九〇年代の今日、私達はラス・カサスに思いを馳せつつ、明治維新以降のアジア侵略の歴史への自己批判を深めながら、国内でも国外でも他者・他民族との連帯を進め、異文化への澄んだ眼差しを研ぎ澄まされねばならないのではないか。そして近代「文明」の野蠻への眼差しを深めねばならないのではないか。

（いとう こういち 法政大学・哲学／日本文化思想）

人間認識起源論序論

精神を明晰で正確で広闊なものにするのに最も役立つ学問、それゆえに他のあらゆる学問研究の前に準備されねばならない学問、それは形而上学である。しかし今日のフランスにおいて形而上学はあまりにもないがしろにされているので、このことはおそらく多くの読者にとつて逆説のように思われることであろう。実を言うと、この私自身がかつて一時期はこういう意見を持っていたのである。その頃の私には、あらゆる哲学者のなかで形而上学者が最も愚かしく、また彼らの仕事中最も教えるところの少ないものに見えた。そうした著作のほとんどい

エチエンヌ・ボノ・ド・コンディヤック
訳／解題 古 茂 田 宏

たるところに私は幻影以外のものを見いださなかった。形而上学を求める人々がこのように道に迷ってしまうのはその学問自体のせいだと私は見なしていたのである。私はこの幻影を払い退け、かくも多くの誤りを引き起こした原因にまで遡ってみたいと考えた。ところが、真理から最も遠ざかってしまったこれらの人々を研究していくと、その彼らが私にとつては最も有益なことを教えてくれたのである。彼らが歩んだ様々の小道が全く不確実なものであることを知るやいなや、私は自分が進むべき大道を発見したと信じた。そのとき私が思ったのは次のようなことである。すなわち形而上学と倫理

学においても、幾何学の場合と同じ正確さで推論し、幾何学者と同じように適切な観念を作り、様々の用語の意味を精密かつ確固とした方法で規定することができるということ、さらには、幾何学者でも及ばないほどの明証さに到る単純・容易な道筋を示すことができるということ、これである。

二種類の形而上学を区別しなければならない。一つは、高望みをする形而上学であって、それはあらゆる神秘を見透かそうと望む。存在するものの本性と本質、最も深く隠された原因、こういうものがこの種の形而上学の野心をかきたて、またこういう謎こそをそれは解明しようと考えてのである。もう一つは、より慎重深い形而上学であって、それは自らの探究を人間の知性の身の丈に合わせようとする。この種の形而上学は、知りうることにらについては知りたいと渴望するが、人間の知性でとらえられるはずのないことがらについては、なおかつそれを知りたいと苛々することがない。つまりそれは、人間の知性の限界内に踏み止どまる術を知っているのである。前者の形而上学は自然全体を一種の魔法のようなものにしてしまうのであって、魔法が解けるとそれ自体も雨散

霧消してしまう。これに対して後者のそれは、事物をそれらが実際そうであるような形でしか見ようとはしないので、真理自体と同じくらいに単純なのである。前者においては様々の誤謬が際限もなく増えていき、曖昧な概念と全く無意味な言葉で精神は自足してしまうようになる。これに対し、後者において人はほんの少しの知識しか得ることがないが、誤りを避ける。精神は正確なものになっていき、常に明晰な観念を生み出すのである。

これまで哲学者たちはもっぱら前者に没頭し、後者については、形而上学の名に値いしない付属的な部分としてしか見なかった。ところが、ロックだけはこうした見方から免れていたように思われる。彼は人間精神の研究に自分の仕事を限定し、そこにおいて十分な成功をおさめたのである。デカルトは、我々のもつ諸観念の起源や生成を知らなかった。〔デカルトの第三省察参照。彼がこの主題について語っていることほど哲学的でないものは他にないように私には思われる。〕彼の方法的限界は、この点にあったのである。なぜならば、我々の思考がどのようにして形成されるかということを知らない限り、我々の思考を導く確実な方法は発見できないであろうからだ。マールブランシュは、デカルト派の人々のなかでは最もよく

我々の誤りの原因を理解していたので、魂の能力を説明するために、あるときにはこうした諸原因の比較検討という実質的な問題に分け入りはした『真理の探究』第一章一節。しかしまたあるときには、観智的世界なるものの中には彼はさ迷いでてしまい、そこで観念の源泉を発見したつもりになってしまったのである。『同書第三

巻を見よ。また彼の対話篇、形而上学的省察、さらにアルノーへの返書をもあわせて参照のこと。』他の哲学者たちは、さらにいろいろなものを捏造したり否認したりし、そういうものを彼らのお好みにあわせて我々の魂におしつたり取り去ったりする。そして、こういう想像力を發揮しつつ、我々の精神の様々の働きやその精神が知識を獲得したり失ったりする仕方を説明しようと彼らは自負するのである。『『被造物への神の作用』の著者のように。』最後に登場するのがライブニッツ主義者であるが、彼らはこの実体（魂）を最も完全な存在者であると見なす。彼らによれば、それは一つの小宇宙であり、世界を映す生きた鏡だということになるのである。ライブニッツ主義者は、存在するすべてのものを表象する力をこの実体に与えるのであるが、その力によって世界の本質、本性、そ

してすべての属性が説明できるのだと彼らは思いこんでいる。こういう具合に、哲学者たちはそれぞれ自分の体系に陶醉してしまふのである。自分の身の周りしか見ていないにもかかわらず、我々は存在するものの全てを見たと思ひこんでしまふ。それはちょうど、平原の地平線のところまで行けば手で空に触ることができると信じている子供のようなものである。

だとすると、哲学者たちの書物を読むことは無駄だということになるのであろうか。いや、それは違う。彼らの誤りを反面教師として利用するというもくろみからであれ、少なくともこれらの哲学者たちを研究することもなしに、世紀の贊嘆の的になったこれら多くの天才たちよりも自分はよく成功をおさめることができるなどと惚れることがいったい誰にできるであらうか。真理への道が拓けたと錯覚した先人たちが陥った誤りを知ることとは、より深い真理の探究を自力で進めたいと望むいかなる人にとっても大切なことなのである。水先案内人が経験を積む場合と同じく、哲学者が経験を積むというのは先人たちが座礁した様々の暗礁を知ることであり、この知識がないというのは、彼を導く羅針盤がないのと同じことなのである。

しかしこうした哲学者たちのあれこれの誤りを発見すると

しても、その原因を見通すのでなければそれは十分ではないだろう。つまり誤りの一つの原因からそのまた原因へと遡り、最初の原因にまで到達せねばなるまい。なぜならば、道に迷ってしまった先人たちが全てにとって結局は同じ場所であつたにちがいないような原因、誤りに導いていく様々の道のすべてがそこから発しているただ一つの出発点とも言える原因、そういう原因が一つあるからである。そしておそらくは、この地点のすぐそばに、真理に至る唯一つの道が始まるもう一つの出発点が見つかるはずなのである。

決して見失ってはならない我々の第一の目標、それは人間の精神についての研究である。しかし、それは人間精神の本性を発見するための研究ではない。そうではなくて、精神の様々の働きを認識すること、それらの働きが互いに結合する仕組みやそれらを制御する仕方を観察すること、そして最終的には、我々に可能な知力のすべてを獲得すること、このための研究なのである。我々のもつ様々の観念の起源にまで遡り、それらの生成を辿り、自然によって定められている限界に至るまでそれを追跡し、そのことをとおして我々の認識の広がりと限界を確

定し、人間の知性全体を一新しなければならない。

この探究をうまくやりとげるためには、観察という道以外に道はない。我々があくまでも固執すべきなのは、何人も疑いえないような経験、他の様々の経験を説明するのに十分な一つの根本的な経験を見いだすこと、これ以外にはないのである。我々の認識の源泉がどこにあるか、認識の素材が何であるか、またそれらを活用するときに従うべき原則は何であるか、その際使うべき道具は何か、その使い方はどのようなものであるか、こういうことは、右の根本的な経験に照らしたときに分かりやすく示されるはずである。観念と記号との関係であれ、観念相互の関係であれ、諸観念の連合関係におけるこれらの問題のすべてを解決しえたと私は思う。本書を読みすすむにつれて、このことの正否を人は判断しうるであろう。

私のもくろみは人間の知性に関するあらゆることをただ一つの原理にまで立ち戻らせることであるが、読者もお分かりのように、この原理とは曖昧な命題でも抽象的な準則でも恣意的な仮定でもない。そうではなく、それは一つの恒常的な経験であり、ここから出てくるあらゆる帰結もまた、新しい経験によって確証されていくのである。

観念と記号とは様々に結びつきあうが、後で証明するように、その結びつき方というのは観念と観念とが互いに結びつきあう場合と違ったものではない。それゆえ右の原理を展開するためには、我々の認識の素材、魂と肉体との差異、感覚とは何かといったことについて簡単に触れた後で、魂の働きをそのすべての発展段階に沿って追跡するだけではなく、あらゆる種類の記号使用を我々がどのようにして身につけてきたのかということや、その記号の正しい使いかたとはどういうものであるかということをも私は探究せねばならなかった。

この二つの目標を達成するために、できる限りことがらをその始源にまで遡って私は考えようとした。一方で、私はまず知覚にまで遡った。というのも、知覚こそ人が魂の中に認めうる最初の働きだからである。そのなかで私は、この知覚がどのような仕方と順序で魂の他の働きの全てを生み出すのか、それらの働きが可能になっていくのかを示した。また他方で、私は身振り言語にまで遡ってそこから出発した。我々の思考を表現するのに適したあらゆる技芸、すなわち身振り、ダンス、発話^{パボリス}、朗唱、記譜法、パントマイムの技術、音楽、詩、雄弁、

書く技術^{エクリチュール}、様々の国語の文字といったものが、どのようにしてこの原初的な身振り言語から生み出されていったのかが理解されるであろう。この言語活動の歴史は、様々の記号が考案されるときに状況を目に浮かばせることだろう。そういうわけで、この歴史は記号の真の意味を示し、記号の誤用を予防することを教えてくれるであろうし、私の考えでは、我々のもつ様々の観念の起源についての一切の疑念をそれは追いつめてくれるであろう。

そして最後に、魂の働きの発展と言語活動の発展とを通覧した後で、どのような方法で誤りを避けることができるのかを、そしてまた、何ごとかを発見するときであれその発見を他人に教えるときであれ、そのときに従うべき順序とはどういうものであるかを、私は示してみよう。以上が、本書の全体的な見通しである。

哲学者はしばしば、何が真理であるかを知らないくせに、真理は我にありと広言してきた。今ではすでに忘れさられていた昔の見解をみつけどし、それを真理であるとして拾いあげる哲学者がいるが、それはその見解がより正しいものと思われるからではなくて、一つの宗派の首領になりあがりたいたいという気持ちからなのである。実際ある体系が成功をおさめ

るには、ただそれが新しいというだけで十分なのである。

我々の知識の全ては感官から来るという原理をペリパトス学派の人々が採用したのも、右のような動機からであつたように思われる。この真理を正しく認識することからあまりにもほど遠かつたので、彼らのうちの誰一人もこれを発展させることができなかった。それゆえ何世紀の後になつても、この真理はいまだ発見されるべきものとしてそのままに放置されてきたのである。

ペーコンは、この原理の正しさに気づいたおそらく最初の人である。様々の学問を進歩させる上での卓越した指針を与えている彼の著作『ノヴム・オルガヌム』の根本は、この原理なのである。デカルト学派の人々はこの原理を軽蔑をもつて退けた。しかしそれは彼らがこの原理をペリパトス学派の書いたものに拠つてしか判断しなかつたからである。そして最後にロックがこの原理を正しく把握し、それを最初に証明した者という榮譽をちかえたのである。

しかし人間の知性について書かれた著作において、この哲学者が右の原理をその主要な目標として取り上げたかという、そうは思われない。確かにロックはあちこ

ちでそれを試みたり、試み続けているといつてもよい。しかしそれは不十分なものであつたし、不十分に組立てられたこの著作が多くの批判にさらされるにちがいないということを予期していたにもかかわらず、彼自身が言っているように『知性論』序文参照、それを書き改める勇氣と時間が彼にはなかつたのである。この著作の冗長さ、繰り返しが多さ、叙述の順序のでたらめさは承認できないところであるが、それはこういった事情のせいである。しかしロックにはこれらの欠陥を正すことが十分できたはずであつて、この点におそらく弁解の余地はあるまい。例えば、ロックは言葉とその使用方が我々のもつ觀念についての原理に光を投げかけうるものであることを知つたのであるが、しかしそれに気づくのがあまりにも遅かつたために、本来ならばその著作の第二巻の主題とされるべき問題を第三巻（第三巻八章§二）になるまで扱っていない。もしこの著作を新たに書き直すことができたとしたならば、人間の知性を働かせている様々のばね仕掛けについてロックはもっと豊かな考察を展開したであろうと推測されるのである。それがなされなかつたため、人間の認識の起源についてはロックはほんの少し触れただけで通りすぎてしまつた。そしてこれこそが、ロックが最も深めることの少

なかった部分なのである。例えばロックはこう想定している。すなわち、魂は感官をとおして様々の観念を受け

ととすぐに、思うがままにそれらの観念を繰り返し取り出し、組み合わせ、多様な仕方でもってそれらをまとめあげ、そうすることによってあらゆる複雑観念を作りだすことができるのだ、と。しかし、小さな子供の頃は、様々の感覚を経験するにもかかわらずこうした観念を引き出すことはできないのであり、それができるようになるまでには長い時間がかかるのだということは確実である。このように、始めのうち魂はその働きの全てを実際に働かせることができないのであるから、我々の認識の起源をより全体的に眺めるためには、どのようにして魂はこれらを働かせる術を習得するのか、またそこにどういう進歩の道筋があるのか、こういうことを示すことが不可欠なのである。私の見るところでは、ロックはこのことを考えていないし、またそのことでロックを批判した人も、その著作のこの弱点を補おうと試みた人もいないのである。単純な知覚から出発して、魂の様々の働きの生成を説明しようという私のこのもくろみはあまりにも新しいもので、どういうやり方で私がこれを実行

に移すのかを理解するのに読者はおそらく少なからぬ苦勞を覚えるであろう。

『知性論』の第一巻でロックは生得観念説を検討している。

確信はないが、ロックはこの説の誤りを打ち倒すのにあまりにも手間どっているように私には思われる。これに對して私のこの書物は、この生得観念説を間接的なかたちで破壊するだろう。またロックは、その第二巻のあちこちの場所で魂の様々の働きを考えているが、しかしそれは皮相なものである。言葉が第三巻の主題であり、ロックこそが真に哲学者的な仕方での主題について書いた最初の人であるように私には思われる。にもかかわらず、言葉の問題は依然として本書の重要な部分でなければならぬと私は考える。なぜなら、この言葉の問題はより新しく広範な仕方でも検討されるべき余地をまだ残しているからであり、また私の信じるところでは、記号使用こそが我々のもつあらゆる観念の種子を発芽させる原理だからである。この他にも、空間や持続といった類いの観念の生成に関する第二巻の箇所や、「知識（と蓋然性）」と題された第四巻などにおいてロックが述べた優れた觀察の中にも、到底承服しえない論点が多く混じっている。しかしこうした問題は（認識の起源というよりも）認識の外延により固有

にかかわるものであるから、私の構想のなかにこの問題は入らない。これにかかずらうのはここでは無用なのである。

『人間認識起源論』目次

第一部 我々の認識の素材、特に魂の働きについて

第一章 「章題なし」

第一節 我々の認識の素材について、魂と身体との

区別について

第二節 感覚について

第二章 魂の働きの分析とその生成過程

第一節 知覚・意識・注意・再認について

第二節 想像・瞑想・記憶について

第三節 注意によってつくられる観念の連合は、いかにして想像・瞑想・記憶を生み出すか

記号の使用が、想像・瞑想・記憶の進歩の

第四節

真の原因である

第五節 反省について

第六節 観念を区別し、抽象し、比較し、組立て、分解

する働きについて

第七節 様々な学問的原理の起源についての余談、および

分析する（魂の）働きについて

第八節 肯定し、否定し、判断し、推理し、理解すること、知性

第九節 想像力の欠陥と長所について

第十節 想像力は、それが真理に与える喜びをどこから

引き出すか

第十一節 理性・才知について、才知の様々な種類につ

いて

第三章 単純観念と複雑観念について

「節なし。単一節」

第四章 「章題なし」

第一節 観念に記号を与える働きについて

第二節 前節において証明されたことを人は事実によって確認する

第五章 抽象について

「節なし。単一節」

第六章 人が根拠なく魂に帰してきたいくつかの判断

について、あるいは形而上学における一つの
問題の解決

「節なし。単一節」

第二部 言語と方法について

第一章 言語の起源と進歩について

第一節 身振り言語と分節音言語の起源

第二節 初期言語における韻律法について

第三節 ギリシア語・ラテン語の韻律法について、

また、古代人の朗唱法について

第四節 古代人における身振りの芸術の進歩につい

て

第五節 音楽について

第六節 歌うような朗唱法と平坦な朗唱法の比較

第七節 最も完璧な韻律法とはどういうものか

第八節 詩の起源について

第九節 語について

第十節 前節と同じ主題の続き

第十一節 語の意味作用について

第十二節 倒置について

第十三節 書きことばについて

第十四節 物語・寓話・謎話の起源、および文彩・比喩
の使用に関する細部について

第十五節 諸国語のそれぞれの精髓について

第二章 方法について

第一節 我々の誤謬の最初の原因と真理の起源について

第二節 観念、あるいはその名前を規定する仕方につい
て

第三節 真理の探究において従うべき順序について

第四節 真理の提示において従うべき順序について

◆ 解題

コンディヤックの著作と生涯

『人間認識起源論』の背景

右に翻訳したのは、一八世紀フランス啓蒙主義の思想家で
あるエチエンヌ・ボノ・ド・コンディヤック (Etienne Bonnot

de Condillac)の代表作、『人間認識起源論』(“*Essai sur l'origine des connaissances humaines*”, 1746.)の序論およびその全体の構成を示す目次である。底本としては、ジョルジュ・ル・ロアの校訂したコンディヤック哲学著作集(PUF、一九四七年)第一巻を用いた。これはコンディヤックの死後編纂された全集(一七九八年版)に基づいており、初版との異同も示されているが、この序論の部分には重要な異同はほとんどないので、それは割愛した。「なお、訳文中の「」はコンディヤック自身の注記であり、「」は訳者の補注である。」

さて、従来のフランス啓蒙主義思想のわが国への紹介を振りかえると、圧倒的にルソーのものが多く、(野沢協氏による、ほとんど人間業とは思えないピエール・ベールの膨大な著作の翻訳を忘れてはならないが)次いでヴォルテール、デイドロ、さらにずっと少なくエルヴェシウス、ドルバック、メトリ……と続き、コンディヤックとなるほとんど知られざる思想家としてうち捨てられてきたと言っても過言ではないように思われる。私の知る限り、わずかに『感覚論』のみが加藤周一・三宅徳嘉両氏の名訳によって紹介されただけであるし、それ(創元社、一

九四八年)も半世紀近く前のことになる。

またルソーはひとまずおくとして、フランス唯物論、あるいはより広い意味での哲学的唯物論の歴史を辿る場合にも、コンディヤックへの注目がこれほど貧しいものであったということに改めて驚きを感じるのは私一人ではなからう。もちろん、唯物論(materialism)とは何かということ自体、それほど自明なことではない。従来、哲学史において「唯物論」と称されてきた思想の多くは——デモクリトスやエピクロスの時代からデイドロやドルバックの時代に至るまで——自らをそう呼んだのでも他からそう呼ばれたわけでもないのであって、後世の人々が各々自分の立てた基準によって哲学史を整理するときに使われた指標にすぎなかったのであるから。(事実、最も典型的な唯物論者と考えられるデイドロにとってさえ、「唯物論者」とは古代教父たちの一派——確かに「唯物論」的ではあるのだが——を指す言葉でしかなく、自らの立場を宣揚するに相応しい言葉とは考えられていない⁽¹⁾)あるいはまた、どのような指標を採用するかに関わることだが、そもそもコンディヤックの哲学を唯物論と呼べるかどうかもまた、非常に微妙な問題をはらんでいる⁽²⁾。しかしそれゆえに一層のこと、キャッチフレーズしか知られてはいないこれらフランス唯物論者た

ち、中でもとりわけ巨匠的な地位を占めるコンディヤックの仕事を読み直すことは、重要なのである。その論理の強靱さ、着想の大胆さ、思考対象の広大さのいずれをとっても、コンディヤックが巨匠的な存在であることは疑えない。ここで紹介したのはそのほんの一部にすぎないが、それでもその哲学史上の重要性を感じさせる一端とはなっているだろう。これがコンディヤック研究のきっかけになればと思う次第である。ここではその内容に立ち入ることはもちろんできないが、知られざるこの哲学者についての最小限の略歴とその思想上の位置関係について触れておきたい。(以下、主に本底本に付せられたル・ロアの序説と、前掲訳書における加藤周一氏の解題を参考にした。)

コンディヤックは、一七一五年、南仏のドーフィネ地方の都市、グルノーブルに生まれた。父は高等法院参議、長兄は裁判官であり、典型的な法服貴族の家庭である。一七二七年、父の死にともないリヨンの長兄(マブリ家)に引き取られ、ジェスイットのコレージュで学ぶ。偶然ではあるが、後にジャン・ジャック・ルソーはこのリヨンのマブリ家の家庭教師となり、コンディヤックの甥た

ちを教えている。そこでルソーは、幼い日のコンディヤックの噂を聞いたのであろうが、それによると愚鈍(esprit borné)な子供だと思われていたらしい。後にパリに出て、サンシュルピスの神学校とソルボンヌ大学で神学を修めたが、たいして熱心ではなく、むしろ科学と哲学にひかれた。一七四〇年によく司祭の資格を得たが、僧職に魅力もなく「たった一回しかミサを行わなかった」という。

社交界、とくにマブリ家と親交の深かったタンサン夫人のサロンに足しげく出入りをし、その中でまずルソーを、次いでそのルソーの紹介でデイドロと知り合い、親密になる。このルソー、デイドロ、コンディヤック三人の関係は、一八世紀の中葉、ヨーロッパ大陸にイギリス経験論が上陸し、受容・変容されていく過程を目のあたりにする思いがして、おそらく思想上のドラマとしても最も興味深い出会いであったと想像される。これについては、ルソーがその『告白』の中で語っているエピソードがあまりにも有名であるが、その部分を念のために引用しておこう。これは一七四五年頃の思い出である。「私はまた、コンディヤックとも親しくしていた。彼もまた私と同様、文壇では無名であったが、今日の彼となるべき素質は持っていた。彼の力量を見抜き、その価値を正

しく評価したのは、おそらく私をはじめでたつたろう。彼もまた私が好きだった。私がオペラ座に近いジャン・サン・ド二街の部屋に閉じこもって『ヘシオドス』の幕を書いていた頃、彼は時々やって来て、一緒に割勘で昼食を食べたりしたものだ。当時、彼は処女作である『人間認識起源論』にとりかかっていた。……私はディドロにコンディヤックとその著述のことを話し、二人をひきあわせた。彼らは気の合うたちであつたので、意気投合した。……私たちは互いに遠く離れた地区に住んでいたので、週に一回、パレ・ロワイヤルに三人で集まり、オテル・デュ・パニエ・フルーリで食事をともにした。この、週に一度の会食がディドロにはよほど楽しかつたとみえて、いつもはどんな会合にも殆ど出席しない彼が、この会食には一度も欠かさずに顔を出した⁽³⁾。

この会食で、どのような会話が交わされていたのかは大変興味深い、細かい点は伝えられていない。しかし、ディドロの伝記作者A・ビー⁽⁴⁾によれば、この会食の最初の夜に取り上げられた書物はロックの『人間知性論』であつたという。もちろん、これ以上立ち入ったことを述べることは空想の類になってしまうが、この三人の

若き巨匠たちが他ならぬこのロック哲学から、特にその『知性論』第三巻に展開された言語論から極めて深刻な影響を受けたことは、その後の彼らの著作活動から容易に推定されるのである。(コンディヤックについては、ここに訳した『人間認識起源論』全体のブランからも明らかであろう。ルソーについていうならば、一七五五年に発表される『人間不平等起源論』、およびそれから分離独立して成立する『言語起源論』(成立年不明)。ディドロについては『聾啞者書簡』(一七五一年)を参照。)

さて、こうした思想的交流を経て、コンディヤックはいわゆるフランス啓蒙主義の旗手になっていくわけであるが、後にあの膨大な『百科全書』^{アンシクロペディ}の編纂者として獅子奮迅の活躍することになるディドロや、狂気の予言者のような姿と化してヨーロッパ全土を放浪することになるルソーといった仲間⁽⁵⁾に比べれば、コンディヤックの生涯は平坦な学者のそれであつた。ここではその著作リストを掲げるだけで十分であろう。(もっとも、その著作の内容は、決して平坦なものではないが。)

一七四六年 『人間認識起源論』(“Essai sur l'origine des connaissances humaines”)

一七四九年 『体系論』(“Traité des système”)

一七五四年 『感覚論』 (“*Traité des sensation*”)

一七五四年 『動物論』 (“*Traité des animaux*”)

一七五八年 『教程』 (“*Cours d'étude*”)

一七七五年 『通商と政府』 (“*Le commerce et le gouvernement considérés relativement l'un à l'autre*”)

一七八〇年 『論理学』 (“*La logique ou les premières développements de l'art de penser*”)

一七八〇年 『計算言語』 (“*Langue des calculs*”)

なお『教程』とは、バルマ公フェルディナンドの家庭教師としての仕事のために編んだものであり、一七五八年以降十年近くの間、継続的に編集された。

最後にあげた『計算言語』の執筆中、この休むことのない頭脳はロワール川を望むオルレアンにて停止した。いかなる碑文もなく埋葬されることを望んだという。享年、六五才であった。

(1) デイドロ・ダランベール『百科全書』の〈matérialiste〉の項目参照。なお、この膨大な辞典に〈matérialisme〉という項目は収録さえされていない。この概念の教唆な運命については、R・ウィリアムズの

『キーワード辞典』(晶文社)に興味深い記述がある。

(2) コンディヤックは唯物論の敵であるという立場からの護教論も、もちろん根強い。『人間認識起源論』の第一部冒頭(第一章§六・八)において、コンディヤックは自説についての奇妙な弁解を試みているのであるが、これは自説が「唯物論」的に解釈されることを拒否した「唯心論的・カトリック的信仰告白」なのだとル・ロアは注釈している。この奇妙な弁解というのはこうである。すなわち、『人間認識起源論』全体は一切の超感性的なものを退ける立場から書かれているのであるが、それはキリスト教的な恩寵の原理を否認するからではない。アダムが原罪を犯す以前には、あるいは魂が死後肉体の拘束から自由になったあかつきには、これとは全く異なる原理が働くのであろう。しかし、アダムの原罪以降「魂の肉体への依存」が決定的になつてしまった「この世界」における議論の中には、こういう超越的原理を持ち込んではいならないのだ、と。「アダムの原罪」は、ここではどちらにでも解釈されるような微妙な使われ方をしているように思われる。

(3) 『告白』七巻、岩波文庫版中巻一四四頁。

(4) A = Billy “*Vie de Diderot*” 1932, Flammarion, p.54

(こもだ ひろし 千葉大学・哲学／倫理学)

一九九一年一〇月三日、そして四日

中 河 豊

I 一〇月三日、そして四日

ジャンニス・ジョプリンを聴きながら

一九九一年一〇月三日早朝、テレビ・ニュースは統一ドイツ一周年の様子を伝えた。一つはベルリンの「マルクス・エンゲルス橋」が社会主義化される以前の旧名へと変更される事実、もう一つは極右に抗議する外国人労働者たちのデモである。

「再統一」以前にすでにユルゲン・ハーバーマスは通貨統合にともなうナショナリズムの危険性を指摘してい

た。国家のアイデンティティは歴史や言語あるいは運命共同体という政治以前の所与に依存してはならない。むしろそれは自己決定的な政治制度、あるいは憲法に依拠しながら公共のディスクルスに委ねられる（三島憲一訳「ドイツ・マルク・ナショナリズム」『思想』、一九九〇年、七月号）。東ドイツは本来は統一時に失効されるはずのドイツ基本法のもとへと吸収された。一年後の今、旧「東」ではマルクスの名前は確実に消去されている。たとえば過去の清算が大学あるいは教育関係者の政治審査

という形で行政的に行われている（吉澤昇「旧東ドイツ地域の教育改革」、『世界』一九九一年一月号）。さらに失業の深刻化は外国人労働者への攻撃にみられるような排外主義的イデオロギーの影響力を増すかもしれない。

若きマルクスは理論の「物質的力」を語ることができた。彼はプロレタリアートの解放を人間全体の解放の一部とみなす理論的枠組を得て、プロレタリアートのラディカルな解放要求を実現可能とみなした。そして現在、「マルクス・レーニン主義」からの民衆の離反という歴史的状况はマルクスのいう理論の「物質的力」の問題を今日なりに浮上させる。理論は本来的には解放を志向する主体の生活要求を表現している。マルクスは理論の「物質的力」を単に政治的・イデオロギー的なレベルでは理解していなかった。

翌四日、FM放送でなつかしいヴォーカル「心のカケラ」を聴いた。アナウンサーはその日がジャニス・ジョプリンの死んだ日であることを告げた。ジャニスは一九七〇年一〇月四日、傍らにタバコの箱をおき腕にニードルの跡を残して死んだ。「心のカケラ」は彼女の死を記念する特集番組で流されていた。

ブルージーなジャニスのヴォーカル、とくにガーシュウィンの「サマー・タイム」は未決着な過去を想起させる。ジャニスのヴォーカルへの多少の距離をおいた共感是一九六〇年代から七〇年代への移行期を回顧させる。

音楽も人々の要求を表現することに成功するとき、社会的なムーヴメントとして成立する。ジャニスの音楽は個人の内面をストレートに表現するロックであった。社会環境的にはロックという文化現象は当時「ラブ・ジェネレーション」をうみだしていた。

一九六〇年代にロック・ムーヴメントはサンフランシスコで急速に高揚した。この都市は六〇年代の後期に「ロック・ミュージックの首都」となり、「ジェファソン・エアプレーン」などのロック・グループが活躍した。ジャニスはいくつかのバンドとともにここで活動した（一九八五年版『ザ・ニュー・エンサイクロペディア・ブリタニカ』の「サン・フランシスコ」の項）。

ジャニスはヒッピー・ムーヴメントの内部に位置する。「ロングヘアーで見かけにおいて常に汚れた」若者の世代、「フラワー・チルドレン」が一九六七年に現れ「大きな社会」からの逃避と「平和と愛」の恩恵を説いた

(同右)。彼らの出現がヒッピーの運動を創り出している。ロング・ヘアーに象徴されるヒッピー・ムーヴメントは種々雑多な要素をはらみながらも既存の生活様式への反抗をおこなう。この運動の基本願望は「より人間的な世界を実現すること」にあり、そのための通路は「物質的な幸福やキャリアへの努力を拒否すること」ならびに「自由で平和に満ち自然に関わる」共同体、「愛」、音楽、興奮剤を楽しむことにおいてエクスタシー的な幸福体験をめざす」共同体において「ブルジョア的タブー」を除去することであった(一九八二年版『プロッケンハウス・レキシコン』の「ヒッピー」の項)。

この『プロッケンハウス』の整理は要をえている。「愛」を歌いドラッグで死んだジャンスのスタイルはヒッピーに特有であった。

しかし、ロックはレコードという媒体をもち産業とマーケットに結合している。ロックはその初期に特に黒人のリズム・アンド・ブルースから音楽的ファクターを多く取り入れてきた事情から、当初はマイナーなレーベルから多く発売された。しかしメジャー・レーベルがロックに着目しアーティストを確保し始める。

ジャンスの実質的な最初のレコード『チープ・スリル』はヒッピー・ムーヴメントとメジャーな音楽資本の結合の所産である。このレコードは、サンフランシスコの当時の多くのロック・バンドがライブを基本としていたスタイルを反映し、ライブ演奏を収録する形でつくられている。その後ジャンスの音楽は音楽産業の側から変形されていく。ジャンスは音楽資本CBSの意向に従い、ミュージシャンにとつての基本であるバンドを変更する。それがコズミック・ブルース・バンドであり、フル・テイルト・ブギであった。

サンフランシスコの活動当初からの「ビッグ・ブラザー・アンド・ザ・ホールディング・カンパニー」(BBHC)と組んだジャンスの歌はメッセージを率直にいきいきと表現している。その印象はジャンスの残した他のレコード『コズミック・ブルースを歌う』『パール』と比較すればえられる。この二枚は確かによく企画されており、バンドもうまく演奏している。しかしBBHCとともに歌うジャンスがもつともジャンスらしく感じられる。ライブ録音で聴く歌いぶりからもわかるように、ここでは音楽がバンドとのリラックスした関係、あるいは

自然発生的な人間関係に根ざしている。

もちろんバンドの変更によってジャニスの音楽が根本的に変わってしまったてはいない。依然としてジャニスはジャニスであり続ける。しかし、ジャニスの音楽を産業化社会への疑問を抱いたヒッピー・ムーヴメントのコンテキストで理解するなら、プロデューサー名の書かれていない『チープ・スリル』こそジャニスにふさわしい。

Ⅱ CDによる恩恵？

ジャニスの歌は彼女がすでに存在しない以上レコードという媒体を通じてしか聴くことはできない。音楽再生テクノロジーのアナログからデジタルへの変更は過去の音楽ソフトのCDによる再発売という現象を生み出した。それは過去において入手できなかった録音を買うチャンスを作り出した。

CDは確かに市場に受け入れられた。ノイズのないこと、聞きたい曲へのアクセスの簡便さ、コンパクトなこと、メンテナンスの容易さ、寿命の長さなど市場に受け入れられる要素はあった。しかし日本ではオーディオ業

界がハード及びソフトの新規購入を期待してCDの普及を強引に行った。それは個人の所有しているアナログ・レコードとその再生機器のスクラップ化を意味した。過去の七八回転のSPから四五回転のドーナツ盤への移行は若者のロック・ミュージックのメディアとしてであったし、三三回転LPは大人達の音楽メディアとして発展した（カール・ベルツ『ロックへの視点』中村とうよう・三井徹訳、音楽の友社、昭和四七年、八四―八五頁）。つまり単なる技術革新以外に、音楽文化上の要求がそこにあった。しかしCDでは何よりもデジタル・テクノロジーの特徴が強調された。

CDには当初から疑問がもたれていた。再生周波数二〇から二〇〇〇ヘルツのフォーマットは明らかにアナログ・レコードよりも劣っている。さらにCDはデジタル・ノイズに起因する特有の音をもつ。そのため相変わらずアナログ・レコードを愛する人間も多い。CDをアナログ・レコードのような音で再生する願望すら生じている。

現在アナログ・レコードの愛好者は奇妙にもマニアの位置におかれてしまった。マニア向けの特異なケースを

のぞきアナログのソフトは供給されない。こうした形で資本の側がレコードの楽しみ方をかえてしまった。本人の意志に反して外的に生活様式を強いることを「暴力」と呼べば、これは文化的な「暴力」のように感じられる。

もちろんデジタル・テクノロジーは操作と装置の簡便さという生活上の要求に応えた。CDは音楽を生活の一部にするために存在してよい。しかし、資本主義的マーケットが企業活動に従属する限り、今後も「暴力」はさまざまな形で現れるだろう。

Ⅲ 再びジャニスを聴きながら

今日の時点からみて、ヒッピーの運動に感じられるのは「愛」への信じがたいまでの過剰な期待である。ジャニスは「愛」を「ボールとチェーン」の比喩で歌う。ここでは愛は愛する主体をも不自由にするまで強烈である。

もちろん、「愛」はアメリカン・ポップスにおいても「結婚」と結びついてテーマ化されていた。その市場にはメジャーな音楽資本に属するタレントが音楽を供給した。しかしロックの運動はそうした既成の「愛」のイメ

ージを破壊する。「愛」はもはや既成の生活様式の内部においてではなく、むしろそれに抵抗し新しい生活様式を生み出す原理として自立化させられる。

新しい「愛」のメッセージはロックにおいてその適切な表現形式を見いだした。六〇年代前半のフォーク・ムーブメントが政治的社会的メッセージをもちながら消滅したのに対し（ベルツ、前掲書、一二六―一二七頁）、ロックは生活に内在する主題を選択した。すでにザ・ビートルズがジャニス以前に愛を「自由」と結びつけていた（同、二〇九頁）。

「愛」は過去においても多くの仕方でも思想的原理として用いられた。「愛」という言葉は使用されるコンテクストに応じて異なる意味を持つ。ジャニスにとつては「愛」は現代の希薄化した人間関係における直接性への要求である。すでにあげた三枚のアルバムには「私は男が必要だ」「愛は特別のものだ」「抑えられない愛」のようなメッセージが繰り返してこくる。

ここでは愛は生そのものと同一視されるまでに意味を拡大される。ジャニスは「あなたの愛が私に命をくれる」（「ハーフ・ムーン」）と歌う。

ジャンニスの歌はダーリン、ベイビー、ハニーという呼称の多用にみられるように一人称が二人称に訴える形式をとる。これはビートルズが「シー・ラヴズ・ユー」と歌ったのと対照的である（ベルツ、前掲書、二〇七頁）。ジャンニスには強烈な直接性への願望がある。「愛」の直接性においてこの願望に応える場合に人間は「良い」と形容される。

この願望は孤独な自我の救済というニュアンスを帯びる。「孤独」な「エゴ」は「愛」を通じてたとえ狭い範囲であれ社会的連帯への可能性を手にいれる。自分は「言葉通りに自分を扱ってくれる偽りのないだけか」（ワン・グッド・マン）をもとめている。

ここで「偽りのない」という道徳的言語が使われているのは偶然ではない。それは人間関係をつくるに不可欠な条件であり、これだけが「良い」男の条件である。価値規範は極端に単純化され、偽りのなさという道徳的ミニマムがむしろ最大限の要求にされる。別の言い方をすれば、「愛」という主観性を原理にして善悪が単純化される。

この単純化では他者は主観性にとって善であるか悪で

あるかである。相手は自己の障害物にもなりうる不確かな存在にすぎない。「愛」は与えられたなら「できる間に」とらなければならない（「愛は生きているうちに」）。そしてこのはかなさのために愛を求める「女」は「タフ」である。愛の挫折の中でも主体は「もう一つの心のカケラ」とれと相手に訴える（「心のカケラ」）。

「愛」は直接に感じられる。感覚への過大な依存は直接的人間関係への切実な要求の裏面である。ロックがラジオのディスク・ジョッキー形式の放送において広まったのは偶然ではない。ディスク・ジョッキーはラジオを聴いている人間の意見・要求に応えることにより、ラジオによる媒介性をなくす印象を与えた。それはむしろ孤独な若い世代に直接的連帯への可能性を示唆した。

「愛」への依拠は社会的政治的状況への消極的な抗議の意味をもえる。ジャンニスは「非常に社会的政治的に重要な歌」として「一生働き尽くしたが、友人からどんな援助もない。おお神よ、私にメルセデス・ベンツを買ってくれませんか」と皮肉っぽく歌う（「ベンツが欲しい」）。

ここにはベンツを所有したいという欲求を再生産する社会への距離が意識的に表現されている。

「愛」への期待は結果的に非日常性と日常性との通路をつけた。ヒッピーの運動は感覚への思い入れの強さから非合理的な印象を与える。しかしここには新しい生活様式への要求があった。それは既製の生活を否定して「愛」という単純な生活原理にもとづいて生活を構築しようとした。「愛」は一部の人間にしか解読できない語法を持たない。極端にまで単純化されているために「愛」への可能性は誰にも開かれていない。

ここには一種のパラドックスがある。「愛」は既製の日常性への対抗原理として意識された。しかし、「愛」という問題の出し方が、万人への可能性を内在させるために「日常性」を志向していた。そしてヒッピー自体は真に生活に内在することができずに、ドロップ・アウトし消滅していった。

極端なまでの「愛」の原理と感覚での確証との結合は今日是不確かなものとなっている。主観的願望の過剰は他者の異質性への肯定的な眼差しを希薄にする。むしろ直接性と感覚との素朴な結合はマーケティングの絶好の対象になる。商品という社会的所与は直接に感覚的欲望を満たすものとして現れる（アダルト・ビデオの代償

的な欲望充足の普及さらにはクレディットにより抑制できなかった欲望など）。

八〇年代に現れたロック・シンガー、「フェミニスト」シンディ・ローパーは自己と他者との冷静な関係に依拠した愛を歌う。シンディでは相手の「真実の色（トゥルー・カラーズ）」を見ることが愛の理由になる（「トゥルー・カラーズ」）。

愛は孤独な自我の連帯への願望から導きだされない。それは自分と他者との相違を認め相手の本当のあり方を見つめることからうまれる。この愛は知的な営みに媒介されていて、直接的な感覚のレベルでは成立しない。

「愛」の言葉で文飾化される事態は主観的な欲求から派生する直接的な関係としてではなく、むしろ知性の媒介によって構成される。ここで知性は自分の欲求から距離をおき、他者をその肯定性においてみる。主観的願望から派生する愛にとってはその願望をみたくない他者は否定的な障害物になる。ジャンスの極端にまでの単純化された愛は他者を「良い」人間であるか否かという二者択一のまえにたたせる。しかし他者の異質性から出発する「愛」はそうした二者択一を提起しない。

いまでも一定の距離感を感じながらもジャンニスに共感するのは、直接的な人間関係への要求のためである。現在を生きたことは多様な社会システムのなかでそれぞれのレギュレーションに従うことを不可避にする。ここではシステムごとに異なった価値規範あるいは行動様式が支配する。個人はシステムごとに分断化される。この状況にある人間にとってシステムに依拠しない直接的な関係はレギュレーションに従属せずに相互の全体性を確認できるように魅力がある。

日本という国はアマチュア・バンド九〇万人、その予備人口六〇〇万人という「バンド・ブーム」(集英社「イミダス、91」)にある。ロックはビートを聞いたわかりやすい語法をもつ。それは農村共同体への郷愁と結合している演歌とは異質である。演歌は農村共同体からの分離あるいは共同体自体の破壊を基礎に過去の共同体への郷愁を歌う。確かにそれは直接的な関係への回帰願望である。しかし近代的な社会システムは古い共同体とは異なる直接性への欲求を生み出している。そしてそれはもはや演歌とは異なる語法を必要としている。

哲学の「理論」はここにある生活要求にどのような態

度をとれば良いのだろうか。また、それを理論として表現するとしても、そのためにはどのような語法が必要なのだろうか。

(なががわ ゆたか 名古屋芸術大学・哲学)

ジル・ドゥルーズの唯物論

——彼のスピノザ論を中心に——

河 津 邦 喜

はじめに

現在フランス哲学界において、デリダ・リオタール・亡きフーコー等と共に、ポスト構造主義の哲学として、重要な一翼を担うジル・ドゥルーズについて、その唯物論を語ることは、それほど奇異なことではない。実際、フェリックス・ガタリとの共作である『アンチ・オイディプス』には、観念論的精神医学に対して、唯物論的精神医学を代置するのだ、という主張が見える⁽¹⁾。しかし、この共同作業に至るまでにドゥ

ルーズが一人で書いた哲学的諸著作は、ヒューム、ニーチェ、カント、ベルクソン、スピノザ等についての厳密な解釈書であり、そこには、己れを唯物論者として規定する強い主張は見出されない。それでもやはり、彼は広義の唯物論者だ、と私は考える（それは、大雑把に言うと、アルチュセールの非弁証法的唯物論であり、構造主義と唯物論との和解を目指す。また、アルチュセールのヘーゲル批判、即ち、主体性の哲学Ⅱ目的論への批判を、彼は受け継ぎ発展させている）。何故なら、彼の解釈には、一貫した傾向、言わば唯物論への傾向があるからだ。成程、その解釈書群に明白な唯物論的言表はないどころか、一

見極端な観念論としか見えない言表が頻出する。しかし、ドゥルーズの考えでは、観念論とは全く独立に、「これこそ真の唯物論だ」、として立てられた固定的体系や確定的命題などは、全く信用のおけぬものであり、真の唯物論は、観念論批判、それからの差異、それからの離脱の運動、としてのみありうる。例えば、彼は、ヒュームの哲学の内に、観念論への強力な批判を見出す。勿論、ヒュームが唯物論者だと言うのではない。そうではなくて、彼の批判は、観念論の基盤を正確に突き止めているがゆえに、唯物論的な理論構築のために利用できる、と考えるのだ。彼は、丹念に、様々な哲学者から利用できる理論を集め、彼の博士号取得論文である『差異と反復』と副論文である『スピノザと表現の問題』（以下『表現』と略記）でそれを集大成している。そこでは、西洋哲学史が、観念論的傾向と唯物論的傾向とが互いに優位に立つと争い、様々な妥協形態を産み出していった歴史として、描かれている。

以下では、『表現』を手掛かりに考えたい（紙数の関係上、かなり大雑把な説明になることを御了承願いたい）。

一 観念論とは超越主義である

ドゥルーズは、『表現』第十一章において哲学における超越主義と内在主義との対立として、哲学史を再解釈している。超越主義とは、狭義には、「神は世界の超越的原因だ」とするものであり、内在主義とは、内在的原因だとするものだ。彼は、この対立を認識論、存在論、その他あらゆる領域において見出す。この広義の対立を、観念論と唯物論との対立と読み替えて差し支えない、と私は考える。では、観念論Ⅱ超越主義とはいかなるものか。それは、経験的な多様性の統一（それは、物体・有機体・社会・意識の流れ・幾何学的形態、その他何でもよい）の根拠として、超越的なものを措定する操作である。つまり、現実の諸事物は相互に因果的に規定し合うが、それらのものを規定しながら、それ自身は何物にも規定されない超越的なものが存在し、高みから現実の事物を支配する、と考える傾向だ。それは、例えば、プラトンの「イデア論」に典型的に現れる。⁽²⁾それによると、人なら、あれこれの人を人たらしめる何かがある筈であり、その何かはイデアであって、現実のこの世界とは異なる、時空を超越した彼岸

にある。それがイデア界であり、神はイデアを眺めながら現実の世界を創造したことになる。この二世界説において、イデアという超越項が、神を媒介として、現実の多様な事物に働きかけるのである。^③この考え方は、事物の完成された状態（成人）を基準とし、そこから逸脱した事物（病人や狂人）や、未だそこに達しない事物（子供）を、不完全、未完成なものとして、負の価値を与える。のみならず、いかなる現実の事物も、イデアから見るとあくまで不完全でしかありえないのは、イデアの支配を拒む質料のためであり、イデアの臨在は、イデア界からのその墮落なのだ、と考える。この思弁的図式は、実践的図式において反復され、我々の魂はイデア界に居たときは幸福に満ちていたのに、何かの罪を犯した報いとして現実の世界に墮落したのであり、この世での我々の苦しみは、その報いであると共に、贖罪であり、もう一度イデア界に帰る契機となる、と考えられる。この考えは、キリスト教によって反復される。

この超越主義的思考は、様々な側面とその帰結を持つ。それは、①人間中心主義である。「超越的なもの」とされるのは、人間がその種に固有な仕方でも物を捕らえる一面を抽象化したものに過ぎないから。②表象主義である。抽象化され

る一面とは、意識によって明晰判明に表象できるものであるから。ハイデガーが批判したように表象主義は、存在を眼前に置かれた存在者の全体に還元してしまう。③目的論である。「超越的なもの」は、未来において実現されるべき目的となる状態であるため、現実の事物の目的因として規定されるから。④主体性の哲学と不可分である。主体性とは、現実の平面に身を置きながら、その因果性に巻きこまれることのない「超越的な」を本質を保存し、その実現のために全く初めから己れを起点として因果関係を開始できることだから。⑤抑圧的な道徳主義である。社会的法や道徳は、存在法則としてでなく、それを「超越」した道徳法則として、義務として、捕らえられ、その実現のためには、存在法則をどこかで歪め、現にあるあり方を抑圧しなくてはならない、と考えられるから。

だが、超越主義には、様々なヴァリエーションがある。例えば、アリストテレスは、イデア論を批判して、現実の個物は或る完成状態の可能態であるとし、子供は大人の可能態であり、子供には大人の状態が可能的に能力として宿っており、この能力は、子供をして大人にさせる原因として働く、と考える。だが、子供に宿るとされるこの可能性Ⅱ能力は、それ

自身は何物にも規定されずに現実の事物に働きかける「超越項」としての資格を何等失っていない。その点で、可能態論は超越主義から逃れえていない。

ドゥルーズは、スピノザが、この超越主義を可能な限り批判し、それから離脱しようとした、と主張する。それを具体的に以下で見ていこう。

二 スピノザ対ライプニッツ

『表現』第十六章においてドゥルーズは、心身問題に関して、デカルトの心身の相互作用論・マールブランシュの機会原因論・ライプニッツの予定調和論の三者と、スピノザの平行論との、違いについて述べる。一見、デカルトとそれ以外の者達との間の違いの方が大きいように見えるが、実はそうでない。デカルト達の理論に共通しているのは、「意識において能動（action）であるのは、身体において受動（passion）であり、意識において受動であるものは、身体において能動である」とする原理であり、この原理は、ライプニッツの予定調和論においても、意識と身体の間に観念的作用を考えることで、維持されている。⁽⁴⁾つまり、我々が手を上げようと決

心して手を上げるとき、意識でのその決心は能動であり、身体における筋肉などの動きは受動である。逆に、我々が後ろから突然殴られたとき、不意打ちを食らって混乱している意識の状態は受動であり、身体における状態は能動である。⁽⁵⁾ドゥルーズによれば、この原理は、精神が物質に対して優越し、超越することを目指しており、存在を支配する道德的目的を立てようとする隠れた意図に支えられている。何故なら、その原理に立つて身体に対する精神の力について語るとき、我々は、精神がその優越した本性によって、自分自身が従っている法則によって、身体を従わせなくてはならない、と言おうとしているからだ。また、身体の力を、精神の持つ義務を実現する力、あるいは、精神をその義務から逸らす力として考えてしまうからだ。その意味で、この原理は「道德的」であり、プラトン主義やキリスト教的伝統の支配下にある。

それに対して、スピノザの平行論は、そのような原理を転倒させ、「意識において能動であるものは、身体においても能動であり、意識において受動であるものは、身体においても受動である」とする原理を立てる。この原理は、精神つまり意識が、存在とは別の道德的本質を所有し、その実現のために上から身体を支配するという図式を壊し、能動と受動の

概念そのものを変えてしまう。その意味で、この原理は「道徳的」でなく、スピノザの世界は、善・悪の彼岸にある。しかし、だからと言って、スピノザの世界において、無秩序や放縦が横行する訳ではない。我々には、固有の「倫理的」な勤めが課せられる。道徳的な善・悪の対立に替わって、倫理的な差異が置かれる。超越主義的な観念論は、人間としての義務を実現する場合を善、背いた場合を悪とする。社会的義務をどうしても守らない悪人や異常者は、どんなに強力に見えても、不完全だと見なされる。つまり、あるべきだとされるあり方以外のどんなあり方も負の価値を与えられる。逆に、倫理的原理は、現にあるいかなるあり方も、それなりに完全であると考える。悪人には悪人なりの固有の本質があり、彼がこの本質をより強度に実現しようと努力するほど、彼は倫理的に良しとされる。あるべきあり方は、多様であり、それは決して社会道徳に限定されない。我々が現に持つその積極性をより完全に高めることが我々の倫理的な勤めである。

ここで重要なのは、スピノザが観念論を批判しながらも、観念論が持っていた長所を保存する独特な仕方である。観念論は、人間の自由や道徳を基礎付けること、実在を説明するための理論的存在に、固有の存在を与えること、単に機械的

でない現象を十全に説明すること、という諸課題を担ってきた訳であり、この仕事は当然引き継がなくてはならない。しかし、スピノザの引き継ぎ方は、全く弁証法的でない特異なものなのだ。

さて、このような原理の違いは、彼らの哲学体系全体の違いとなつて現れる。『表現』第十四章によると、スピノザとライプニッツは、デカルトによる哲学的革命の積極性を保存しつつ、デカルトによつて切り捨てられたものを復活させようとする。デカルトは、機械論的科学の企てを極限まで推し進め、自然からあらゆる隠れた力・実体形相を除去する。それに対して、スピノザもライプニッツも、物的世界の事象を説明するためには、デカルト的な機械論では十分ではないと考える。何故なら、運動と形態だけによつては、個物の特異な統一を説明できないからだ。そこで、彼等二人は、機械論を力動論の方へ乗り越え、諸力の相互関係を考える⁶。しかも力動論さえも、本質についての形而上学の方へ乗り越える。個物の特異な統一は、一つの本質によつてこそ、十分に基礎付けられる。ライプニッツによれば、いかなる事物も、それが個物としての統一をしっかりと持っている限り、一つの本質を持つ。この本質は、人間が事物について考え出した思考の

産物ではなく、神の内にあり、その意味でイデアのように存在する。のみならず、この本質は或る力を持つ。⁽⁷⁾『表現』第十二・十四章及び結論部によるとスピノザは、これとよく似た理論を、『エチカ』で展開している。しかし、ライブニッツとスピノザとは、本質と力についての考え方が微妙に異なる。前者においては、本質は己れを現実化する傾向を持つ（人の本質は、物的質料に働きかけてそれを有機化し、人たらしめようとする）。後者においては、本質はそのような傾向を持たず、現実の質料に働きかける力を持たない。本質がそのような傾向を持つと考えるとき、我々は、本質は己れにおいて何かを欠いていて、その欠如を取り返すために己れを現実化しようとするのだ、と考えている。この考えは、必然的に、本質を目的原因として考えてしまう。何故なら、本質が完全に実現した状態（完全に成長した人）こそ、あるべき自足したあり方であって、そこにまで至らない現実の状態（胚や子供）を、その完成状態へ導かなくてはならない、と考えるに等しいからだ。それによって、ライブニッツは超越主義に陥ってしまう訳だ。

では、スピノザは本質と力についてどう考えたのか。『表現』第十五章によると、『エチカ』において、自然には三つ

の秩序がある。第一に、現実的な事物の部分と、それらの間の相互作用の秩序。第二に、それら部分の間の「運動と静止」の関係の秩序、第三に、事物に固有の本質の秩序、である。さて、①本質は、或る関係の内では己れを表現し、その関係に対応する。②現実の諸部分は、全く機械的に決定されているが、外からの、あるいは内での因果作用によって、諸部分の間にたまたま、或る関係が設定されると、その関係に対応する一つの本質がそこに実現する。そして、外からの因果作用によって、諸部分間の関係が破壊されるなら、その本質は実現を止めて神の内に潜在的に存在するに留まる。③しかし、或る関係の破壊は、別の関係の設定に他ならず、この別の関係に対応する別の本質の実現である。また、或る関係は、他の関係と共に同じ諸部分の間に同時に設定され合うことも可能である。④本質とそれに対応する関係の実現には、様々な度合がある。それがより強度に実現されるにつれて、個体は、より強くなり、より自由になる。

例えば、一つの石が個体だと言えるのは、その部分間の空間的關係が、その石をどう動かしても、熱しても維持されているからである。この石には石の本質が実現されている。この石に外から大きな圧力をかけて粉々にするなら、それら部

分の間の関係は破壊され、実現していた本質も実現を止めて潜在的な次元に引込む。逆に、部分間に或る特別な関係があるとき実現されるなら、例えば、水素と酸素を混ぜ合わせ、そこに点火し、爆発的に水に変えるとき、水素原子二つと酸素原子との特別な結合が生じ、関係が構成されると同時に、水の本質がそこに実現する。そして、いかなる事物も外から作用を破るが、この作用は、その事物の部分間の関係の維持に都合が悪い場合と善い場合がある。例えば、或る人が飲みこんだ毒がその人の血液を分解するとき、毒を構成する関係は、その人の身体の関係を破壊するよう働くのであって、この場合、その人にとって毒から受ける変様は、悲しみの「受動」である。逆に、薬が飲みこまれて、その人の身体に固有の関係が回復されると、薬から受ける変様は、喜びの「受動」である。最後に、その人の固有の本質の実現そのものであるような変様が身体に生じるなら、それは「能動」である。

このような、本質と、力についての考え方は、どんな意義を持つのか。以下でドゥルーズ自身の考えを追うことにしよう。

三 ドゥルーズの思想

ドゥルーズの考えでは、観念論が、既に構成され個体化された個物から出発して、その部分間の関係や他の個物との類似性を抽出するとき、抽出されたものは、「可能的なもの *le possible*」のレベルでのみ捕らえられており、より深い「潜在的なもの *le virtuel*」のレベルでは捕らえられていない。よって抽出物は、「現実的なもの」*l'actuel*」の持つ力を密輸入され、「現実的なもの」を支配する力を持つてしまう。そこに観念論の誤りがある。もし、「潜在的なもの」を「現実的なもの」から徹底して区別するなら、前者は後者が持つ力を失う代償に、それ固有の力能を持つことになる。「潜在的なもの」自身の産出過程、固有の因果性がある⁽⁸⁾。

そもそも、科学に限らず学問一般は、現実の事物を理論的に分解して単純要素を見出した後に、それを理論的に再構成して、実在物に対応するモデルという理論的構築物を提示する。そして、アルチュセールが強調したように、理論的再構成は、現実の歴史的発生とは、全く別の過程であり、その両者の混同は、ヘーゲルの観念論を生む⁽⁹⁾。

例えば、幾何学的形態である円を考察するとき、明晰判明に表象できるこの形態や、「丸い」等の特性にのみ注目し、そこから、「或る点から等距離にある点の集合」などとして、円を定義をするなら、円の本質あるいは形相を、「可能的なもの」のレベルで捕らえるに留まる。しかし、より深い「潜在的なもの」のレベルで捕らえるなら、円についての微分方程式を考える所に進まなくてはならない。前者の場合では、円の形相（本質）は、意識の中にのみ存在するものとみなされるし、我々が紙に円を描く際、意識の中に既に完成している形相を観想しつつ、我々は手を動かす、と考えられる。意識内の観念が、身体を通じて、現実の円として実現する訳で、この観念は、現実の円の目的原因として働いている。この観念こそ、「潜在的なもの」と「現実的なもの」との不純な混合物である、「可能的なもの」である。しかし、逆に、後者の場合では、微分方程式で表現される関係は、我々の意識表象を遥かに超えており、意識に還元されない或る存在を与える必要が生じる。しかも、ドゥルーズによると、「潜在的なもの」の場で、この関係が漸進的に構成されるプロセスが考えられる。先ず、 dx と dy とを別々に指定し、次にその二つを相互規定させて、 $dy/dx = -x/y$ とこう或る値を決

定させる、つまり微分方程式を立てる。そして最後に、これを積分して、関数 $y = \frac{1}{2}x^2 + c$ を得る。cに或る具体的な値を代入するなら、座標軸上の或る位置に円が局在化される。この漸進的過程は、円の形相そのものの構成過程である。そして、紙の上に円を描く現実的な過程（水平的因果性）と、形相の構成（垂直的因果性）とは、一対一対応はしないが、或る意味では厳密に対応し、平行している。この場合、潜在的なものは、現実的なものに働きかけるどんな力も持たない。また、潜在的なものは、現実的なものが構成される以前に既に構成されていると考えるべきでなく、円が描かれるとき、それと同時に、円の形相も、同時に垂直的因果性によってその都度産出されると考えるべきであろう。こうして、潜在的なものは、現実的なものの目的原因ではなくなり、事物を形相という側面から見たものに過ぎなくなる。

スピノザにおいて、関係や本質こそ、「潜在的なもの」であり、神の本質から他の諸本質を、或る本質からそれに対応する諸関係を産出する過程（垂直的因果性）がある。それは、現実的な事物の時間的継起（水平的因果性）とは、区別される。両者の混同こそ、観念論の温床である。『表現』結論部によると、スピノザの第一の平行論（この二種の因果過程が厳

密に平行するが、一対一対応する訳ではない⁽¹¹⁾の意義は、ここにある。成程、垂直的因果性は、我々によつて考えられるに過ぎず、我々の意識の内でのみ、実在できるように見える。だが、スピノザにおいて、垂直的因果性について我々が現に考えるとき、我々の意識の内では印象や観念が連合する過程は、水平的因果性に他ならず、あくまで現実的な過程である。現実的な意識と潜在的な本質とを混同することが、観念論の温床である。スピノザの第二の平行論（同じ垂直的因果性に、物質と意識という異なる領域での水平的因果性が対応するからこそ、物質と意識とが平行する。言い換えれば、本質とは、物質によつても意識によつても表現されるがそのどちらとも区別される第三項である⁽¹²⁾）の意義は、ここにある。

そして、『表現』第八・十章によると、デカルトは「明晰判明なもの」の次元に留まったのに対し、スピノザはより深い「十全なもの」＝潜在的本質の次元に溯った。この本質は、単に事物の諸特性の内的統一であるのに留まらず、それらを産み出す発生的な根拠である。ここで、「産み出す」とは、水平的因果性に関わるのではなく、垂直的因果性に関わる。或る事物の諸特性がいくつか与えられているとき、それを分析して、本質へ溯行できるなら、今度は逆に、この本質から

出発して、与えられていない特性を理論的に産出できる。そして、また、本質は、諸々の個物の内的統一の間に連続的な移行があることや、しかもそれぞれの内的統一には、他に還元されない特異性があることをも説明する。例えば、楕円・放物線・双曲線という円錐曲線は、その形態を考察されるだけでは、互いに異なる種に属するものとして区別されるに留まるが、それら曲線の点の間の関係の分析から、或る一般的な二次方程式を得るなら、その係数の与え方の違いから、異なる円錐曲線が生じることが分かる。それによつて、異種の曲線同士の間での連続性と各曲線の特異性が見出される。また、この方程式から、円錐曲線ではない図形すら導き出せる⁽¹³⁾。

このような「潜在的なもの」は、フランス構造主義における「深層の普遍的構造」に当たるものである。それゆえ、ドゥルーズにとり、事物の言わば形相面についての反省を通じて観念論から離脱することは、事物について極度に論理的に思考することと矛盾しない。

ところでドゥルーズは、その処女作であるヒューム論で、関係の本性についての次のような考え方を既に展開していた⁽¹⁴⁾。それは、「現実の諸項の間に関係を設定することの原因は、項や関係の本性ではなく、諸項に外的なものだ」というもの

だ。觀念論は、實在する諸項の間の關係の恒常性、例えば、Aの次には必ずBが繼起することの原因として、現実の平面での水平的因果性に付け加えて、超越的な項を導入する。我々は、子供が必ず大人になるのは、子供の身体を上から支配する可能的本質の内に大人が含まれており、それが子供の身体に作用する、と考えたり、一足す一の次に必ず二が来るのは、「一足す二」の概念の内に「二」の概念がア・プリオリに含まれており、前者の概念が高みから規則として我々の思考を拘束し、「二」へと導くからだ、と考えてしまうこともある。どの場合も、二つの項の關係の恒常性の原因として超越的な項を指定し、二つの項のどちらかに内在化させているのである。このような超越項の導入によって、關係の恒常性は、かつて恒常的だった、ということに留まらず、未来の全時間において恒常的であることが保証され、その必然性が基礎付けられる。かくして予測が可能となり、学問は確固としたものになる訳だ。しかし、ドゥルーズによれば、關係と關係項とは、潜在的な次元で考察される場合と、現実的な次元で実現される場合とを区別しなくてはならない。前者の場合、關係を産出する法則が關係項の本質そのものを規定する、と言えるし、この法則を關係項の内に内在化させるなら、關係

項は他の項との間の關係を自ら産み出す力を持つ、とも言える。しかし、後者の場合、現実の諸項を關係づけるのは、諸項を外から因果的に規定する力である。觀念論は、この二つの場合を混同しているのである。

ドゥルーズによると、關係の設定のあらゆる原因は、あくまで現実の平面における諸事物の配置と、その間に配分されたポテンシャル・エネルギーである。⁽¹⁵⁾そして、現実の事象は、諸分子が乱雑にブラウン運動している訳でなく、或る個体を常に構成している。成程、諸分子の動きは機械的な法則によって決定されているものの、そのことは、それら諸分子が結合して或る個体が絶えず再生産されることが矛盾しない。諸事物の間に或る關係がたまたま、設定されると、その關係が己れを再生産する傾向が實際に生じるからだ。例えば、波の一見乱雑な動きから、渦巻きという束の間の物ながら、一定の形態を持つ個体が生じる。⁽¹⁶⁾それは、台風のようにかなり持続し再生産される傾向を持ちうる。この傾向は、その必然性を完全には基礎付けられず、根本的に偶然性を孕む。スピノザはこの傾向をコナトゥスと呼び、実現された限りでの本質だと見なした。

ライブニッツにおいて、コナトゥスとは、自然学的には、

物体の運動への傾向であり、計而上学的には、本質の現実化への傾向である。逆にスピノザにおいては、物体に自発的な力などなく、本質は存在への傾向を持たない。後者においてコナトウスとは、或る事物がいったん現実存在するとその存在に固執する努力であるに過ぎず、自然学的にもそれは、事物の絶えず更新される諸部分の間に同じ「運動と静止の関係」を維持する努力である。⁽¹⁷⁾スピノザにおいて現実的な事物の持つ力とは、それを構成する関係（付けの運動）が再生産される傾向そのものであり、「隠れた力」でも、我々の身体感覚の投影でもない、真の力である。

従って、事物の形相的側面についての観念論的捕らえ方を脱することは、質料的側面についての観念論的捕らえ方を脱するための契機となる（超越主義的観念論では、力とは、超越的なものが現実の世界に作用する力か、あるいはそれに抵抗する力としてしか考えられない）。

おわりに

ドゥルーズは、事物の形相と質料の両面において、観念論からの脱却を図る。形相の側面では、意識によって明晰判明

に表象される可能的形態なり質なりを超えて、純粹に思考することしかできない潜在的関係の次元へ至る。質料の側面では、意図的行動という主体的力の彼方に、非主体的な力を見出す。それによって彼は、現代のフランス構造主義と唯物論とを和解させることができる。ドゥルーズの考えでは、例えば、社会関係について構造主義によって分析される深層構造は、決して現実の我々を「支配」している訳ではない。我々は社会的歴史的な力によってのみ因果的に規定されている。しかし、この水平的因果性は、深層構造＝関係を我々の間に「設定」する。それと共に、潜在的なレベルで関係から産出できる諸特性を、我々は現実帯びるようになる。我々の間に設定された関係は、我々を性質付ける。我々の内にその関係は内面化されるが、それによって初めて我々は個体化され、主体として生成するのである。⁽¹⁸⁾

注

以下において、ドゥルーズの著作に付した頁付けは、次からのものである。『スピノザと表現の問題』（一九九一、法政大学出版局）・『Difference et répétition』P. U. F. 1968（『差異と

反復」未訳）・『意味の論理学』（一九八七、法政大学出版局）・『ヒュームあるいは人間の自然―経験論と主体性』（一九八〇、朝日出版社）。

(1) ドゥルーズ・ガタリ『アンチ・オイディプス』（一九八六、河出書房新社）三六頁

(2) 『意味の論理学』四頁・付論 I 参照。

(3) 超越主義は、このような「媒介」を常に必要とする。

『スピノザと表現の問題』一七三頁、『差異と反復』二二四～二二五頁・二八一頁、参照。

(4) 『世界の名著二五 スピノザ・ライプニッツ』四五〇頁参照。

(5) 『スピノザと表現の問題』三四九頁、ライプニッツ『形而上学序説』（岩波文庫）三一二～三二三頁・四〇一～四〇二頁、参照。

(6) 例えば、シャボン玉が球形になるのは、表面エネルギー最小の条件に従うからであり、これは、諸力の釣り合いと等価である。高木隆司『かたちの探求』（一九七八、ダイヤモンド社）十一～二五頁参照。

(7) 『世界の名著二五 スピノザ・ライプニッツ』四九五～四九九頁参照。

(8) 『差異と反復』二六九～二八五頁参照。

(9) アルチュセール他『資本論を読む』（一九八九、合同出版）五一頁・五八～六一頁・一六〇～一六一頁参照。

(10) 『差異と反復』二二一～二二四頁参照。

(11) 『スピノザと表現の問題』三四七頁。

(12) 同三五六頁。

(13) 山田浩『代数曲線のはなし』（日本評論社）参照。ドゥルーズは、スピノザの発想を持っていた生物学者として、ジェフロア・サンティレールを挙げている（『スピノザと表現の問題』四二〇頁）。

(14) 『ヒュームあるいは人間の自然―経験論と主体性』一七六～一八九頁・一九六頁・二〇二～二〇四頁、参照。

(15) 『差異と反復』三一六～三二七頁参照。

(16) 『かたちの探求』七七～七九頁参照。

(17) 『スピノザと表現の問題』二二六頁。

(18) ドゥルーズ『構造主義はなぜそう呼ばれるのか』（『シャトレ哲学史Ⅷ・二十世紀の哲学』白水社「三三九頁以下」）参照。

（かわつ くనికి 名古屋大学・哲学）

■書評

ベラー・他著 島菌・中村訳

『心の習慣』

仲島 陽一

アメリカでベストセラーになった本書は、邦訳を機に日本でもいくつかの書評が出た。ここでは筆者の観点からの紹介と感想だけを記そう。本書の主題の「個人主義」がその中心である。

アメリカ人の心性を個人主義としてとらえるのは正統的であるが、筆者はそれと距離をおき、特にその負の側面を直視しようとしている。これが本書の第一の意義である。

筆者はアメリカの心性を、「聖書の伝統」「共和主義の伝統」「功利的個人主義」「表現的個人主義」の四類型で整理するが、これらを代表する建国期の偉人が、ウィンスロップ、ジェファソン、フランクリン、ホイットマンらである。筆者によれば個人主義はこの四

つすべてに含まれているが、後の二つは、個人だけが確固たる実在で社会は派生的・人間的な構成物でしかない、という「存在論的個人主義」に基づいており、現代アメリカにおけるその病弊が診断される。「エグゼクティヴ」をめざして二四時間戦うビジネスマンが功利的個人主義の、さまざまな趣味——音楽やスポーツや車やファッションやセックスや——の世界に閉じこもる「おたく」族が表現的個人主義の、いわば俗流版と考えるならば、アメリカだけの問題でないことが了解されよう。

「存在論的個人主義」は、個の独立と防衛という觀念に強迫的にとらわれているので、他者との人間的な交わりが困難になる。たとえば（佐藤和夫氏の言葉を借りれば）「親密圏」においてさえ人は孤立化し、夫婦と家族の崩壊が生じやすい。「愛」は、多くの個人主義者にとつてもなお理想であるが、自己否定的側面はもとより、自他の画然たる区別を越える発想が拒絶されるので、一つのジレンマになるという。そしてうまくいっているときでさえ、家族の機能は、個人と公共機能をつなぐことではなく、個人をできる限りそこから遠ざけることになっている。

職業労働についてはどうか。聖書のまたは共和主義の伝統と深く結び付いていた「コーリング」は、個人を大きな共同体に、共同の利益への貢献に結び付けるものであり、そのためにこそ個人の活動と生活に具体的理想を与えるものであった。いまやそれは私的なものとなり、「ジョブ」として、金を稼いで生活を立てるための手段に過ぎないか、「キャリア」として、共同体の中に根付くよりも「出世して遠くへ行く」結果をもたらす。

そこで仕事の外に生きがいを求めようとする人々は、「ライフスタイルの飛び地」をつくるが、それは本当の共同体ではなく、余暇や消費をめぐるもので、断片的であり、「類似した者どうしのナルシズム」にとどまる。著者は言う。「私達は働き、愛し、学びながら他者と向き合い、他者と行動をとるにすることで、自分が誰であるかを知る。」現代アメリカ人が、職場、家庭、学校、そして教会や国家でもこの機会を喪っているならば、どこでそれを得ようとするのか。どうやら「セラピー」のようである。セラピーの理想は、個人が「自分はこれでいい」という自己是認を与えられるように援助することであるという。「それでいいんだよ」と言ってもら

いたいという意識がセラピーの前提であるが、同時に、まさに他者なしでは自己は認できないということが、癒すべき病氣だとされている。セラピーを単なる医療行為としてだけでなく、現代の思考様式・文化であり、「次第にあらゆる人間関係の範型になろうとしている」と著者はみる。この視点は興味深いものであり、本書の第二の意義と言えるのではなからうか。セラピーは共和国の公民的対話よりも市場経済の選択に近く、近代自由主義の美德と同型である。「与える」「得る」というその社会のモデルを個人生活へ導入するものであり、「心理学的な洗練は道徳的な貧困化と引き換えに得られたものではないか」、「完全な心理学的契約主義の行き着く先は絶対的に空虚な人間関係の概念である」、と著者の批判は鋭い。わが国における新興宗教や「自己啓発セミナー」の流行との異同なども合わせて考えてみたいところである。

しかし筆者の主張は、個人主義の単純な否定ではない。「社会の悪」と戦っては独り夕陽に向かつて去る、カウボーイ的、ハードボイルド探偵的「一匹狼」ではなく、個人の尊厳と自立とは、共同体や伝統の中で可能であると説く。共感できる主張であり、本書の第三の意義であらう。著者はそのために聖書的・共和主義的伝統の——単純な復活ではなく——現代的な生かし直しを唱える。これは伝統の異なる日本で借用できるものではない。もっとも著者の言う「コーリング」の再評価などは、たとえばわが国での芝田進午氏の仕事などにも通ずるところがあり、有益な提言と思われる。職業労働を単なる金儲けや出世の手段としてではなく、公共の利益への貢献という観点から位置付けることによって、私達は自己確証の喜びと社会的承認の喜びと（『ミル評注』）を得られるであらうからである。またそれは著者が言うように、社会的エコロジにつながることも、労働の競争的性格を弱めることで家族生活にもよい影響を及ぼすであらうからである。

著者はまず自らが、自国民の感じ方と考え方をよりよく知り、同胞市民との共同の対話へと貢献する「公共哲学」をめざすことで、この課題を実践しようとしている。そのため、必ずしも正統的ではないがそれぞれよい意味において、哲学的、社会学的、心理学的な研究の刺激的なアプローチとなっており、それが本書の第四の意義と言える。

対象が白人の中産階級に絞られていること、「心の習慣」と社会的現実との関連の考察が通念的水準を越えていないこと（著者は「社会実在論」に依拠すると言うが、本書そのものは言わば方法論的個人主義の性格が強い）、提起されている処方がいささか抽象的（とりわけ制度論的に）であること、などいくつかの制約や限界を挙げることは困難ではあるまい。もっとも個人と社会が互いにその発達を助けるような関係性を、日本の家族、学校、労組、政党、市民団体、地域社会、国家などに即して考えていくことは、私達自身の課題であらう。なるべくしてベストセラーになった本であり、学ぶところの多い書であることはまちがいない。

（みすず書房、定価三九一四円）
（なかじま よういち 学習院大学・倫理学）

■書評

E・バダンテール著 鈴木晶訳

『母性という神話』

山口 京子

いつ、どこで、だれが、何のために、そのあり方を作ったのか。わたしが決めたのではないあり方でわたしが縛られるのは不本意だ。そう女性が語り始めて久しい。顕在的にも潜在的にも、自分は何者なのか—何者とされてきたのか—何者として生きたいのか—の答えを求めているようにみえる。その背景には、人間が生き難い社会—人間になることも人間であることも—があるだろう。経済の目的と労働のあり方はだれをも生き苦しくさせる。

女性が働く意思と場所を広げながらも、男は仕事、女は家庭という役割分担を廃止できておらず、子どもを女におしつけた男の働き方が一人前である社会では、女の人生はどっちにしろんでも一人前にはなれない。その

性別役割分担の理由に利用される「女性」母性本能「育児天職」論に異議を申し立て、それは後天的文化的世界の産物であると説明し、「母性は本能ではない」と著者は答える。母性本能の存在を前提にした本が多く、「母性とは何か」の問いについても明快な返事をみいだせていないなか、母性のこのような発見、歴史の読み解きは貴重である。

本書は、母性神話の作られた過程をフランスの一七世紀以降の社会を通して描いており、三部から構成される。一部では母性愛が育ちえない時代の状況と原因が語られる。二部では、子どもを生き延びさせることが国家の至上命令となったとき、女性に母親の義務が課せられていくのを見る。母親の地位を向上させ、母親であることに固い込み、拒む女性が非難される。三部になると、良い母親が女の本性とされるまでにエスカレートする論調を追うが、一九六〇年以降の女性たちが、男根

中心主義の精神分析を批判し、男性と女性の垣根を取り払っていくのを伝える。子どもを育てることが女性の本能でも強制でもなくなつたとき、それはどうなるのか。著者は母性が女性を抑圧するのではないやり方を提起する。男性を引き込むのだ。母性の内容（愛と

自己犠牲）は、母と子の日常的なふれあいの中で育まれるもので、父と子の間に育つなら女性愛と呼ばれるだろう」と。それは性別役割分担の根拠を否定することで、資本がトクをし、男がラクをするシステムにメスを入れ、男を人間の側にひきもどす戦略といつてよい。著者は、女性史と思想史の両面から今日の問題に取り組み、パリで教鞭をとっている。その最初の成果が一九八〇年に出版されたこの本である。

十年を経た現在、本能という言葉は死語化しつつある。本能と呼ばれたものも後天的学習なくしてあらわれないことが解ってきたからだ。人間のもつ潜勢的諸力の何をどう発現するかは、その社会や個人が何を願うのかによるのかもしれない。抑圧でない家族の関係のあり方への模索が始まっている。子どもとは何者なのかという問いもそこから拓けていくだろう。

母性をこのようなものとして知ることは、両性にとつてよく生きることの大きな手がかりになるといえる。偏見は百害あって、自由を拒むだろうから。

（筑摩書房 二六八〇円）
（やまぐち きょうこ）女性労働問題研究会

■書評

ヘーゲル論理学研究会編

『ヘーゲル大論理学 概念論の研究』

岩佐 茂

見田石介先生の『ヘーゲル大論理学研究』

(全三巻、大月書店) が刊行されたのは一〇年ほど前のことであった。それは、先生が生前一九七三年から七五年にかけて大阪の「大論理学研究会」でおこなった講義のテープをおこし、編集したものであるが、「本質論」のところで途絶えており、未完であった。先生がその時点で急逝されたためとはいえ、見田先生の「概念論」研究を期待していた私たちヘーゲル研究者にとって、とても残念なことであった。

それだけに、このたび、『ヘーゲル大論理学研究』の編集に携わった方々が中心になって、『ヘーゲル大論理学 概念論の研究』を出版されたことは本当に喜ばしいことである

と思う。そのまとめ役の一人であった鈴木茂氏が本書の出版前に急逝されたことは、本書を手にしてあらためて哀惜の念を感じざるをえないが、出版までこぎつけた関係者のご尽力になによりも敬意を表したい。この書は、その出版の経緯からみても、内容からみても、『ヘーゲル大論理学研究』の「統編」にあたるものといえるであろう。本書の本文が「分析を基礎においた弁証法的方法」という見田先生の立場で結ばれているのも、本書の性格からして当然といえよう。

唯物論の立場からなされたヘーゲルの「論理学」研究は、それほど多くはない。そのうちのひとつで、多くの「論理学」研究者に読まれてきた故松村一人氏の『ヘーゲル論理学』も、「有論」を中心としたものであった。「概念論」全体を内在的に研究したものは、レーニンの『哲学ノート』における注釈をのぞけば、ほとんどないといつてよい状況である。もちろん、本書の編集委員会のメンバーが中心となつてつくった『ヘーゲル論理学入門』があるが、それは「小論理学」のテキストを素材としたものである。それだけに、『大論理学』の「概念論」の論理に内在して、難解なヘーゲルの論理をわかり易く解きほぐした

本書のような研究・解説書は、久しく期待されていたのである。

ところで、ヘーゲルの『大論理学』のなかでも、「概念論」は難解であるだけではなく、大変面白い部分でもある。その理由の一つには、「概念論」では、伝統的な形式論理学でおなじみの概念、判断、推理が取り上げられ、ヘーゲル的に改作される一方、目的、生命、実践などといった、ふつう論理学では論じられない諸カテゴリーが論じられていることがある。もう一つの理由は、「概念論」は精神の内的本性である理念や概念の論理が展開され、ヘーゲル哲学の核心部分が叙述されていることである。面白いが、難解な「概念論」を理解することは大変である。本書はそのための良き手引き書になるものと思われる。

本書は、「概念論」のテキストに即して展開されている。まず、その前提として、ヘーゲルの「論理学」における「概念論」の位置づけが明確にされ、「本質論」から「概念論」への移行が説明されたあと、主観性、客観性、理念の各篇について、各章、各項目ごとに丁寧な解説がおこなわれている。そのほか、さらに、「ヘーゲル判断論における事実と価値」、「価値形態論と推理論」、「労働のもつ人間的

意味」、「ヘーゲル生命論と初期マルクス」、

「高等数学における分析的認識と総合的認識」、「マルクスの経済学の方法」といった五つの「補論」がついている。それぞれにヘーゲルの「概念論」とかかわる問題を取り上げているだけに興味深いものがあるが、残念ながら、ここではそれらに言及する余裕はない。関心あるテーマについては一読されることをすすめたい。

本書は、一四名の執筆者による集团的労作であるが、内容的にはよく統一されている。基本的な視点は、通常主観的思惟の論理とみなされる概念を「事物の発展と事物の有機的統一」をとらえる論理として理解し、「概念論」では主にその論理が展開されているとみなしていることである。その視点から、各執筆者は、「概念論」全体の構成や、個々のカテゴリーの体系的な位置づけを明確にすること、つねに心を砕いているように思われる。例えば、生命、あるいは機械的關係や化学的關係がなぜ「論理学」で論じられる必要があるのかは、わかるようでなかなかわからない問題であると思うが、その理由が「生命が論理学の対象となる理由」や「客観性の区分もつ意味」といった小見出しのところで説明

されている。

同時に、本書の特徴は、諸カテゴリーの体系的意義を明確にしているだけではなく、個々のカテゴリーの論理的展開を丁寧に追っていることである。その全部を紹介することはとうていできないので、わたくしの関心にそって一、二紹介することにした。

「概念」の章では、判断や推理の形態論が興味深い。そこでは、ヘーゲルが「認識の歩み」と「存在の歩み」とを同一視して展開しているのにたいして、両者が関連していることに現実的根拠があることを見据えながらも、ヘーゲルが同一視したもつれを解きほぐして、難解な判断や推理の形態論が解り易く説明されているからである。

また、「客観性」の章では、客観における「相互作用」の異なった形態として、機械的關係、化学的關係、目的が論じられているが、目的のカテゴリーについて一言。ヘーゲルが「論理学」で目的のカテゴリーを論じたことをレーニンが高く評価したが、ヘーゲルの叙述そのものは解りにくい面がある。その点、本書では、目的のカテゴリーとその諸契機について、解り易くまとまった説明が与えられているので便利である。

最後に、一点だけ、ないものねだりをしておきたい。わたくし自身は、ヘーゲルの「概念論」では、「概念把握 (Begriffen)」の概念 (ヘーゲル自身、この用語を頻繁に用いているわけではないが) にも関心をもっているが、もしわたくしの読み落としがないとすれば、本書では、「認識の理念」以外では、この概念にほとんど言及されていないように思われた。『経・哲手稿』における近代市民社会を「概念把握する」というマルクスの言葉を引き合いに出すまでもなく、「認識の歩み」という観点から取り上げて展開してほしい概念である。

いずれにしても、本書は、ヘーゲル「論理学」の研究者にとっても、これからそれを学ぼうとする者にとっても必読の書であるといえるであろう。

(大月書店 五〇〇〇円)
(いわさしげる 一橋大学・哲学)

●短評

リチャード・セネット著

北山克彦・高階悟訳

『公共性の喪失』

昌文社 五〇六頁 五八〇〇円

「おおよっぱに見て、アウグストゥス死後のローマ社会の危機と、現在の生活の間には、似たところがある。それは、公的な生活と私的な生活の均衡にかかわる……」。

気鋭の社会学者セネットの野心的な大作はこのような暗示的な言葉から始まる。セネットは現代社会の特徴をナルシズムの自家中毒、「親密さ」の専制……といった観点からとらえ、そうした公共性の衰弱が、そもそも「公共性」の成立期と考えられる一八世紀においてすでに逆説的にもはらまれていたことを見届けた上で、その後の過程を綿密に跡づける。全体としてベシミスティックな病巣診断という趣であるが、社会史的手法による夥しい風俗や事象に裏付けられた論理は検討に値する。一章「公共性の問題」。二章「旧制度の『公』の世界」。三章「一九世紀における公的生活の動揺」。四章「親密な社会」。

●短評

シュヴァルベルク著 石井正人訳

『子どもたちは泣いたか』

——ナチズムと医学——

大月書店 二二七頁 二二〇〇円

組織的な狂気。日常化された残虐……。これまでも、数百万人へのぼるユダヤ人虐殺については、繰り返し伝えられてきた。しかし「数百万人」というのは、すでに人間の表象能力を超えた抽象観念である。ここでとりあげられた事件はハンブルクに近いノイエンガッセン強制収容所での人体実験であるが、「実験動物」とされた幾人もの子どもたちと「実験」を施した科学者たちは、本書ではその顔付きがありありと見える至近距離でとらえられている。「血が下がる」思いをせずには読むことのできないルポルタージュであるが、とくにその加害者たち、「無邪気な」科学者たちの平凡な相貌が印象的である。それが「昔」の「異常」な事件などではないこと、その倒錯したメンタリティが現代まで地続きになっていることを、我々は知るだろう。

一九八八年度アンネ・フランク賞受賞作品。

●短評

杉田 聡著

『人にとってクルマとは何か』

大月書店 二二二頁 一四〇〇円

クルマの持つ反人間的な問題を具体的に取り上げ・告発する地道な運動を長い間続けてきた著者による、「反クルマ大全」とでも呼ぶべき書。クルマがいかに人間の共同性を引き裂き、利己主義の心性を助長するものであるかを、様々な実証的資料とたくましい論理力とをもって立証する。交通事故死・障害、排気ガス、騒音、振動、低周波振動、車粉、それにともなう社会的費用。そして何よりも、それがもたらす道徳的退廃……。

著者のまなざしは一貫して幼児、老人、障害者などの社会的弱者に注がれ、その視点から見える風景の倒錯をあくことなく告発する。トヨタ、ニッサンにとって恐るべき書物であるというにとどまらず、多くの人々に対する鋭い問題提起である。解決の方法を探る後半部は、社会的物質循環全体に関わる文明論をなしている。広く読まれてほしい力作である。

●短評

J・ブラシケ編著 酒井昌美監訳

『ドイツにおける周辺資本主義論争』

啓文社 三一九頁 三九〇〇円

本学会会員の照井日出喜氏が訳者に加わっている本書は、重厚な経済学の書であるが、「湾岸戦争を十年前に予測」と帯にあるように、現代世界をどう把握するかという重要問題に積極的に取り組んでいる。サブタイトルに「世界システム論」とあるが、原題は「世界システム論の展望」であり、ウォーラスティン、フランクらのいわゆる「世界システム論」を検討した書であり、その意味でもヴィヴィッドな問題を提起しているといえる。

著者には前記二者のほかドイツの七人の研究者が加わる。本書は「世界システム論」をめぐる論争の書ともいえるが、社会・経済システムのグローバルな、さらに全面的な変革が求められている現在、本書は重要な論点を提供したといえる。

●短評

ヘーゲル著 加藤尚武・他訳

『懐疑主義と哲学との関係』

未来社 二二六頁 二二六六円

いまごろヘーゲルの論文がなぜ、といふかしがる向きもあるうが、本学会会員の奥谷浩一氏も訳者として参加しているこの著作は、イエーナ期の若きヘーゲルがシェリングとの共同編集で発刊した『哲学批判雑誌』に掲載された三つの論文の翻訳である。そのなかで『信仰と知』『自然法の学的取扱』はすでに訳書があるが、今回訳出されたのは「懐疑主義と哲学との関係」「哲学的批判一般の本質について」「常識は哲学をどのように理解しているか」であり、いずれも一八〇二年に掲載された。ヘーゲルは第一論文において、感覚を絶対化する近代懐疑主義者のシュルツェを批判し、むしろ感覚を批判し、理性に従うピュロンら古代の懐疑主義に着目する。若きヘーゲルに関する研究が国際的に盛んになっている現在、すでにヘーゲル研究者によってこの論文は注目されてきたものである。

●短評

小出昭一郎著

人と思想『ハイゼンベルク』

清水書院 新書 二二七頁 六二〇円

量子力学の創始者のひとりであるハイゼンベルクの評伝。現代物理学の二本柱である相対性理論と量子力学は、二十世紀初頭に登場し、物理学に革命的な変貌をもたらしたばかりでなく、哲学や思想にも多大な影響を与えた。相対性理論がほとんどアインシュタインひとりによって展開されたのに対し、量子力学の確立にはおおくの物理学者が参加したが、その筆頭がハイゼンベルクといえよう。物理学の知識がなくとも、この本の最初で相対性理論や量子力学にいたる物理学の問題点がわかりやすく整理されていて、予備知識が得られる。この本は、しかし、物理学の話ばかりでなく、ナチス支配下のドイツでのハイゼンベルクの生きざまなどもまなましく叙述されていて、自然科学者とその思想の関係について考えさせる本となっている。写真や図も多く、文も簡潔で親しみやすい。

●短評

坂元忠芳著

『対話の教育への誘い』

新日本出版社 一九八頁 一三〇〇円

著者は教育関係の本を多数著してきたが、本書は全体として、「競争の子どもも像から対話する子ども像へ」という意図で編まれたものである。現代の子どもの状況、教育の実践などをゆたかに紹介しながら、とてもわかりやすく展開されている。教師の都合のよい方向へひっぱって行くというのではなく、「子どもをつかむ」ために対話的契機を重視し、子ども自身が自分の力で未来を切り開く力を獲得し、「自由と共同（協同）」の実現を最終目標にしている点など、本学会の教育問題に関心をもっている会員と問題意識を共通にする事柄が多い。哲学的にも興味深いのは、著者が「対話」に関してバフチンを援用しながら、異なる人格のあいだでの「ポリフォニック（多声的）な対話の意味」を強調する点である。

●短評

鮮坂真・上田浩・黒田治夫・釘貫和則・山川学著

『現代日本文化論の研究』

——天皇制イデオロギーと新京都学派——

白石書店 三三二頁 三〇九〇円

この間、天皇の代替わりをめぐって日本の支配層によって天皇制イデオロギーが一段と強化されたが、とくに「新京都学派」の「日本文化論」はそれを補強し天皇制を美化する上で極めて危険な役割を演じた。本書は、関西在住の五人の哲学研究者による、これに對決する意図から行われた共同研究の産物であり、すでに『文化評論』誌上等で発表されてきた一篇の論文（未発表を含む）の集成である。京都国際日本文化研究センター所長の梅原猛（前）、上山春平（現）、桑原武夫、今西錦司らの「日本文化論」の否定面が戦前の西田や和辻のそれにまで遡って包括的に鋭く批判されている。山口昌男の文化人類学的手法による天皇制論や山崎正和、矢野暢らの「世界の中の日本」論の批判も含めて、本書は今日流行のイデオロギー的な「日本文化論」の基本性格を見定める上で格好の書である。

●短評

種村完司・尾関周二・河野勝彦・龜山純生・太田直道著

『豊かな日本』の病理

——生活と文化のフィロソフィー——

青木書店 二〇三頁 二〇六〇円

現代日本は、表層の「豊かさ」にもかかわらず、深層では拜金主義・競争主義・管理主義に駆り立てられ、極めて深刻な病理現象を噴出させている。それはとりわけ「精神的生（き）活」の諸領域に鋭く現われている——著者たちはこうした問題意識のもとに、私的生活・教育的生活・宗教的生活・政治的生活・美的生活といった諸アスペクトに、それぞれ一章をあて、その病理現象を分析する。そして同時にその中に潜在的に蓄積されつつある新しい文明的・文化的な質と、それに基づく新たなライフ・スタイルを掘り起こそうとする。従来より「豊かな日本」の貧しさの社会科学的分析やその物質的生活の貧しさの分析はあったが、その精神的生活の貧しさの総合的分析は新しい試みである。「いじめ」概念を駆使しつつ、著者たちは本当の精神的豊かさとは何かを多面的に追求している。

●短評

海部宣男著

『宇宙のキーワード』

岩波ジュニア新書 二二二頁 六〇〇円

ビッグ・バン、膨張宇宙論、惑星探査、宇宙人との交信の試み、星間物質……などの最近のマスコミをにぎわしている宇宙にかかわる用語のわかりやすい解説書。書名からわかるように、ひとつひとつの項目が独立して読めるようになってはいるが、その配列は、系統的で、全体を通読しやすいようになっている。宇宙人との交信の可能性から始まり、双眼鏡でできる宇宙の観察やさまざまな宇宙の観測、太陽系や恒星の一生、宇宙物質、宇宙の膨張のはなしなどが続き、まったく読みあきることはない。この地球上でもっとも宇宙にくりわしい人間の一人であると思われる著者が若い世代にむけて宇宙を科学的に語った待望の書といえよう。もちろん、ジュニアばかりでなく、全世代のひとつが読め、宇宙のロマンを満喫できる。写真や図も豊富で、理解を助けている。

●短評

渡辺 治著

『企業支配と国家』

青木書店 二四〇頁 二〇六〇円

現代日本の社会と国家の構造を説明しようとした好著である。著者自ら「出口なし」の日本社会と国家の特殊な構造とその根拠の説明が課題であると述べている。内容は以下の通り。①現代日本国家論の課題 階級的支配Ⅱ従属関係の特殊な構造、国家装置・国家イデオロギー、②現代日本社会の権威的構造と国家―権威的支配構造の原基的形態、企業の権威的支配構造の社会への浸透、社会的支配構造の国家関係への普遍化。③現代日本の国家・法の構造―現代日本国家・法の特殊な構造、その歴史的形成過程、その再編成と矛盾。④高度成長期における戦後型支配構造の成立―新たな視角、高度成長期の位置、高度成長期の社会的支配構造の形成、戦後民主主義。⑤八〇年代日本の国家体制・その方向―帝國主義論検討の意味、帝國主義国家戦略の形成過程、支配体制再編成の焦点。

●短評

「古在由重 人・行動・思想」編集委員会

『古在由重 人・行動・思想』

同時代社 四〇〇頁 三六〇〇円

一九九〇年三月六日に亡くなった哲学者古在由重を追悼し回想するために、ゆかりのあった多くの知識人や活動家によつていねいに仕上げられた本である。「戦前・戦中」「戦後の軌跡」「哲学塾」の営み」「その思想の周辺」「その身辺から」ゆつたりと分けられた章立ての中で、内外六十余人々が敬愛の念をこめて古在由重を書き綴っている。徐京植氏の「勇氣凛々の人」という感動的な一文をはじめとして日高六郎・家永三郎・鈴木正・小川晴久・太田哲男・吉田傑俊・久保文・葉山峻など各氏の文章から浮かび上がってくるのは、デモクラットであり自由の精神に満ちた風格ある唯物論哲学者としての古在由重像である。久野収氏の問題提起や巻末の貴重な年譜・著作年表も含めて、本書は今日の日本の哲学のあり方を考えようとする人々にとつて必須の文献の一つである。

●短評

荒川 弘著

『4℃の謎——水の本質を探る』

北海道大学図書刊行会 二四八頁 二四七二円

「アルケールは水である」とタレスは唱えた
と言うが、こう思っても不思議はないほど、
水はわれわれの環境と体の重要な構成要素で
ある。しかし身近にあるからと言って、当
り前の物質ということではない。水は極めて
特殊なのである。そして、その特殊性の科学
的な解明が進んだのはつい最近である。一九
六〇年代以降のX線回折やコンピュータ・シ
ミュレーション、八〇年前後からの中性子回
折などの研究によって、五個の水分子が四面
体配位した構造が一〇のマイナスイ秒のオ
ーダーの時間でたえず生成・消滅している
という、水の液体構造が解明されてきた。それ
とともに体内での水の役割もしだいに明確に
なってきた。本書は、このような研究の過
程と成果とを、要領よく、鮮明に興味深く
描き出している。ただし物理化学の若干の素
養がないと読むのは苦しいかもしれない。

季刊 思想と現代

定価・年間定期購読料金改訂のお知らせ

季刊・思想と現代をご愛読いただき、ありがとうございます。

さて、私共は読者の皆様のご要望にかなったより良いものをお届けするべく努力を続けておりますが、現在、出版をめぐる諸状況はきわめてきびしいものになっています。特に印刷・製本・運送業界は慢性的な人手不足による経営困難に直面しており、関係諸料金の高騰から、私共も本誌定価ならびに年間定期購読料金を以下のとおり改訂せざるを得なくなりました。

◆29号から……………定価1442円(本体1400円・税42円)

◆29号からの新規お申し込み年間定期購読料金(含送料)……6808円

今後とも読者の皆様によりご満足いただけるよう努力を重ねる所存ですので引き続き本誌をご愛読くださいますようお願いいたします。

株式会社 白石書店

社会主義の危機からの再生を求めて

奥谷浩一

今年八月末のソ連における反ゴルバチョフ・クーデターは衝撃的な事件であった。これに対する市民と新しい民主勢力の反撃、クーデターの失敗、これによって一挙に進行したソ連共産党の解党・崩壊と集権的連邦制の解体、さらには軍産複合体・官僚主義的命令経済の解体とこれによる全面的な市場経済化をめざし、資本主義経済へと復帰するかに見える、米ソ合作のアリソン・ヤブリンスキー案の実施などの引き続く新たな局面はさらに劇的であった。社会主義の本来本元のソ連における、「社会主義の清算」とも受け取れるこうした

新たな状況のもとで、社会主義の危機の根源とその新たな可能性を問うという理論的課題が昨年に比べてまた一段と重要性・緊急性の

度を強めていると言わなければならない。本誌がこのクーデター以前の企画としてではあるが、こうしたより深刻な局面と対峙しながら社会主義の新たな可能性を探ろうとする試みを集として組んだことは、まさしく時宜にかなったものとして歓迎したい。それだけにいつそう、本誌が安易な「社会主義の清算」論などの潮流に対抗して、新しい理論的角度から「社会主義の水脈」を掘り当て、「社会主義の新しい可能性」への確信を説得的に提起してくれるのではないかと期待されたのであった。

冒頭のダグラス・ラミス氏と後藤道夫氏との対談をはじめ、多くの特集論文からは、「一九八九年」の東欧革命をはじめとする社

会主義国の自己変革の試みを歓迎し、また社会主義経済が世界市場経済へと併呑された事実を直視しつつも、「市場経済」の導入にともなう、逆への揺れ戻し現象としての「資本主義化」を懸念し、この揺れ戻しのなから、社会主義がなおも資本主義の科学主義・生産主義などにたいする批判者でありつづけ、これに代わりうる新たな体制を提示しようのだという威信を回復することに期待する気持ちが伝わってくる。わたくしもまた、こうした立場に共感し、大いに啓発と知的刺激をうけたことを前置きしたうえで、本誌を読みながら感じたことをいくつか列記したい。

(一) マルクスまたはマルクス主義の「誤り」が語られる状況が到来している。二十世紀社会主義の実験にいらして、これまでの既存マルクス主義の理論のどこに誤りがあり、不十分な点があったのかについて、哲学・経済学・政治学・社会学・歴史学などの全分野にわたって、日本のマルクス主義者の英知を結集した集団的で総合的な再検討が緊急に必要であろう。本誌の対談者からも、社会主義が経済発展の最善の方法であるというオプティミズム、科学技術の進歩にたいする過度の信頼、労働を人間的にすることと科学技術の高度の

発展による労働時間の短縮がどう具体的に労働の内容と生産のシステムを変えてゆくのかについての展望の欠如、資本主義で使われている科学技術をそのまま充用して分業をなくするという見方、テラー・システムの採用などに示されるレーニンの生産性優先とマルクスとの相違などについて反省・批判・疑問が提起されている。また、階級廃止後の社会主義についても、労働者層の均質化を想定するあまり、これと政治権力とのあいだの矛盾の解消のみを強調してきたこと、国家論についても国家が消滅して管理と調整機能だけが残るといのように図式的・楽観的に考えてきたことなどについても疑問が提起されている。これらは確かに、従来のマルクス主義の再検討にあたっては第一に取り上げられるべき諸問題だと思われるが、これらの諸問題をたんに断片的に指摘するだけにはとどまらず、これらを含めてさらに総合的・系統的に、従来のマルクス主義の理論的欠陥を現代社会主義の実験にてらして全体的・全面的に再検討する大きな理論的作業へと結実・発展させてもらいたいものだと思う。

(二) 特集論文のなかで展開されているソ連・東欧革命の総括とそこでの社会主義の問題点

の指摘にはおおむね同感であるが、感ずるところをひとつだけ述べたい。佐藤和夫論文は、ユーゴの自主管理型を含めてソ連・東欧の社会主義の最大の問題点を「押しつけとしての社会主義」、対外的にはソ連型社会主義の輸出による画一化、対内的には共産党の一党独裁とこれの事実上の国家機関化による社会生活全般における命令システム化、そのもとでの集中・管理・官僚化、その結果としての労働者からの自己決定権と自己責任・労働意欲の剝奪に求める。そして、オナイダ・コミュニティの実験をも含めて、従来の社会主義的ユートピアの建設が失敗に終わったことも、この指導者自身が点検・教育されることのない上からの指導・強制に根本的な原因があったと主張する。確井敏正論文も、東欧社会主義が内包していた根本問題を中央集権的・指令的計画経済と民主主義の実質的欠如のふたつに総括し、さらにこれらの共通の根源として政治的と経済的との両面における市場原理の不在を指摘する。確かにそのとおりと思われるが、しかしもしそうだとすれば、独裁と停滞をはじめとする様々な弊害を生み出し、それゆえにソ連・東欧革命において最大の打倒の対象となったものが、国家機関と化した

共産党の組織原則、すなわち少数の職業革命家による上からの指導と軍隊的な規律によって守られた「民主」集中制という名の、西欧の近代民主主義とは基本的に対立し、あのスターリン主義もまたそこから生育しえたところの組織原則にはかならないこと、そしてこの組織原則が一党独裁と国家機関化を通じて社会全体にまで拡張された事実の分析を避けて通ることは不可能であろう。これについては佐藤論文に若干の言及はあるものの、この問題にまで突っ込んだ本格的な分析と批判のメスを入れることなくしては、問題の根源を把握し、ソ連・東欧革命を全体的に総括・評価したことはならないのではないかという印象をもった。

(三) 特集論文の執筆者がそれぞれ、現状の資本主義からの活路をなおかつ社会主義に見いだそうとする立場から論文をまとめていることはよくわかるが、しかし、いずれも「社会主義」の定義と概念規定を明確に示さないままに各人各様に「社会主義の水脈」を論じており、そのために社会主義の新しい可能性と展望を語るうえでいまひとつ説得力が欠けていたのではないであらうか。たとえば、ダニエル・ベルを論ずる矢澤修次郎論文は、個

人主義・功利主義が社会福祉・共同体への利害関心に従属する資本主義衰退後の脱工業社会というベルの展望のなかで、とりわけ資本主義の文化矛盾を解決する「公共的なニードと公共の欲求とを充足するための機関」としての「公共家族」の概念に注目する。しかし、このような学説が「社会主義の社会学」であると言いつたためには、まず執筆者自身の社会主義の概念規定が提示される必要があったであろう。また座談会の対談者も「いまの体制を超えなければならぬのだということを表示する言葉」としての社会主義について語り、佐藤論文もこれからの社会主義への可能性をもつものとしてスペインのモンドラゴン協同組合や日本の生産者協同組合の試みに注目するが、これらが従来言われて来た社会主義とどの点で異なり、どの点でリンクするのかは必ずしも明らかにされていなかったように思われる。その分だけ、社会主義の新たな可能性を確信をもって読者に訴える点で、迫力が弱められたように思われる。

(四) 現在最も緊急の課題は、たとえば、「共産主義者は、その理論を私的所有の廃止という一語に要約しうる」(マルクス『共産党宣言』)という思想がはたして今日もなお

妥当性をもちうるのか、もし妥当性をもちうるとすればそれはいかなる意味で、またいかなる現実的諸条件のもとでそうなのかという根本的な問題の検討であろう。世界的な実験を経験しつつある渦中のソ連においてこれが現実の問題となっており、資本主義を全面的に導入するかに見える経済改革案の実施の前に、改革派知識人のなかにも「生産手段の社会的所有の民主化と(非国家化)」(八九年のザスラーフスカヤ)、「私的所有を(現存の社会的所有と)対等のあるいは(それよりも)優勢な形態として復活させることは、多かれ少なかれ完全な社会主義の清算なのだ」(クランヴィリ)という原則的な主張があることは周知の通りである。「社会主義の新しい可能性」を論じようとするば、こうした根本的・原理的問題にまで問題次元を深めた議論が不可欠であるし、こうした動きとのかかわりで社会主義の水脈が論じられる必要があったのではないであろうか。こうした検討なしには、ソ連・東欧革命がただちに「社会的生産の計画的組織化」や「生産手段の社会化」の破綻を帰結したのだとみる社会主義清算論に真に對抗しえないであろう。

(五) 関曠野論文は、着想の面白さはあるも

の、学問的に見れば大いに検討の余地を残す論点を多く含み、とりわけマルクスの理論の理解にこの傾向が著しい点で、他の論文と比較してやや異質であるように思われる。たとえば「労働者を自由な移動を禁じられた労働力としてギルドや国家の家父長主義的な保護と統制の下におく」ことがマルクスの労働力商品論に起因するかのような叙述は、根拠づけと論証が欠けているばかりか、内容の点でもきわめて問題であろう。

本誌が、マルクス主義の創始者たちの思想を二十世紀社会主義の実践と経験を踏まえて全体的に総括し、現代社会主義の実験場の坩堝のなかから二一世紀を展望しうる新しい社会主義の理論を創出するという、現実がわれわれに迫っている理論的課題の真剣で熱意に満ちた討議の場となることを期待してやまない。

(おくや こういち 札幌学院大学・哲学)

■編集後記

○本号は、哲学はいま何をなすべきかという趣旨で、哲学そのものをテーマに取り上げました。本誌は哲学・思想系の雑誌ではありませんが、〈哲学〉をそのものとして特集したことはほとんどなかったと思います。いきなり自分の顔と向かい合わされた感じで、哲学研究者にとってはやりづらい面があるなど感じました。

●しかし、哲学研究者にとって本当のやりづらさは、現代世界と人間社会の変貌を目前にして、従来の哲学・思想のやり方が通用しなくなってきた点にあるのではないかと思います。いまこそ、本音の、しかもクリエイティブな哲学が要求されているでしょう。

○本号は哲学者の沢田充茂先生をお招きして、先生の生き方と学問の接点について語っていただきました。本誌は多くの非会員の方を招いて対談などをしていただいています。哲学の専門家を外部からお招きしたのは初めてのことでないかと思えます。お年にもかかわらず（失礼！）、先生の柔軟で若々しい精神に圧倒された感がありますし、哲学の学派にこだわらない民主主義的精神がお話のなかで横溢していました。

●特集論文はいかがだったでしょうか。○このテーマで書いていただきたいというのならばとにかく、哲学そのものを現段階で論ぜよということには、哲学研究者は大いに苦悶を覚えたことでしょう。やりにくいテーマでがんばらない。

○今回また、社会科学と自然科学の方面からお一人ずつ哲学との関わり、哲学への注文を書いていただきました。非哲学の専門家からすると、哲学などに関心をもたず自分の研究に没頭するタイプも多いようです。それどころか、哲学は有害と断定する科学者もいるとのこと。いずれにしても、哲学が「万学の女王」のようにふるまうのではなく、相互にコミュニケーションしあい、学びあえる雰囲気が大切なのでしょう。

●本誌の読者として一言すれば、哲学研究者の側からの非哲学領域への遠征、つまり「学校哲学からの脱出」は一定程度なされていると思えます。フェミニズムや民族問題にせよ、それは本誌のいままでの特集タイトルをみれば明らかです。しかし、社会科学、とくに自然科学の専門家との共同研究ないしコミュニケーションはまだまだ不十分といえるのではないのでしょうか。

○この特集で大事なことを忘れていたような気がします。それは、ごく普通の人々が哲学にたいしてなにを期待しているのか、あるいはなんにも期待していないのか、それはなぜなのか、という問題です。唯物論研究協会は哲学・科学と大衆との結びつきを積極的に求めていくことを一方針としているはずですが、これは将来の課題とさせてください。

●今号から、新しいシリーズとして『古典探訪』というコーナーを設けました。あらゆるものが混沌の中に投げ込まれているこの時代においては、様々な思い込みも含めて過去の一切の常識が問い直されているといえます。このシリーズでは、これまで名前ばかりが有名で、実際には知られていなかった古典を紹介しつつ、「社会主義」とは何か「唯物論」とは何か……ということを考えてみたいと思います。

○最後に一筆。『理想』六四七号の「学会インフォメーション」に「唯物論研究協会」の紹介が前事務局長の後藤道夫さんの手によって書かれています。ご覧下さい。（島崎）

『思想と現代』第28号◎
編集 唯物論研究協会
発行所 唯物論研究協会
発売元 株式会社白石書店
印刷所 東銀座印刷出版株式会社

1992年1月31日発行（季刊）定価1236円（本体1200円・税36円）
埼玉県所沢市並木2-2-3-504
発行人 古田 光
東京都千代田区神田神保町1-28 〒101 ☎03-3291-7601
製本所 坂本製本

いま世界に光る自主独立路線の真価！

ソ連覇権主義の解体と 日本共産党

不破哲三

四六判・上製／税込1500円〒260

ソ連共産党の解散を歓迎したのはなぜ？ 覇権主義は世界でどんな有害な役割を？ それとの生死をかけた闘争の歴史をふまえ、日本共産党の路線と科学的社会主義の今日的意義を説く。

好評
発売中

日本共産党綱領と
歴史の検証

不破哲三

四六判・上製
税込1500円〒260

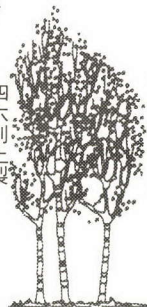
〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-25-6 新日本出版社 ☎03(3423)8402 FAX03(3423)8419

日本思想史

序説

岩崎允胤著

四六判上製
税込定価5000円〒410



●日本歴史の激動を先導した
思想家たちの営み

「記紀」神話から能・狂言、茶の湯まで、先人は、どのような政治・歴史思想、世界観・宗教観、そして美意識を練りあげてきたか。時代の転換を見すえながら、日本人の達成した知性と思惟の特徴をつぶさに検討し、その豊富な遺産を「われわれのもの」として確立するための壮大な日本思想史。反動的「日本学」への痛烈な反撃。

日本文化論と深層分析

岩崎允胤著 四六判上製 税込1800円〒260

深層文化論・深層心理学への体系的批判。

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-25-6 新日本出版社 ☎03(3423)8402 FAX03(3423)8419

現思想 季刊 代想 と

定価1,236円(本体1,200円・税36円)

ISBN4-7866-1039-9 C1010 P1236E